

令和5年度 業務年報



Annual Report 2023
Fukushima Agricultural Technology Centre

福島県農業総合センター

目 次

I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革	I	1
2 所在地	I	3
3 組織及び事務の概要	I	4

II 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧	II	1
2 共同研究、受託研究、研究協定一覧	II	7
3 試験研究の概要	II	8
A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進	II	8
B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進	II	20
C 県産農林水産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進	II	22
D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進	II	31
E 安全・安心な県産農林水産物の安全供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進	II	36
4 試験設計・試験成績検討会の開催状況	II	44
5 試験研究成果の公表	II	45
6 品種登録・職務発明	II	49
7 技術開発に伴う表彰・学位取得	II	50
8 有識者懇談会の開催	II	50
9 技術・研究に関する職員研修	II	50
10 試験研究推進会議の開催	II	51
11 所内ゼミ	II	51
12 初任者研修・新規採用職員研修	II	52
13 その他研修	II	52

III 地域農業支援

1 技術移転・技術支援	III	1
(1) 技術移転セミナー	III	1
(2) 成果発表会	III	2
(3) 技術支援（鳥獣害防止対策）	III	2
2 指導・啓発活動	III	3
(1) 研修会	III	3
(2) 技術指導資料	III	7
(3) 技術相談対応件数	III	8
3 主要農作物種子生産実績	III	9
4 オリジナル品種（園芸作物等）種苗生産実績	III	10
5 オリジナル品種の親株等の供給実績	III	11
6 家畜管理及び生産実績	III	12
(1) 畜産研究所本所	III	12
ア 家畜繋養実績	III	12
イ 各家畜繋養状況	III	13
ウ 各種生産実績	III	14

(2) 沼尻分場	III	17
----------	-----	----

IV 先進的農業者育成・支援

1 農業短期大学の業務実績	IV	1
(1) 概要	IV	1
(2) 農業経営部の取組	IV	1
ア 学生の状況	IV	1
イ 専修教育の状況	IV	1
ウ 進路指導の取組	IV	4
エ 学生募集の取組	IV	5
オ 学生数	IV	6
カ 教育科目	IV	6
キ 非常勤講師一覧	IV	8
ク 教育行事	IV	9
ケ 各種表彰者	IV	10
コ 卒業生の進路状況	IV	10
(3) 研修部の取組	IV	11
ア 研修実施状況	IV	11
イ 研修実績	IV	11
2 福島県農業総合センター農業短期大学校運営会議の開催	IV	15

V 食の安全・環境と共生する農業支援

1 安全農業推進部の業務実績	V	1
(1) 指導・有機認証課の業務	V	1
ア 農薬に関する業務	V	1
イ 農作物の野生鳥獣被害とりまとめ	V	2
ウ 肥料に関する業務	V	2
エ 飼料に関する業務	V	3
オ 有機認証に関する業務	V	3
(2) 発生子察課の業務	V	4
ア 病害虫発生子察事業	V	4
イ 病害虫診断同定	V	5
ウ 侵入調査事業	V	5
エ ベトナム向け輸出なし検疫	V	7
オ 主要病害虫の発生状況	V	7
(3) 分析課の業務	V	12
ア 農林水産物を対象とした緊急時環境放射線モニタリングの実施	V	12
イ その他検査の実施	V	13
ウ 放射性物質測定技能試験	V	13
2 有機農業推進部の業務実績	V	14
(1) 有機農業推進担当者連携会議の開催	V	14
(2) 有機農業技術実証の取組	V	14
(3) 各種技術研修会等の開催	V	15
(4) 有機農業者組織への活動支援	V	15
(5) 広報誌「オーガニック通信」の発行	V	15
(6) 農業総合センター農業短期大学校での有機農業の講義・研修の実施	V	16

VI 県民との交流・情報発信

1 交流事業	VI	1
(1) 第16回農業総合センターまつり	VI	1

(2) 農的楽しみセミナー	VI	1
(3) 子どもアグリ科学教室	VI	1
(4) イモ掘り体験学習	VI	1
(5) 第14回田んぼの学校	VI	1
(6) 農業総合センター農業短期大学校の取組	VI	1
2 視察見学者の受入状況	VI	2
3 施設の利用状況	VI	3
4 研究成果の発表	VI	4
(1) 学会等研究発表	VI	4
(2) シンポジウム等講演	VI	7
(3) 学会誌等投稿	VI	7
(4) 雑誌等投稿	VI	8
5 刊行物	VI	9
6 主要作物の生育情報の提供	VI	9
7 インターネットによる情報提供	VI	10
8 マスメディアによる報道	VI	10
9 福島県インターンシップの受入れ	VI	13
VII 職員・財産		
1 職員数	VII	1
2 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数	VII	1

I 農業総合センターの概要

1 機能と沿革

(1) 機能

福島県農業総合センターは、農業関係の試験研究機関、病虫害防除所、肥飼料検査所及び農業短期大学校を再編統合し、5つの機能(ア 技術開発・企画調整機能、イ 地域農業支援機能、ウ 先進的農業者育成・支援機能、エ 食の安全・環境と共生する農業支援機能、オ 県民との交流・情報発信機能)を兼ね備えた本県農業振興の新たな拠点として平成18年4月郡山市日和田町に開所した。

ア 技術開発・企画調整機能

共通研究部門(経営・作業技術・生物工学・生産環境)、専門研究部門(水田畑作・園芸・果樹・畜産)、地域研究部門(会津・浜)が緊密に連携し、統合集中化のメリットを最大限に発揮することにより、実用性の高い技術の迅速かつ効率的な開発に取り組む。

イ 地域農業支援機能

地域農業を支援するため、既存の技術のみでは解決が困難な地域の課題に対し、現地の普及指導員、農業者、農業団体及び市町村等と共同して解決に当たる。

ウ 先進的農業者育成・支援機能

先進的な技術や最新の知見を営農条件に合った形に組み立て、実用的な新技術として生産現場に適応させることにより、複雑化・高度化する生産現場の課題解決の迅速化を図る。

農業教育面では、農業短期大学校と研究部門が一体的に地域を先導する農業後継者の育成に当たる。

エ 食の安全・環境と共生する農業支援機能

農業の振興には、環境に配慮し、消費者のニーズを重視して農産物を生産していくことが重要であるため、農業生産面からの環境保全や農業等生産資材の適正使用の推進、農産物の安全性の確保に積極的に取り組む。また、県内における有機農業の普及拡大を強力に支援する。

オ 県民との交流・情報発信機能

センター整備の基本理念の一つである「開かれた試験研究機関」を具現化し、県民の様々な期待に応えられる交流・学習拠点としての役割を果たすため、県民の憩いの場、子供たちの農業体験や食農教育、高齢者の生涯学習等の機会を提供する。

(2) 沿革

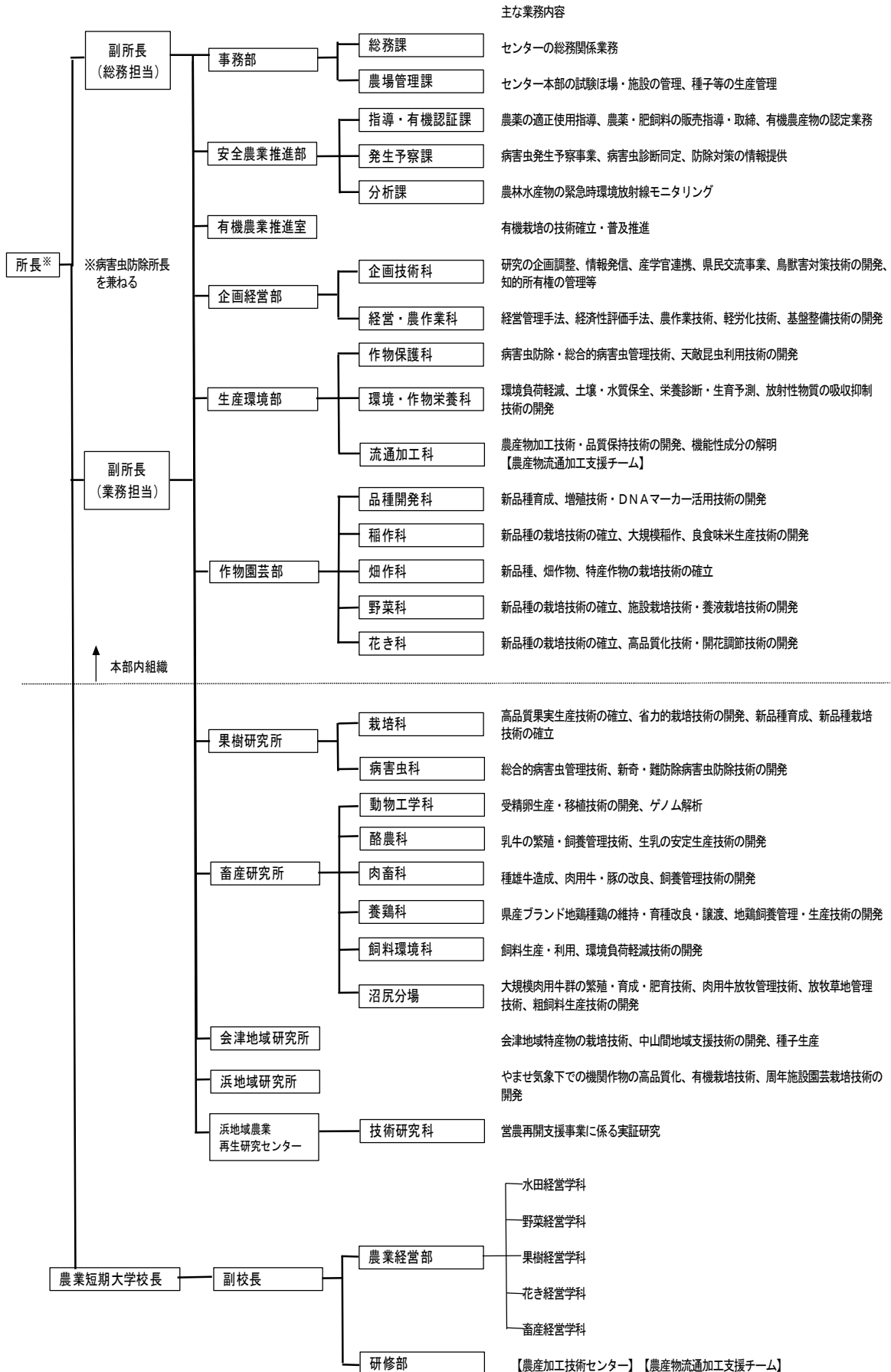
年 度		事 項
和暦	西暦	
明治 29 年	1896 年	安積郡小原田村(現 郡山市小原田)に農事試験場(後の農業試験場)を設置
34 年	1901 年	福島町(現 福島市)に肥料検査室(後の肥飼料検査所)を設置
35 年	1902 年	安達郡高川村(現 郡山市熱海町)に種馬飼育場(後の畜産試験場)を設置
43 年	1910 年	郡山町虎丸町(現 郡山市虎丸)に移転
大正 3 年	1914 年	伊達郡梁川町(現伊達市)に原蚕種製造所(後の蚕業試験場)を設置
7 年	1918 年	河沼郡若宮村(現 河沼郡会津坂下町)に農事試験場特別試験地(後の農業試験場会津支場)を設置
12 年	1923 年	石城郡神谷村(現いわき市)に石城分場(後の農業試験場いわき支場)を設置
14 年	1925 年	田村郡片曾根村(現田村市)にたばこ試験場を設置
昭和 10 年	1935 年	信夫郡平野村(現 福島市飯坂町)に農事試験場信達分場(後の果樹試験場)を設置 西白河郡矢吹町に県立修練農場(後の農業短期大学校)を設置 ※改称、統廃合により昭和 63 年(1988 年)現在名称
		相馬郡八幡村(現 相馬市成田)に農事試験場相馬水稻試験地(後の農業試験場相馬支場)を設置
		耶麻郡猪苗代町(現 猪苗代町)に猪苗代試験地(後の農業試験場冷害試験地)を設置
11 年	1936 年	郡山市に種鶏場(後の養鶏試験場)を設置 ※昭和 40 年(1965 年)改称、郡山市富田町に移転
17 年	1942 年	種馬飼育場を信夫郡荒井村(現 福島市)に移転(後の畜産試験場)
23 年	1948 年	安積郡富田村(現 郡山市富田町)に農事試験場を移転※昭和 36 年(1961 年)改称
27 年	1952 年	県内 16 か所に病虫害防除所を設置
33 年	1958 年	県特用作物原種農場をこんにゃく試験地として改称移管
42 年	1967 年	県農業短期大学校を設立

年 度		事 項
和暦	西暦	
49 年	1974 年	会津農業センターの設立
54 年	1979 年	会津支場を会津農業センター庁舎に移転 農業経営大学校を設置
55 年	1980 年	園芸試験場を果樹試験場に改組
63 年	1988 年	農業短期大学校、農業経営大学校及び会津農業センター(長期研修課程)を統合し、県立農業短期大学校を開校(矢吹町)
平成 8 年	1996 年	農業試験場創設 100 周年
14 年	2002 年	梁川支場を開場し、蚕業試験場を廃止
18 年	2006 年	農業総合センター発足 試験研究機関(農業試験場(本場・4 支場・2 試験地)、果樹試験場、たばこ試験場、畜産試験場(本場・1 支場)、養鶏試験場)、農業短期大学校、病虫害防除所、肥飼料検査所を再編統合 梁川支場を廃止
23 年	2011 年	センター本部安全農業推進部に分析課を設置
25 年	2013 年	独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター福島研究拠点内(福島市)に福島市駐在を設置
27 年	2015 年	福島市駐在を廃止し、南相馬市に浜地域農業再生研究センターを設置 畜産研究所養鶏分場(郡山市)を廃止
28 年	2016 年	畜産研究所(福島市)に養鶏科を設置
29 年	2017 年	農業短期大学校を農業経営部 5 学科に再編し、研究科を廃止

2 所在地

- (1) 福島県農業総合センター 本部
〒963-0531 郡山市日和田町高倉字下中道^{しもなかみち}116 番地
TEL 024-958-1700 FAX 024-958-1726
- (2) 果樹研究所
〒960-0231 福島市飯坂町平野字檀^{だん}の東^{ひがし} 1 番地
TEL 024-542-4191 FAX 024-542-4749
- (3) 畜産研究所
〒960-2156 福島市荒井字地藏原甲 18 番地
TEL 024-593-1096 FAX 024-593-4977
- (4) 畜産研究所 沼尻分場
〒969-2752 耶麻郡猪苗代町大字蚕養^{こがい}字日影^{ひかげ}山乙 3696 番地
TEL 0242-64-3321 FAX 0242-64-2844
- (5) 会津地域研究所
〒969-6506 河沼郡会津坂下町大字見明^{みみょう}字南原 881 番地
TEL 0242-82-4411 FAX 0242-82-4416
- (6) 浜地域研究所
〒979-2542 相馬市成田字五郎右エ門橋 100 番地
TEL 0244-35-2633 FAX 0244-35-0319
- (7) 浜地域農業再生研究センター
〒975-0036 南相馬市原町区萱浜^{かいぼま}字巢掛^{すかけ}場 45 番 169
TEL 0244-26-9562 FAX 0244-26-9563
- (8) 農業短期大学校
〒969-0292 西白河郡矢吹^{いっぽんぎ}町一本木 446 番地 1
TEL 0248-42-4111 FAX 0248-44-4553

3 組織及び事務の概要



Ⅱ 技術開発・企画調整

1 試験研究課題一覧

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進					
A1	農業における総合的な放射性物質対策の研究開発				
A1-1	放射性物質の分布状況の把握				
A1-1-1	土壌の経年調査	2021	2025	生産環境部 果樹研究所 畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	外部資金※1
A1-1-2	農地における放射性セシウム濃度深度分布の把握	2021	2025	生産環境部	繰入金
A1-1-3	郡山市における大気浮遊塵及び降下物中の放射性セシウム濃度調査	2021	2025	生産環境部	繰入金
A1-1-4	果樹における放射性物質濃度の経年変化の把握	2021	2025	果樹研究所	繰入金
A1-2	放射性物質の吸収抑制技術等の確立				
A1-2-2	基準値超過等要因解析	2021	2025	生産環境部	繰入金
A1-2-3	県内農地土壌の交換性塩基含量の実態解明	2021	2025	生産環境部	繰入金
A1-2-4	非交換性カリ含量簡易測定法の開発	2021	2023	生産環境部	繰入金
A1-2-6	除染後水田に対する中長期的な地力の実態解明と効果的な地力回復技術の開発	2021	2023	生産環境部	繰入金
A1-2-8	水稻の生産性と安全性の評価ならびに放射性物質移行抑制の実証	2021	2025	作物園芸部	繰入金
A1-2-9	畑作物の放射性セシウム吸収に対する土壌の影響解明	2021	2025	作物園芸部	繰入金
A1-2-10	カキ・ユズにおける放射性物質の吸収抑制技術等の確立	2021	2025	果樹研究所	繰入金
A1-2-11	避難指示区域等における農作物中放射性セシウム吸収抑制技術の開発	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	繰入金
A1-2-12	放射性セシウム濃度低減のための野菜栽培と調理加工	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	繰入金
A1-2-13	再浮遊物質を含む大気中の放射性セシウムの動態と農地・農作物への影響の解明	2023	2023	浜地域農業再生研究センター	外部資金※1
A1-3	特定復興再生拠点区域等の円滑な営農再開に向けた技術実証				
A1-3-1	計測ロボットを活用した放射性物質等分布実態の把握	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-2	営農再開を阻害する加害動物の行動特性や動物種把握による獣害防止策の提案	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-3	通い農業支援システム等を活用した栽培状況の可視化と評価	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-4	緑肥作物等の利用による地力回復技術の開発と蜜源利用	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-5	効率的雑草管理技術の開発と実証	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-6	特定復興再生拠点等における農作物栽培の生産性と安全性の評価	2021	2025	畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-7	放射性物質移行抑制技術の実証・開発と畑作物の安全性の評価	2021	2025	作物園芸部	外部資金※2
A1-3-8	草地における放射性セシウム吸収抑制技術の開発・実証と未除染牧草地利用可否基準の策定	2021	2025	畜産研究所 浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A1-3-9	山羊乳及び山羊肉の放射性セシウムの移行調査	2021	2023	畜産研究所	外部資金※2

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
A1-3-10	生産現場における最適な放射性セシウム移行リスクの評価手法および圃場特性に合わせた移行低減技術の提案	2021	2025	生産環境部	外部資金※2
A2	避難地域等の営農再開を支える技術の実証				
A2-1	避難地域の営農再開を支援する研究				
A2-1-1	避難地域等における営農再開のための支援研究	2021	2025	浜地域農業再生研究センター	繰入金
A2-2	広域エリアを対象とした大規模水田営農における生産基盤技術の確立実証				
A2-2-1	広域エリアにおける水田輪作栽培管理技術の開発・実証	2021	2025	作物園芸部 浜地域研究所	外部資金※2
A2-2-2	営農再開に対応した大規模水田輪作体系の実証	2021	2025	企画経営部 作物園芸部	外部資金※2
A2-2-3	広域エリアにおける ICT を用いた省力的圃場管理技術	2021	2025	生産環境部	外部資金※2
A2-2-4	飼料用トウモロコシの安定多収、加工・調製技術の開発と実証	2021	2025	畜産研究所	外部資金※2
A2-2-5	経営管理システムを活用した経営データ分析・活用手法	2021	2025	企画経営部	外部資金※2
A2-3	先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷技術の確立				
A2-3-1	施設果菜類の雇用労力とロボットを作業主体とした大規模経営技術の開発・実証	2021	2025	企画経営部 作物園芸部 浜地域研究所	外部資金※2
A2-3-2	加工適性の高いコムギの導入による省力高収益生産技術の開発・実証	2021	2023	作物園芸部	外部資金※2
A2-3-3	露地野菜栽培における難防除雑草優占化機構の解明と対策技術の確立	2021	2025	作物園芸部 浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
A2-4	避難地域の営農再開を促進する先端プロ技術の社会実装				
A2-4-1	花きの計画的安定生産技術の実証	2021	2025	作物園芸部	国庫
A2-4-2	早期成園化が可能な樹形によるナシ、ブドウ、モモの省力・高品質生産技術の実証	2021	2025	果樹研究所	国庫
A2-4-3	肉用牛の AI 超音波肉質診断技術の実証	2021	2025	畜産研究所	国庫
B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進					
B1	先端技術を活用した新たな農業生産技術の開発				
B1-1	イノベーションによる避難地域等の新たな農業生産技術の開発				
B1-1-1	稲作の大規模化・省力化に向けた農業用水利施設管理省力化ロボットの開発	2021	2023	企画経営部	外部資金※2
B1-1-2	「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のパラツキ改善技術の開発	2021	2023	浜地域農業再生研究センター	外部資金※2
B1-1-3	ICT・放牧を活用した肉用繁殖雌牛管理技術の効率化	2021	2025	畜産研究所	外部資金※2
B1-2	スマート農業技術を活用した農業生産技術の確立				
B1-2-2	データベースを活用したスマート農業経営の構築	2021	2023	企画経営部	一般財源
B1-2-3	花粉採取と受粉作業の省力化を可能にするスマート農業技術の開発	2022	2024	果樹研究所	外部資金※11
B1-3	先端技術を活用した省力的栽培技術の確立				
B1-3-2	IoT による遠隔監視システムを活用した育苗管理の省力化技術開発	2021	2023	企画経営部	一般財源

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
B1-3-3	「米処」会津地域における新たな稲作経営の展開のための栽培技術の確立	2021	2023	会津地域研究所	外部資金※11
B1-3-5	ブロッコリー選別自動収穫機の機械化栽培体系の確立	2022	2024	企画経営部 作物園芸部 浜地域研究所	外部資金※11
B1-3-6	ブロッコリー栽培における一斉収穫・出荷・販売体系の構築	2021	2023	企画経営部	外部資金※7
B1-3-7	ICT・IoT 技術を活用した花きの新たな農業生産技術の確立	2021	2025	会津地域研究所	一般財源
B1-3-8	大規模酪農経営における飼養管理技術の確立	2021	2024	畜産研究所	一般財源
C 県産農産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進					
C1	市場ニーズに対応したオリジナル品種・系統と生産技術等の開発				
C1-1	個性豊かな県オリジナル水稻、野菜、花き品種の育成				
C1-1-1	個性豊かな県オリジナル水稻品種の育成	2021	2025	作物園芸部 浜地域研究所	国庫 寄附金※3 一般財源
C1-1-2	個性豊かな県オリジナル野菜の品種開発	2021	2025	作物園芸部	国庫 寄附金※3 一般財源
C1-1-3	個性豊かな県オリジナル花き品種の育成	2021	2025	作物園芸部	国庫 一般財源 寄附金※3
C1-1-4	個性豊かな品種育成のための促進技術開発	2021	2025	作物園芸部	外部資金※11 寄附金※3 国庫 一般財源
C1-1-5	バイテク活用による有料原種苗の長期保存・増殖技術開発	2021	2025	作物園芸部	一般財源
C1-2	作物、野菜、花きの有望品種・系統の評価				
C1-2-1	奨励品種決定調査	2021	2025	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	一般財源
C1-2-3	麦類育成系統の地域適応性試験	2021	2025	作物園芸部	外部資金※13
C1-3	作物、野菜、花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立				
C1-3-1	県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立	2021	2023	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	外部資金 ※4、※7 寄附金※3
C1-3-2	県オリジナル酒造好適米の栽培方法の確立	2021	2025	作物園芸部 会津地域研究所	国庫 一般財源
C1-3-3	野菜の有望系統・新品種の栽培技術の確立	2021	2023	作物園芸部	国庫
C1-3-4	花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立	2021	2025	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	国庫
C1-4	個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成				
C1-4-1	個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成	2021	2025	果樹研究所	寄附金※3 国庫 一般財源
C1-5	果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立				
C1-5-1	果樹系統適応性検定試験	2021	2025	果樹研究所	外部資金※5 一般財源

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
C1-5-2	県オリジナル果樹品種の安定生産・流通技術の確立	2021	2025	果樹研究所	国庫 一般財源
C1-6	個性豊かな県優良家畜等の改良				
C1-6-1	牧草・飼料作物の優良草種・品種の選定	2021	2025	畜産研究所	一般財源
C1-6-2	「フクシマ L2」の開放型育種	2021	2025	畜産研究所	一般財源
C1-6-3	県ブランド鶏の改良と開発	2021	2025	畜産研究所	一般財源
C1-6-4	胚移植技術を活用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立	2021	2025	畜産研究所	一般財源
C1-6-5	ゲノム情報を活用した家畜の育種改良技術の確立	2021	2025	畜産研究所	国庫 一般財源
C1-6-6	ゲノミック評価を利用した繁殖雌牛の評価	2021	2023	畜産研究所	寄附金※3
C2	農産物を「ふくしま」ならではの産品にする技術の開発				
C2-1	県産農産物の特性を活かした利用技術の開発				
C2-1-1	県産農産物の加工技術の開発	2021	2025	生産環境部	一般財源
C2-1-2	県産農産物の品質保持技術の開発	2021	2025	生産環境部	一般財源
C2-1-3	本県農産物の機能性成分の評価と利用技術の開発	2021	2025	生産環境部	国庫
C2-2	県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術の確立				
C2-2-1	モモせん孔細菌病に対する多目的防災網を活用した防除効果の検証	2021	2024	果樹研究所	国庫
C2-2-3	シュッコンカスミソウの輸出に向けた鮮度保持技術の開発	2021	2025	会津地域研究所	繰入金
C2-2-4	ナシ黒星病に対する秋期及び果実肥大後期の新防除体系の検証	2021	2024	果樹研究所	国庫
C2-2-6	花き類の保鮮流通技術の開発	2023	2023	作物園芸部	繰入金
C2-3	「福島牛」ブランド競争力強化技術の確立				
C2-3-1	「福島牛」の高付加価値生産システムの確立	2021	2025	畜産研究所	国庫 一般財源
C2-4	「ふくしま」ならではの地域特産物を活かした栽培・流通技術の確立				
C2-4-4	オタネニンジンの産地づくり支援に関する研究	2022	2025	作物園芸部 会津地域研究所	国庫
C2-4-5	エゴマ安定生産体系の確立	2022	2025	企画経営部 生産環境部 作物園芸部	国庫
D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進					
D1	気候変動に対応し農業生産の安定化に寄与する技術の開発				
D1-1	気候変動に対応した生産技術の開発				
D1-1-1	夏季高温条件下における良質・良食味米生産技術の確立	2021	2025	作物園芸部	寄附金※3
D1-1-2	主要野菜の安定生産技術の確立	2021	2025	作物園芸部	国庫 一般財源
D1-1-3	温暖化傾向に対応した花きの安定生産技術の確立	2021	2025	作物園芸部	一般財源

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
D1-1-4	主要農作物生育作柄解析調査研究	2021	2025	作物園芸部 会津地域研究所 浜地域研究所	一般財源
D1-1-5	温暖化に対応した果樹の生育予測技術及び生育障害 対策技術の確立	2021	2025	果樹研究所 会津地域研究所	外部資金※11 一般財源
D2	環境負荷を低減する農業生産に資する研究開発				
D2-1	中山間地における農地管理技術の開発				
D2-1-2	中山間地における農地保全管理の省力技術体系の確立	2019	2023	企画経営部	繰入金
D2-2	環境と共生する病虫害防除技術の開発				
D2-2-1	総合的病虫害管理（IPM）による環境と共生する農業 技術の確立	2021	2025	生産環境部	一般財源
D2-2-2	果樹における生物資源等を活用した環境と共生する 病虫害防除技術の開発	2021	2025	果樹研究所	一般財源
D2-3	有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立				
D2-3-1	有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立	2021	2025	有機農業推進室 企画経営部	国庫
D2-4	環境負荷の低減に向けた技術の開発				
D2-4-1	温室効果ガス排出軽減技術の確立	2021	2025	生産環境部	外部資金※1
D2-4-2	農地における土壌管理実態調査	2021	2025	生産環境部	国庫
D2-4-3	果樹園における省力的環境負荷軽減のための肥培管 理技術の確立	2021	2025	生産環境部	一般財源
D2-4-5	効率的肥培管理技術の確立	2021	2025	生産環境部	一般財源
D2-4-6	家畜排せつ物堆肥の高度利用技術の開発	2022	2026	生産環境部 畜産研究所	繰入金
D2-4-7	農業副産物を活用した高機能バイオ炭の施用体系の 確立	2023	2027	作物園芸部	外部資金※10
D2-4-8	放射性物質除染後ほ場におけるバイオ炭施用の作物 への影響と炭素貯留効果	2023	2027	生産環境部 浜地域農業再生研究センター	外部資金※10
E 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進					
E1	産地や経営体において収益性を高める技術の研究開発				
E1-1	水稻、畑作物の安定生産技術の確立				
E1-1-1	寒冷地における雑草イネ省力防除技術の開発	2021	2023	作物園芸部	外部資金※1
E1-1-2	省力的な稲作栽培に適応した雑草防除技術の確立	2021	2025	作物園芸部	一般財源
E1-1-3	畑作物の高品質・安定栽培技術の確立	2021	2025	作物園芸部	外部資金※9 一般財源
E1-1-4	マルチオミクス解析に基づく作物の安定多収に向け た栽培技術の開発	2018	2024	作物園芸部	外部資金※11
E1-1-5	葉たばこ特別調査	2021	2025	作物園芸部	外部資金※6
E1-1-6	水稻の疎播疎植と高精度２段施肥体系による省力多 収栽培技術の確立	2023	2026	作物園芸部	外部資金※11
E1-2	野菜・花きの安定生産技術の確立				
E1-2-1	地域特性を活かした施設花きの安定生産技術の確立	2021	2025	作物園芸部	外部資金※12 一般財源

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
E1-2-2	ふくしまの特色ある露地花きの安定生産技術の確立	2021	2025	作物園芸部	寄附金 ^{※3} 一般財源
E1-2-3	特産野菜の安定生産技術の確立	2021	2024	企画経営部 作物園芸部	国庫
E1-3	会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立				
E1-3-2	会津地域における野菜オタネニンジンとしての生産技術の開発	2021	2023	会津地域研究所	一般財源
E1-3-3	会津地域における秋ソバ「会津のかおり」の追肥の効果と作期分散	2023	2025	会津地域研究所	一般財源
E1-4	浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立				
E1-4-1	浜通りにおける大規模水田利用支援技術の開発	2021	2025	浜地域研究所	一般財源
E1-4-2	浜通りの気候を活かした野菜・花き等生産振興支援技術の確立	2021	2025	浜地域研究所	科研費 一般財源
E1-5	果樹の安定生産技術の確立				
E1-5-1	革新的栽培技術体系による果樹の栽培管理技術の確立	2021	2025	果樹研究所	寄附金 ^{※3} 一般財源
E1-5-2	モモ「あかつき」の核障害軽減対策技術の確立	2021	2025	果樹研究所	一般財源
E1-5-3	大規模経営に対応できるリンゴの省力・高品質生産技術体系の確立	2021	2025	果樹研究所	一般財源
E1-6	畜産の安定生産技術の確立				
E1-6-1	乳牛の安定生産技術の確立	2021	2023	畜産研究所	外部資金 ^{※1}
E1-6-2	肉用牛の安定生産技術の確立	2021	2025	畜産研究所	寄附金 ^{※3} 一般財源
E1-6-3	豚の安定生産・高付加価値化技術の確立	2021	2025	畜産研究所	繰入金 一般財源
E1-7	新たな技術・手法等の導入効果に関する経営的評価				
E1-7-1	GAPを活用した経営改善効果の検証	2022	2024	企画経営部	国庫
E2	農産物の安定供給に寄与する鳥獣被害防止・病害虫防除等に係る研究開発				
E2-1	野生鳥獣害対策技術の確立				
E2-1-1	ICT機器等を利用した野生鳥獣被害対策技術の確立	2021	2023	企画経営部	繰入金
E2-2	農作業事故防止技術体系の確立				
E2-2-1	農作業事故による怪我のデータ収集とその体系化	2021	2023	企画経営部	国庫
E2-3	新奇病害虫・難防除病害虫防除技術の確立				
E2-3-1	新奇・難防除病害虫に対する防除技術の開発	2021	2025	生産環境部	一般財源
E2-4	果樹の病害虫に対する防除技術の確立				
E2-4-1	果樹の重要な課題である病害虫に対する防除技術の確立	2021	2025	果樹研究所	外部資金 ^{※1} 一般財源
E2-4-2	果樹等の幼木期における生産安定技術の開発	2020	2024	生産環境部 果樹研究所	外部資金 ^{※1}
E2-4-4	果樹における農薬耐性、抵抗性を管理する技術確立	2021	2025	果樹研究所	一般財源
E2-4-5	果樹病害虫の防除法改善に関する試験	2021	2025	果樹研究所	外部資金 ^{※11} 一般財源

課題番号	試験課題（大課題・中課題・小課題）	始期	終期	担当部所	予算区分
E2-4-7	相次いで侵入した外来カミキリムシから日本の果樹と樹木を守る総合対策手法の確立	2022	2025	果樹研究所	外部資金※11
E2-4-8	輸出検疫対象害虫に対する効果的な防除技術の開発	2023	2023	果樹研究所	外部資金※1
E2-5	新農薬・新資材等の効率的利用法				
E2-5-1	安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化	2021	2025	生産環境部 作物園芸部 果樹研究所 会津地域研究所 浜地域研究所	外部資金※8

【備考】	※1 農林水産省	※8 公益社団法人福島県植物防疫協会
	※2 福島国際研究教育機構（F-REI）	※9 国立大学法人福島大学
	※3 JA グループ福島	※10 経済産業省
	※4 公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会	※11 生物系特定産業技術研究支援センター
	※5 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構	※12 一般社団法人日本種苗協会
	※6 日本たばこ産業株式会社	※13 一般社団法人全国米麦改良協会
	※7 新稲作研究会（公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会）	

2 共同研究、受託研究、研究協定一覧

（1）福島県農林水産部共同研究

- ア 低カドミウム遺伝子を付与したイネ系統の作成（福島県）
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構農業環境変動研究センター）
- イ 福島県オリジナルの閉花受粉性を持つ水稻品種の育成と特性評価
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究部門・生物機能利用研究部門）
- ウ 水稻いもち病ほ場抵抗性検定の東北地域向け基準品種の追加策定
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター）
- エ ゲノム育種による福島県オリジナル品種の開発（国立大学法人福島大学）
- オ 和牛における経済形質のゲノム選抜手法の確立（独立行政法人家畜改良センター）

（2）福島県農林水産部受託研究

- ア トルコギキョウ品種特性調査（一般社団法人日本種苗協会）

（3）研究協定

- ア 地域資源を活用した水稻の品種育成に関する研究
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構※1ほか30公設試験研究機関）
※1 次世代作物開発研究センター
- イ 水稻新品種の育成（富山県農林水産総合技術センター）
- ウ 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の水稻有望系統を交配母本とした水稻品種・系統の共同育成（福島県）
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中日本農業研究センター）
- エ 倍加半数体リング品種を利用した果実形質の遺伝解析に関する研究
（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門）

【備考】 1 福島県農林水産部共同研究

福島県農林水産部共同研究要綱に定められた、県と県以外の者が技術と知識を交換し、研究及び研究費用を分担しながら、共通の課題解決に向けて共同で行う研究

2 福島県農林水産部受託研究

福島県農林水産部受託研究要綱に定められた、委託者の負担する経費を使用して公務として行い、その成果を委託者に報告する試験研究

3 研究協定

農業総合センターと県以外の者が技術と知識を交換し、共通の課題解決に向けて共同で行う研究のうち、研究結果として知的所有権等の発生が見込めない1に至らない研究（所長が締結する研究契約）

※共同研究及び受託研究は、福島県農林水産技術会議評価部会の承認後、知事が実施機関と契約を締結している。

3 試験研究の概要

(文中に【普及成果○】【参考成果○】【放射線技術情報○】【営農再開技術情報○】の記載のある成果については、当センターホームページに「令和5年度に得られた研究成果」として掲載されております。)

A 東日本大震災・原子力災害からの復興の加速化による農林水産業の再生を支援するための試験研究の推進

A1 農業における総合的な放射性物質対策の研究開発

A1-1 放射性物質の分布状況の把握

試験課題名：土壌の経年調査		A1-1-1
予算区分：外部資金（放射性物質測定調査委託事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科、果樹研究所栽培科、畜産研究所飼料環境科、 浜地域農業再生研究センター		
概要	土壌中の放射性セシウム濃度は、水田、畑地、樹園地、草地の4地目とも2012年から減少する傾向が見られた。また、空間線量率も、全地目で減少傾向が見られた。	
試験課題名：農地における放射性セシウム濃度深度分布の把握		A1-1-2
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	農業総合センター本部の樹園地及び水田における深度別の ^{137}Cs 存在割合を調査した結果、本部樹園地(郡山)では2019年に比べて上層の濃度が低下し、深度10cmまでの存在割合も減少した。本部水田(郡山)でも同様に上層の濃度が低下し、深度16cmまでの存在割合が減少した。 ^{137}Cs の90%深度や重心深度は、本部樹園地では2014～2023年の間に ^{137}Cs の90%深度が年々深くなるものの、重心深度は変化が小さくなっており、前回調査からの移動速度も最小となった。	
試験課題名：郡山市における大気浮遊塵及び降下物中の放射性セシウム濃度調査		A1-1-3
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	放射性セシウムの大気中濃度は、測定を開始した2014年2月から減少する傾向が認められるが、2018年以降、時折やや高い値を示すことがあった。また、放射性セシウムの大気中降下量も減少する傾向が認められたが、日平均の風速が大きくなる冬季から春季に降下量が多くなる傾向が見られた。	
試験課題名：果樹における放射性物質濃度の経年変化の把握		A1-1-4
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	2023年度も葉と果実中の放射性セシウム濃度は、カキ・ユズともに低く推移していた。 福島市渡利のリンゴほ場において、土壌表面及び1m高で剥土処理による外部被ばくのリスク回避効果が確認された。 2023年の果樹研究所内リンゴ土壌の ^{137}Cs の深さ別分布率は、6cmで約87%、12cmで約97%となり、過去4年間と分布率に変化はなかった。	

A1-2 放射性物質の吸収抑制技術等の確立

試験課題名：基準値超過等要因解析		A1-2-2
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	県内の水稲作付けほ場 68 か所の 2023 年の土壤中交換性カリ含量の中央値は、26mg/100g 乾土であり、福島県営農再開支援事業効果検証時(2015 年～2022 年)(以下、検証時という)と比較してやや低かった。交換性カリ含量は検証時に 25mg/100g を上回っていたが、2023 年度の調査で 25mg/100g を下回っているほ場は増加しており、カリ施用量の平均値は 4.4kg/10a だった。	
試験課題名：県内農地土壌の交換性塩基含量の実態解明		A1-2-3
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	2011 年、2014 年、2017 年に調査を行ったほ場 86 地点の土壌について交換性カリ含量を調査した結果、25mg/100g 未満の地点は 31 地点、そのうち 2017 年には 25mg/100g 以上あったが 25mg 未満となった地点は 16 地点あった。	
試験課題名：非交換性カリ含量簡易測定法の開発		A1-2-4
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	放射性セシウム吸収抑制対策として肥培管理の指標となる非交換性カリ含量について、簡易的に測定するための検討を行った結果、抽出方法は 10%クエン酸抽出法が有効であった。また、抽出時の諸条件が測定値に及ぼす影響について、明らかにした【放射線技術情報 1】。	
試験課題名：除染後水田に対する中長期的な地力の実態解明と効果的な地力回復技術の開発		A1-2-6
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	除染後の水田において、堆肥 1t を 4 年間連用することにより収量が増加する傾向が認められ、水稲の生産性の向上に堆肥の連用は有効であることが示唆された。また、収穫後の土壌中の交換性カリ含量は慣行施肥より高かったことから、堆肥の施用は、土壌中の交換性カリ含量を維持する効果があることが示唆された。	
試験課題名：水稲の生産性と安全性の評価ならびに放射性物質移行抑制の実証		A1-2-8
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科		
概要	無カリ区およびカリ標区では、土壤中交換性カリ含量が低く(9 月時点で 5.6-6.3mg/100g 乾土)、玄米中放射性セシウム濃度が無カリ区で 100Bq/kg 超え、カリ標区で最大 50Bq/kg 程度になった。一方で、わらを施用した区では、土壤中交換性カリ含量が 10mg/100g 乾土以上、玄米中放射性セシウム濃度が 10Bq/kg 未満であったことから、カリ施肥(0.8kg/a)とわら施用を継続することがリスク回避のために重要であることが明らかとなった。	
試験課題名：畑作物の放射性セシウム吸収に対する土壌の影響解明		A1-2-9
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畑作科		
概要	過去 11 年間カリ無施用のほ場では、土壌中の交換性カリ含量及び ^{137}Cs 濃度は漸減傾向であった一方、大豆の子実中の ^{137}Cs 濃度及び子実への ^{137}Cs 移行係数は漸増傾向であった。近年の傾向から、今後これらの数値が急激に変動する可能性は低いと考えられた【放射線技術情報 2】。また、ソバの生育量や収量は、土壌への塩化カリの投入量が多いほど低下する傾向にあった。	

試験課題名：カキ・ユズにおける放射性物質の吸収抑制技術等の確立		A1-2-10
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	カキ「蜂屋」の葉及び果実中放射性セシウム濃度は、どの処理区も十分に低い値であったが、現地は場の表土戻し区でやや高い傾向が見られた。現地では、0-20cm の層で、土壌中交換性カリ濃度が高いほど、果実中放射性セシウム濃度が低い傾向が見られた。 ユズ新植ほ場では、深度 0～5cm における土壌中の放射性セシウム濃度で表土除去による低減効果が見られた。果実中及び葉中の放射性セシウム濃度は、土壌中の交換性カリ濃度が高いほど移行係数が低い傾向にあった。	
試験課題名：避難指示区域等における農作物中放射性セシウム吸収抑制技術の開発		A1-2-11
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター		
概要	ペルシアンクローバ、秋ソバを作付けしたほ場で採蜜した結果、ハチミツの放射性セシウム濃度は基準値を下回った。ペルシアンクローバの秋播きと春播きの組合せで採蜜期間の延長を図ったが、前年度よりシロツメグサの開花が早く、ペルシアンクローバが主な蜜源植物とはならなかった。 メタン発酵消化液を用いて安全な WCS イネの収量確保をするには、基肥の施用が有効であった。 乳牛糞尿由来脱水汚泥は、単体ではカリウム供給量が少なく、牛糞堆肥との混合割合を高めるほど放射性セシウム吸収抑制効果が高まった【放射線技術情報 4】。	
試験課題名：放射性セシウム濃度低減のための野菜栽培と調理加工		A1-2-12
予算区分：繰入金（福島県民健康管理基金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター、環境・作物栄養科		
概要	6 種類の野菜(コマツナ、カンショ、ブロッコリー、ネギ、タマネギ)について、土壌中交換性カリ含量を高めることで放射性セシウム吸収を低減できた。ネギは交換性カリ含量が 10mg/100g を下回っても移行係数は 0.01 を下回り、放射性セシウムを吸収しにくい野菜として有望であると考えられた。 ブロッコリー花蕾の放射性セシウム濃度は採取時期で有意な差がなく、出蕾後であれば出荷時の放射性セシウム濃度を適切に評価できると考えられた。	
試験課題名：再浮遊物質を含む大気中の放射性セシウムの動態と農地・農作物への影響の解明		A1-2-13
予算区分：外部資金（放射性物質測定調査委託事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター		
概要	大熊町の帰還困難区域でコンテナ栽培した野菜類について、降下物による放射性セシウムの影響は極めて小さいことが示された。	

A1-3 特定復興再生拠点区域等の円滑な営農再開に向けた技術実証

試験課題名：計測ロボットを活用した放射性物質等分布実態の把握		A1-3-1
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター		
概要	放射性物質測定ロボット（KURAMA-m）による土壌中放射性セシウム濃度の推定範囲の拡大が図られた(23,000Bq/kg までの相関を得た)。水田内の放射性セシウムのばらつきは、水稻 1 作では解消されなかった。	

試験課題名：営農再開を阻害する加害動物の行動特性や動物種把握による獣害防止策の提案 A1-3-2	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	特定復興再生拠点におけるアライグマ調査個体の行動範囲及び嗜好性に関する情報を取得した。
試験課題名：通い農業支援システム等を活用した栽培状況の可視化と評価 A1-3-3	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	トルコギキョウとストック栽培での通い農業支援システムを導入した情報共有試験で、かん水量通知を追加したことで非熟練者と熟練者のかん水量の見える化が可能となり、非熟練者への通知や指導による改善が図られた。生産物の品質は熟練者と非熟練者で大きな差がなかった。
試験課題名：緑肥作物等の利用による地力回復技術の開発と蜜源利用 A1-3-4	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	緑肥作物として秋ソバの前作に栽培するヘアリーベッチとクリムソクローバは、春播きより秋播きで窒素投入量や雑草の抑草効果が高いことを確認した。ソバへの影響は大雨の影響により判然としなかった。 緑肥等を蜜源とする3ほ場で採蜜した結果、昨年度よりシロツメグサやナタネの開花は7～10日早まったが、春蜜の放射性セシウム濃度は基準値未満で、秋季に上昇する傾向があった。春播種のペルシアンクローバはハチミツ中の主な花粉としては検出されなかった。
試験課題名：効率的雑草管理技術の開発と実証 A1-3-5	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	各種多年生雑草の優占する保全管理ほ場において2試験を実施した。耕起後散布試験では、4～5月に耕起して1か月後に塩素酸塩粒剤を散布した結果、イヌスギナ等多年生雑草に対して高い防除効果が得られた。散布後耕起試験では、4～6月に塩素酸塩粒剤を散布した場合、その後の耕起の有無に関わらず、夏期のスギナに対して高い防除効果が得られた。
試験課題名：特定復興再生拠点等における農作物栽培の生産性と安全性の評価 A1-3-6	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	特定復興再生拠点区域の大熊町の実証田で2作目、葛尾村と浪江町で1作目の水稻を栽培した結果、収量は目標収量以下～並で、玄米中の放射性セシウム濃度は基準値を大きく下回った。 玄米に対する周辺環境からの放射性セシウムの影響は極めて小さかった。また、農研機構で開発された放射性セシウム低吸収能力を有する水稻品種・系統（「環2号」、「RC4」）はポット試験で放射性セシウムの吸収を抑制できることを確認した【放射線技術情報5】。
試験課題名：放射性物質移行抑制技術の実証・開発と畑作物の安全性の評価 A1-3-7	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畑作科	
概要	2023年度も各土壌特性値のデータを蓄積した。また、大豆と落花生については、過去2か年分のデータで土壌の交換性カリ含量と交換性放射性セシウム濃度を説明変数とする危険度推測式を作成した。ソバについては、土壌の全放射性セシウム濃度を加えた3変数による危険度推測式を作成した。

試験課題名：草地における放射性セシウム吸収抑制技術の開発・実証と未除染牧草地利用可否基準の策定		A1-3-8
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所飼料環境科、浜地域農業再生研究センター		
概要	草地更新時に造粒金雲母、堆肥 8t を施用することにより、土壌中交換性カリ含量が低い場合においても、牧草中放射性セシウム濃度の上昇を抑えられる傾向があった。放射性セシウム低吸収草種であるトールフェスクについて、営農再開地域に適した品種を選定するため利用 2 年目の収量性等を調査した結果、年間乾物収量は「サザンクロス」が最も高かった。放牧利用について、4～5 月の草量が不足し、季節生産性の平準化が課題となった。	
試験課題名：山羊乳及び山羊肉の放射性セシウムの移行調査		A1-3-9
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：畜産研究所酪農科		
概要	畜舎内において山羊に放射性物質を含む牧草(^{137}Cs 濃度 72.57Bq/kg(水分 80%換算))を 28 日間給与した後清浄飼料に切り替え、生乳と肉への放射性物質の移行調査を行った結果、山羊乳と骨格筋の ^{137}Cs の移行係数は、それぞれ 0.058、0.404 であった。また、山羊乳の ^{137}Cs 濃度は飼い直し 70 日目で検出限界値(0.4Bq/kg)未満となった。更に、除染済み牧草地に山羊を放牧し生乳の移行係数を確認したところ平均で 0.09 であった【放射線技術情報 3】。	
試験課題名：生産現場における最適な放射性セシウム移行リスクの評価手法およびほ場特性に合わせた移行低減技術の提案		A1-3-10
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	2022 年度に引き続き西郷村の水田 48 か所の土壌調査を行った結果、2022 年に交換性カリ含量が 25mg/100g 未満であった 20 地点のうち 18 地点が 25mg/100g 未満であり、概ね変化は小さかった。また、伊達市の 1 地区 6 地点を追加調査した結果、非交換性カリ含量が低い地点が見られた。 西郷村、須賀川市及び広野町の現地ほ場において、カリ無施用区を設置し調査を行った結果、西郷村及び須賀川市では、2016 年から 2023 年にかけて、カリ無施用区ではカリ施用区より交換性カリ含量は低く、玄米中 ^{137}Cs は高くなった。また、広野町は、同一ほ場内で土性が異なるため、土性ごとにカリ無施用区を設置して調査した結果、埴壌土が砂質埴壌土より交換性カリ含量が低く、玄米中 ^{137}Cs 濃度も高く推移した。 水稻のポット試験では、玄米中 ^{137}Cs 濃度は交換性カリ含量の減少に伴い高まる傾向が見られ、交換性カリ含量の減少に対する玄米中 ^{137}Cs 濃度の増加量に大きな差があることが明らかになった。	

A2 避難地域等の営農再開を支える技術の実証

A2-1 避難地域の営農再開を支援する研究

試験課題名：避難地域等における営農再開のための支援研究

A2-1-1

予算区分：繰入金（福島県原子力災害等復興基金）

開始年度：2021 終了年度：2025

担当科所：浜地域農業再生研究センター

概要

化学肥料をメタン発酵消化液に代替して飼料用米を栽培した結果、化学肥料施用と同等以上の収量を得た【[営農再開技術情報 1](#)】。

緑肥作物と秋ソバの組合せによる農地保管理技術では、除染後農地でのペルシアンクローバ栽培で雑草繁茂を抑え、すき込み後のソバは十分な収量を確保できた【[営農再開技術情報 2](#)】。

畦畔の雑草管理の省力化が期待できるイブキジャコウソウは、浜通りでは5月下旬の挿し木で高い活着率が得られ、初期生育確保のため定植時は土壤被覆資材の使用が望ましいと思われた【[営農再開技術情報 3](#)】。

排水不良ほ場でマメ科緑肥作物のセスバニアを栽培した結果、排水後の湛水が長時間続く条件でも十分な窒素すき込み量を見込むことができた【[営農再開技術情報 4](#)】。

電気柵監視装置の導入により、遠隔でも電気柵電圧を把握でき、省力的に電気柵の適正管理を図ることができた【[営農再開技術情報 5](#)】。

リモコン草刈機の活用により、電気柵下の除草に係る作業時間の短縮と労力負担軽減を図ることができた【[営農再開技術情報 6](#)】。

簡易的な放射性セシウム降下物の評価方法を考案し、降下物由来の放射性セシウムが植物体に与える影響は極めて小さいことを確認した。

ポット試験において、緑肥作物のヘアリーベッチは出芽前に湛水状態または土壤水分飽和状態になると出芽数が著しく低下することが示された【[営農再開技術情報 7](#)】。

「山木屋在来ソバ」は、2023 年の気象条件では、7 月下旬～8 月上旬に播種することで収量安定確保につながることを示された【[営農再開技術情報 8](#)】。

2023 年の気象条件では、富岡町でソバ「会津のかおり」を9月中旬に播種することで、11月上旬の収穫が可能であった【[営農再開技術情報 9](#)】。

川内村の排水不良ほ場で、ソバ播種直後に小畦立てを導入することで、排水が良いほ場と同等の収量確保が期待できた【[営農再開技術情報 10](#)】。

小麦有望品種「夏黄金」を、中山間地域である葛尾村の特定復興再生拠点区域で栽培した結果、越冬性と収量は「ゆきちから」と同等であった【[営農再開技術情報 11](#)】。

除染後農地でエゴマ栽培を行う場合、雑草害のリスクが高いため、移植栽培が望ましいと思われた【[営農再開技術情報 12](#)】。

農業総合センターで開発した振動式ナタネ選別機（供試機）は、富岡町、浪江町産ナタネの調製作業では処理量や選別精度等の課題が指摘され、現時点では不適と判断された。

タマネギ栽培において、夏播き緑肥作物のすき込みで炭素 140～550kg/10a、窒素 10～27kg/10a の投入量を確保でき、特にソルガムが多かった【[営農再開技術情報 13](#)】。

田村市で簡易的な排水対策技術である縦穴明渠による効果を検討したが、カンショ収量に差は見られなかった。

概 要	川内村でピーマンのトンネル栽培で定植時期を早めることで高単価期に収穫でき、露地より年間 31 万円/10a の所得向上が期待できた【放射線技術情報 1 4】。 大熊町と富岡町の特定復興再生拠点で栽培した野菜類の放射性セシウム濃度は全品目で基準値を下回り、移行係数は土壤中交換性カリ増加により低減した。 加工用ブロッコリーの栽培体系確立に向け、南相馬市でブロッコリー3 品種について加工用としての品種適性と栽植密度を検討した。 双葉町で食品残渣由来消化液の施用効果を検討した結果、散布後の降雨が少ない場合、消化液による窒素成分は散布 30 日後まで一定程度維持できた。 檜葉町で 2021 年度から発生が見られているユーカリの斑点性病害の発病度には品種間差があり、「ポリアンセモス」の被害が小さく、病害発生ほ場でも良好な生育を得た【営農再開技術情報 1 5】。 浪江町でフザリウム立枯病により前作で出荷皆無だったトルコギキョウ加温促成作型において転炉石灰による pH 矯正と土壤還元消毒及びクロロピクリン消毒を実施した結果、被害程度が小さくなり出荷率が改善された【営農再開技術情報 1 6】。また、フザリウム立枯病が多発したトルコギキョウ季咲き作型において同処理を実施した結果、被害を軽減できた【営農再開技術情報 1 7】。 営農再開地域の花木栽培で発生が見られているグリホサートカリウム塩液剤に耐性のあるオヒシバに対し、発生前はグリホサートカリウム塩液剤、発生以降はグルホシネート P ナトリウム塩液剤を散布することで、その他の 1 年生雑草を含め効果的に除草できた【営農再開技術情報 1 8】。 大熊町の除染後農地において、町内 5 地域で基肥及び追肥時にカリ増施して栽培したイタリアンライグラスの放射性セシウム濃度は暫定許容値を下回った【営農再開技術情報 1 9】。 飯館村におけるイタリアンライグラス 2 品種の 2022～2023 年にかけての越冬性評価は同等であり、各番草・総収量に差は見られなかった。 富岡町で栽培した飼料用トウモロコシの茎葉・雌穂への放射性セシウムの移行係数はカリ上乘せ施用で低減し、テタニー比(Ca/(Mg+K))は疾病リスク評価の 2.2 を下回った。

【参考】 営農再開に向けた実証栽培(26 課題)

実証地区	品目	面積(a)	課 題 名	概 要	営農再開 技術情報 No.
田村市 都路	鳥獣害対策 (カンショ)	1	カンショの縦穴排水技術の実証	簡易的な排水対策である縦穴明きよを施工し、排水効果を実証する。	—
川俣町 山木屋	作物 (ソバ)	9	山木屋在来ソバの栽培実証	山木屋在来ソバの適切な播種時期を明らかにする。	8
南相馬市 小高区	鳥獣害対策 (水稻)	60	電気柵監視装置の実証	遠隔から電気柵電圧を確認できる装置を活用し、省力性及び適正管理の度合いを調査する。	5
南相馬市 小高区	鳥獣害対策 (水稻)	1	リモコン草刈機の実証	電気柵設置水田で利用できるロボット除草機等の実演を行う。	6

実証地区	品目	面積(a)	課 題 名	概 要	営農再開 技術情報 No.
南相馬市 小高区	野菜 (タマネギ)	9	緑肥作物によるタマネギ栽培の減肥実証	タマネギ栽培において緑肥作物活用による肥料コスト削減技術を実証する。	13
南相馬市 鹿島区	野菜 (ブロッコリー)	2	加工用ブロッコリーの実証	加工用ブロッコリー適品種、栽植様式を明らかにする。	—
檜葉町 上繁岡	花き (ユーカリ)	1.5	檜葉町におけるユーカリ品種の栽培特性および病害発生程度の比較	浜通り平坦部において、ユーカリの病害による被害が見られるため、病害に対する品種抵抗性の比較を行う。	15
檜葉町 町内	作物 (カンショ)	1	カンショの低収要因の解明	カンショほ場の雑草発生状況と土壌物理性調査を実施し、低収要因を解明する。	—
富岡町 小良ヶ浜	畜産 (牧草)	2	飼料用トウモロコシの放射性セシウム吸収抑制対策に基づく栽培技術実証	放射性セシウム吸収抑制対策に基づき栽培した飼料用トウモロコシの安全性について評価する。	—
富岡町 上手岡	作物 (ソバ)	9	播種時期後ろ倒しによる秋ソバの作期拡大の実証	「会津のかおり」の播種時期を変えて11月収穫が可能か検討する。	9
富岡町 小良ヶ浜	野菜 (全般)	4.3	特定復興再生拠点等における各種野菜の安全性評価	地域で作付け実績のある野菜類について、経根吸収による放射性セシウム移行とカリウム施肥による吸収抑制効果を調査する。	—
富岡町 上手岡	作物 (ナタネ)	5	ナタネ選別機による調製作業の効率化	農業総合センターで開発した振動網式ナタネ選別機による調製作業の効率化について実証する。	—
川内村 下川内	作物 (ソバ)	6	ソバ栽培における排水対策の実証	小畦立て栽培によるソバの湿害軽減効果を実証する。	10
川内村 下川内	野菜 (ピーマン)	5	ピーマントンネル栽培の実証	ピーマンのトンネル栽培による早期出荷体系を実証する。	14
大熊町 下野上	作物 (水稻)	5.1	イブキジャコウソウの効率的な増殖法	畦畔被覆による抑草効果が期待できるイブキジャコウソウの効果的な増殖法を明らかにする。	3
大熊町 町内5地点	畜産 (牧草)	7	イタリアンライグラスおよびオーチャードグラスの放射性セシウム吸収抑制対策による栽培実証	営農再開に向けて放射性セシウム吸収抑制対策を行って牧草を栽培した時の安全性について評価する。	19
大熊町 野上	野菜 (全般)	4.3	特定復興再生拠点等における各種野菜の安全性評価	地域で作付け実績のある野菜類について、経根吸収による放射性セシウム移行とカリウム施肥による吸収抑制効果を調査する。	—
大熊町 大川原	地力増進 作物	56	緑肥作物の組合せによる農地保全管理技術の実証	秋播きのマメ科緑肥作物を基軸とした、緑肥作物の組合せによる周年の農地保全管理技術を実証する。	2

実証地区	品目	面積(a)	課 題 名	概 要	営農再開 技術情報 No.
大熊町 大川原	作物 (エゴマ)	0.9	エゴマ直播栽培の実証	エゴマ直播栽培を実証し、移植栽培と比較した場合の生産性と必要労力を明らかにする。	12
双葉町 下羽鳥	野菜 (ブロッコリー)	10	深根性緑肥作物による排水対策	ブロッコリー作付け前のセスバニア栽培による簡易排水対策技術を実証する。	4
双葉町 下羽鳥	野菜 (ブロッコリー)	9	ブロッコリー栽培における食品残渣由来消化液の利用実証	ブロッコリー栽培において食品残渣由来消化液の施用効果を明らかにする	—
浪江町 幾世橋	花き (トルコギキョウ)	0.75	トルコギキョウ季咲き作型における還元消毒とクロルピクリン消毒を組み合わせた消毒方法の実証	トルコギキョウ栽培における土壌病害解決のために、土壌消毒方法の効果を検証する。	16 17
浪江町 棚塩北	作物 (水稻)	20	液肥活用の可能性検討	資材の成分、品質及び使用場面等の問題を整理し、効果的な使用方法を検討する。	1
浪江町 小野田	花き (コニファー)	55	抵抗性オヒシバ発生ほ場における防除体系の実証	除草剤抵抗性が確認されたオヒシバに対する適正な防除方法を実証する。	18
葛尾村 野行	作物 (小麦)	0.6	コムギ有望品種の高冷地適応性の検討	コムギ有望品種「夏黄金」の高冷地での栽培適性を評価する。	11
飯館村 関根	畜産 (牧草)	1	阿武隈中山間地域におけるイタリアンライグラス収量向上の検討	飯館村での栽培に適する牧草(イタリアンライグラス、オーチャードグラス)の選定と耐寒性の検討を行う。	—

A2-2 広域エリアを対象とした大規模水田営農における生産基盤技術の確立

試験課題名：広域エリアにおける水田輪作栽培管理技術の開発・実証		A2-2-1
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科、浜地域研究所		
概要	水稻乾田直播栽培について、令和5年度までの所内ほ場試験の生育、収量調査の結果を基に「ふくひびき」、「天のつぶ」の目標収量を得るための生育指標値を作成した【 参考成果47 】【 参考成果10 】。 また、「ふくひびき」、「天のつぶ」、「コシヒカリ」の作期を確認し、最も熟期が遅い「コシヒカリ」を乾田直播栽培した場合でも成熟晩限日前に成熟期に達することから、栽培可能であることを明らかにした【 参考成果46 】。	
試験課題名：営農再開に対応した大規模水田輪作体系の実証		A2-2-2
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畑作科		
概要	2023年度は、出芽期以降、高温で降水量が少なく、浅層暗きよの効果及び畦立ての効果は判然としなかった。現地ほ場においては、ダイズが干ばつで低収となり、排水改善技術による生育への影響は判然としなかった。	

試験課題名：広域エリアにおける ICT を用いた省力的圃場管理技術		A2-2-3
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：作物保護科		
概要	斑点米被害予測モデルの構築と、精度検証に向けた調査を行った。調査地域における斑点米被害の主要加害種は、クモヘリカメムシとカスミカメムシ類であり、ほ場から半径 1km 内にある針葉樹林面積が広くなるにつれて、クモヘリカメムシ誘殺数が多くなる傾向が見られた。	
試験課題名：飼料用トウモロコシの安定多収、加工・調製技術の開発と実証		A2-2-4
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所飼料環境科		
概要	水田輪作体系に適した多収子実用トウモロコシ品種を選定するため、生育特性や収量性を調査した結果、RM115 品種は RM95 品種より多収であり、9 月上旬に収穫できることを明らかにした【参考成果 4 2】。 子実用トウモロコシ利用拡大に向け、子実用トウモロコシに飼料用米等を混合した肉用繁殖経営向け飼料を調製し、産褥期に給与した結果、分娩や発情回帰に問題はないことを確認した。しかし、飼料の変色が起こり、試験牛やその子に下痢の症状が見られたため、変色の原因究明や給与試験の継続が必要であった。	
試験課題名：経営管理システムを活用した経営データ分析・活用手法		A2-2-5
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：経営・農作業科		
概要	経営管理システムの入力データ及び実証経営体への聴き取りの結果、経営管理システムへのデータ入力に漏れやすい項目が明らかとなった。また、実証経営体の従業員を対象とした勉強会を通して、経営管理システムの有効性についてはある程度理解されているが、具体的に活用されていない現状が明らかとなった。	

A 2 - 3 先端技術を活用した施設野菜・畑作物の省力高収益栽培・出荷技術の確立

試験課題名：施設果菜類の雇用労力とロボットを作業主体とした大規模経営技術の開発・実証		A2-3-1
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域研究所、野菜科、経営・農作業科		
概要	摘心栽培と、作業を単純化したつる下ろし栽培を比較した結果、つる下ろし栽培は収穫最盛期における収穫管理作業時間の合計時間が摘心栽培より約 16%短くなり、収穫管理作業 1 時間当たりの収量も多くなる傾向を明らかにした。つる下ろし栽培の総収量は摘心栽培の約 9 割で、可販果率は収穫期間をととして約 70%以上を維持できた【普及成果 1 8】。 ミスト噴霧と遮光資材を併用した場合、ミスト噴霧または遮光資材単独で使用するより施設内平均気温が低く推移し、35℃以上積算時間は短くなったことから、ミスト噴霧と遮光資材を併用することで、施設内環境の改善に効果的であると考えられた。可販果収量は、アーチ摘心栽培及びつる下ろし栽培で、特に 7、8 月のミスト噴霧区の収量が高く、高温時期のミスト噴霧により増収及び秀品率向上効果が確認された。ミスト噴霧区及びミスト噴霧＋遮光資材区で暑さ指数(WBGT)が、遮光資材区と比較して低かったことから、ミスト噴霧が作業環境の改善に効果があると考えられた。 小高園芸団地の経営概況を調査し、鉄骨ハウスにおける夏秋キュウリの作業項目、作業時間、収益を分析、算出した。作業時間は、収穫と草姿管理、費用は施設費の比率がそれぞれ高かった。	

試験課題名：加工適性の高いコムギの導入による省力高収益生産技術の開発・実証		A2-3-2
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：畑作科		
概要	コムギ品種「夏黄金」については、積雪地帯を含む県内全域で栽培可能であり、幼穂形成期を省略する省力施肥体系で、おおむね 500kg/10a の収量を確保できることを明らかにした【参考成果 15】。また、小麦の試作品（パン、ラーメン）の検討会を開催し、実需者から評価を得た。東北農研他と連携して栽培マニュアル及び栽培暦を作成した。 コムギの生育に障害となる雑草の発生状況を調査した結果、ネズミムギ、カラスムギの発生ほ場が目立った。	
試験課題名：露地野菜栽培における難防除雑草優占化機構の解明と難防除雑草対策技術の確立		A2-3-3
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域農業再生研究センター、野菜科		
概要	タマネギ春まき直播栽培では、中通りにおいて肥大が良い「トタナ」を用いて 4 月上旬に播種することで 8 月中旬に 4t/10a 以上の収量を得られることを明らかにした【普及成果 7】。 秋まき直播栽培では、耕起前に発生したネズミムギは 5 葉期程度までであれば耕起によるすき込みにより防除できること、タマネギ栽培期間中に発生したネズミムギは 11 月中旬又はネズミムギ 5 葉期にクレトジム乳剤により防除することが効果的であることを明らかにした。 また、秋まきタマネギで効率的にカラシナを防除するため、選択性茎葉処理剤のペンタゾン液剤の処理適期を明らかにした。	

A2-4 避難地域の営農再開を促進する先端プロ技術の社会実装

試験課題名：花きの計画的安定生産技術の実証研究		A2-4-1
予算区分：国庫（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：花き科		
概要	【キク類】 4 つの品種で概ね到花日数は安定したが、消灯日を早くするほど到花日数が長くなる傾向が見られた。LED 光源についてはピンク色、電球色ともに到花日数は赤色と変わらなかった【普及成果 9】。 挿し穂の温湯浸漬処理については、水挿し状態で暗黒処理した場合でも草丈等において慣行と差は見られなかった【参考成果 19】。挿し穂の冷蔵期間が挿し芽後の障害発生に及ぼす影響については、判然としなかった。 【トルコギキョウ】 夏出荷作型の簡易作型適応処理について、苗質向上を目的としてトンネル資材を通気性のある資材に変えたところ簡易処理苗の開花期は慣行処理苗と比較して遅れた。 秋出荷作型における作型適応処理温度について、7 月上旬中旬定植では 15℃処理区は 20℃処理や無処理と比較して切り花の上位規格割合が向上した。また、作型適応処理期間の短日処理や赤色光照射は定植後の品質や採花期にほとんど影響を及ぼさなかった。	

試験課題名：早期成園化が可能な樹形によるナシ、ブドウ、モモの省力・高品質生産技術の実証		A2-4-2
予算区分：国庫（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科、病害虫科		
概要	ナシ「王秋」のジョイントV字トレリス樹形（以下「JV樹形」という。）について実証したところ、定植後3～4年目で成園並の収量（晩生品種の目標収量10a当たり4,000kg）が確保でき、早期成園化を可能とする樹形であることが確認された【普及成果11】。 水稻育苗ハウスを利用した盛土式根圏制御栽培のブドウ「シャインマスカット」では、定植5年目（7年生）に10a当り収量が1,831kg、果房重694g、果粒重16.5g、糖度18.2°Brixとなり、成園並の収量が得られ、糖度はシャインマスカットの目標値（18°Brix）を上回ることが実証できた【普及成果12】。 モモのジョイントV字樹形では、立木栽培と比較して、収穫期が遅れる傾向があった。果実品質では着果量の差から、果実が小さくなったが、その他の果実品質に大きな差は見られなかった【参考成果21】。	
試験課題名：肉用牛のAI超音波肉質診断技術の実証		A2-4-3
予算区分：国庫（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	県内和牛肥育農家13戸に対するアンケート結果から、全戸がAI超音波肉質診断の活用に「出荷時期等の検討」を期待していることがわかった。 浜通りのモデル農家にて、AI超音波肉質診断により肥育中に肉質を判断し、AI超音波肉質診断結果等を踏まえ、モデル農家が早期出荷を判断して飼養管理を検討した牛の肥育完了月齢は平均25.5ヵ月齢であり、一方でそれ以外の通常出荷牛では平均27.2ヵ月齢であった。	

B 農林水産業の生産力を強化するための、先端技術を活用した技術開発等の推進

B 1 先端技術を活用した新たな農業生産技術の開発

B 1-1 イノベーションによる避難地域等の新たな農業生産技術の開発

試験課題名：稲作の大規模化・省力化に向けた農業用水利施設管理省力化ロボットの開発 B1-1-1	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：経営・農作業科	
概要	開発した試作機の性能評価を行った結果、従来の人力による水路管理作業の労力の2割以上を低減できることが示唆された。
試験課題名：「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のバラツキ改善技術の開発 B1-1-2	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：浜地域農業再生研究センター	
概要	「土壌肥沃度の見える化」＋「高機能堆肥の可変散布」による土壌肥沃度改善システムの試作機を開発し、各機のデータ伝達や作業精度について現地実証を行った。また、除染後農地において土壌肥沃度の指標となる土壌炭素含有率には大きなばらつきがあるが、その程度は地域やほ場によって様ではないことが明らかになった【 営農再開技術情報20 】。
試験課題名：ICT・放牧を活用した肉用繁殖雌牛管理技術の効率化 B1-1-3	
予算区分：外部資金（農林水産分野の先端技術展開事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所沼尻分場	
概要	非公開

B 1-2 スマート農業技術を活用した農業生産技術の確立

試験課題名：データベースを活用したスマート農業経営の構築 B1-2-2	
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：経営・農作業科	
概要	新規就農者等が自ら簡易に経営のシミュレーションを行えるよう、試算プログラム「XLP」を利用し Microsoft Excel 上で動作する経営シミュレーションツールを作成した【 普及成果21 】。
試験課題名：花粉採取と受粉作業の省力化を可能にするスマート農業技術の開発 B1-2-3	
予算区分：外部資金（戦略的スマート農業技術等の開発・改良） 開始年度：2022 終了年度：2024 担当科所：果樹研究所栽培科	
概要	オウトウの花粉採取を目的として複数品種を供試しV字樹形を育成したところ、「暖地オウトウ」で側枝候補となる新梢の発生本数が多いことが明らかとなった。リングの花粉採取を目的としたジョイントV字樹形では次年度の機械採取に向けてジョイント作業を実施し、樹形が完成した。手摘みによる花粉採取試験の結果、採取に係る時間は「メイポール」「レッドバッド」が短く、花粉採取量では「スノードリフト」「センチネル」の順で多かった。樹体生育では側枝本数は「スノードリフト」が最も多く、枝の柔軟さは「センチネル」が最も柔らかく、「メイポール」は最も硬い結果が得られた。

B1-3 先端技術を活用した省力的栽培技術の確立

試験課題名：IoTによる遠隔監視システムを活用した育苗管理の省力化技術開発		B1-3-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：経営・農作業科		
概要	市販のIoT機器を利用した遠隔監視システム（通い農業支援システム）で、ハウス内のCO ₂ 濃度、温度、湿度、地温、土壌水分の測定データを生産者のスマートフォンに通知できることを実証し、同システム導入生産者3名の利用状況をまとめた【参考成果1】。	
試験課題名：「米処」会津地域における新たな稲作経営の展開のための栽培技術の確立		B1-3-3
予算区分：外部資金（イノベーション創出強化研究推進事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：会津地域研究所		
概要	大規模の稲作経営体で過度に集中する春作業の分散化を目指し、降雪・積雪前の初冬に播種する初冬播き乾田直播栽培について会津平坦部での適応性を検討した。初冬直播き栽培では、前年産種子を冷蔵貯蔵しチウラム水和剤処理した種子を使用することで、概ね50%前後の苗立率を確保でき、施肥ではLPS80またはLPS100の施用で収量50kg/a以上となることを明らかとした【参考成果44】。	
試験課題名：ブロッコリー選別自動収穫機の機械化栽培体系の確立		B1-3-5
予算区分：外部資金（戦略的スマート農業技術等の開発・改良） 開始年度：2022 終了年度：2024 担当科所：経営・農作業科、野菜科、浜地域研究所		
概要	ブロッコリーの機械収穫に適した品種として、「アーリーキャノン」、「おはよう」、「令麟」が有望であると考えられた。塩水処理苗（定植1週間前から0.3%塩水を底面給水させた苗）の標準植と深植及び慣行育苗の深植により花蕾の傾きが小さくなり、機械収穫に適すると考えられた。令和4年度製作機（5号機）の作業性能及び経済性を調査し、収穫精度は22～86%、機械の作業負担面積は15.8haと試算された。	
試験課題名：ブロッコリー栽培における一斉収穫・出荷・販売体系の構築		B1-3-6
予算区分：外部資金（新稲作研究会委託試験） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：経営・農作業科		
概要	加工業務用一斉収穫機の収穫速度は0.37m/sで、96.4%の花蕾は傷等なく収穫できた。また、手収穫、青果用出荷と同等の収益性が得られる面積は、花蕾重400g/株、出荷可能品率85%の場合、3.0haと試算された。	
試験課題名：ICT・IoT技術を活用した花きの新たな農業生産技術の確立		B1-3-7
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：会津地域研究所		
概要	2023年度中断	
試験課題名：大規模酪農経営における飼養管理技術の確立		B1-3-8
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2024 担当科所：畜産研究所酪農科		
概要	子牛の疾病罹患時の特徴的な行動を把握するため、子牛の動画の解析から、平常時の活動量と疾病罹患時の行動の変化について検証した。 行動発現総時間は、健康牛に比べ罹患牛は休息時間が多い傾向であった。また、姿勢変化回数及び行動変化回数は、健康牛と比べて罹患牛において多い傾向が明らかになった。	

C 県産農林水産物の競争力を強化するための、「ふくしま」ならではの価値向上に資する品種開発等の推進

C1 市場ニーズに対応したオリジナル品種・系統と生産技術等の開発

C1-1 個性豊かな県オリジナル水稻、野菜・花き品種の育成

試験課題名：個性豊かな県オリジナル水稻品種の育成		C1-1-1
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究）） 一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：品種開発科、浜地域研究所		
概要	出穂期が「あきたこまち」～「日本晴」並の高温登熟性の優れる良質・極良食味品種、低温出芽性と伸長性があり耐倒伏性の優れる直播向け品種、高度精白可能な酒造好適米品種の育成を目標とし、67 組合せの交配を行い、49 組合せ（粳米 37、酒米 11）から稔実種子を得た。県育成系統の湛水直播適性（低温出芽性、低温伸長性）を検定した結果、発芽率“優”と判定した系統は 11 系統であった。 【郡系番号の付与】 系統選抜により、一般粳 28 系統（郡系 1446～1473）、酒米 6 系統（郡系 酒 1474～1479）、飼料用米 1 系統（郡系飼 1480）の計 35 系統に新規で郡系番号を付与した。 【福島番号の付与】 郡系から有望な系統を選抜し、一般粳 4 系統、糯 1 系統、酒米 2 系統に福島番号を付与し、次年度の生産力検定本調査、奨励品種決定基本調査に供試することとした。 【生産力検定調査】 福島番号を付与した系統について、総合的な評価を行った結果、「福島 61 号」、「福島 68 号」、「福島 69 号」は、比較品種よりもかなり多収だった。「福島 61 号」、「福島 64 号」、「福島 66 号」は、食味が優れていた。福島系統のうち「福島 61 号」、「福島 71 号」は特性を把握したため、試験終了とした。 福島番号系統及び郡系系統の一部、計 32 系統について高温登熟性検定を実施した結果、「強」と「やや強」と判定した系統は 21 系統であった。特に、「福島 68 号」と「福島 69 号」は、収量性と高温登熟性に優れていたため有望とした。 【特性検定試験（耐冷性、葉いもち、穂いもち、真性抵抗性）】 耐冷性が「強」以上と判定された系統は 29 系統、葉いもちが「強」以上と判定された系統は 38 系統、穂いもちが「強」以上と判定された系統は 53 系統だった。真性抵抗性は、104 系統についていもち病に対する真性抵抗性遺伝子型を明らかにした。	
試験課題名：個性豊かな県オリジナル野菜の品種開発		C1-1-2
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究）） 一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：品種開発科		
概要	【イチゴ】 収量性、果実品質、病害抵抗性に優れた交配母本を選定し、43 組合せで交配を行った。個体選抜では、19 組合せ 2046 個体を供試し、12 組合せ 45 個体を選抜した。系統選抜では 7 系統を供試し、2 系統を選抜し、「郡系 107」、「郡系 108」を付与した。また、「福島 ST14 号」について特性検定を実施し、夜冷短日育苗の効果について明らかにした 【R4 秋冬作参考成果 3】。 【アスパラガス】 品質及び収量性が優れる全雄系統、又は混性品種を育成するため、22 組合せの交配を行った。組合せ検定 1 年目に 16 系統を供試した。組合せ検定 2 年目では、供試 16 系統の中で、頭部の締まりが優れ収量に優れた 2 系統に「郡交 23」、「郡交 24」を付与した。生産力検定に、「郡交 21」、「郡交 22」、「福島交 11 号」を供試した。また、「福島交 11 号」の現地試験（3 年生株）において、収量調査の結果、喜多方市では「ウェルカム」と同程度、南会津町では、「ハルキタル」より多い傾向にあった。	

試験課題名：個性豊かな県オリジナル花き品種の育成		C1-1-3
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究）） 一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：品種開発科		
概要	【リンドウ】 頂花咲き性が優れ需要期に採花できる青紫系品種、変わった花色や花序等の特長を持つ新規性の高い品種を育成するため、自殖 17 系統、組合わせ能力検定 45 組合せの交配を行った。 組合わせ能力検定では、育種素材として 10 系統を選抜した。培養適性検定では、順化特性調査において栄養系「F1884(4)」を適性有と評価した。 福島栄 24 号の地域適応性を調査するため、県内 4 か所のリンドウ産地で現地試験を実施し、会津地方や県北地方山間部での開花期特性（定植 2 年目）の生育は、おおむね良好であった。 【カラー】 個体選抜（育苗・養成期検定）では自殖交配 18 系統、組合せ交配 34 組合せに供試した。個体選抜（個体選抜）では自殖交配 19 系統、組合せ交配 91 組合せを供試し、花色、花形、球根肥大率、軟腐病発病度を中心に有望な特性を持つ 8 個体を選抜し、有用な形質を持つ 3 個体を交配母本とした。生産力検定では 2 系統を供試し、外観品質が優れている「郡系 5」を交配母本とした。	
試験課題名：個性豊かな品種育成のための促進技術開発		C1-1-4
予算区分：外部資金（イノベーション創出強化研究推進事業）、寄附金（JA グループ福島寄附金）、国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究））、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：品種開発科		
概要	【イネ】 DNA マーカーを用いて福島系統 14 系統、郡系系統 36 系統、単独系統 121 系統の多型解析を行い、葉いもち抵抗性、穂いもち抵抗性、耐冷性、閉花受粉、及びカドミウム低吸収性遺伝子の有無を明らかにした。 ゲノム解析により新たに推定された高温登熟性に関与する遺伝子領域の多型を調べ、遺伝子を特定した「里山のつぶ」と「福島 47 号」の交配後代 F3 個体について、高温登熟性を有しているか確認したところ、2 遺伝子が「福島 47 号」由来の遺伝子多型になると、白未熟粒の発生が「ふさおとめ（強）」並になり、「福島 47 号」の母本である「ふさおとめ」由来の高温耐性を選抜するための新規マーカーを獲得することができた。 岩手県及び宮城県において遺伝子集積による超多収良食味品種の育成を目的とし、複数の組合せで遺伝子が集積された系統の生産力検定を行った結果、供試系統すべてが、比較品種よりも低収となり、目標とする 800kg/10a の収量には達しなかった。 【リンドウ】 2022 年度に稔性が確認された植物体 3 個体のうち、1 個体を純系と判別した。 【アスパラガス】 両性花由来実生 20 個体のうち、3 個体が超雄であった。薬培養による床置前処理条件は、4℃暗所で 1 日静置することが適していた。薬培養由来 119 個体から超雄は得られなかった。	
試験課題名：バイテク活用による優良原種苗の長期保存・増殖技術開発		C1-1-5
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：品種開発科		
概要	3 系統の培養苗の生育に及ぼす影響を温度と培地に添加する植物成長調整剤を組合せて検討した。系統による生育反応の違いを明らかにし、越冬芽形成や花成抑制に有効となる可能性の温度条件や組合せ条件を示した。	

C1-2 作物、野菜、花きの有望品種・系統の評価

試験課題名：奨励品種決定調査		C1-2-1
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科、畑作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	水稻では、予備調査で「福島 65 号」、「福島 69 号」、「福島酒 67 号」をやや有望、本調査で「福島 66 号」を再検討とした。 コムギでは、本調査で「夏黄金」、「さとのそら」をやや有望とした。予備試験で「東北 240 号」を再検討とした。 オオムギでは、予備試験で「北陸皮 78 号」をやや有望、「北陸皮 72 号」、「北陸糯 73 号」を打ち切りとした。 ダイズでは、予備試験で「東北 194 号」、「関東 155 号」、「北陸 6 号」を再検討、「東北 191 号」をやや劣るとした。	
試験課題名：麦類育成系統の地域適応性試験		C1-2-3
予算区分：外部資金（国産麦開発支援事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畑作科		
概要	育成地より配付されたコムギ 26、オオムギ 21 系統のうち、コムギで 2 系統を有望とした。	

C1-3 作物、野菜、花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立

試験課題名：県産米の高品質化・良食味米生産のための栽培管理技術の確立		C1-3-1
予算区分：外部資金（新稲作研究会委託試験、稲民間育成品種評価委託試験）、寄附金（JA グループ福島寄附金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	会津地域研究所、浜地域研究所において民間育成系統を 10 系統供試し、1 系統を基準品種より優る、4 系統を基準品種並と評価した。 「天のつぶ」における高密度播種苗栽培では育苗日数が 25 日を超えると急激に苗の老化が進み、苗の活着が遅れ初期分げつが減少するため、育苗日数は 20 日前後が適正であると考えられた。高密度播種苗栽培において側条 1 段施肥及び側条 2 段ペースト施肥により、初期分げつ発生本数、穂数、籾数が向上し、収量の安定化が可能であると考えられた【普及成果 4】。 水稻米粉用品種の高湿年における生育特性、製粉特性を調査した。	
試験課題名：県オリジナル酒造好適米の栽培方法の確立		C1-3-2
予算区分：国庫（オリジナルふくしま水田農業推進事業）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2026 担当科所：品種開発科、会津地域研究所		
概要	酒造好適米は、高温になると消化性(Brix)、千粒重、整粒歩合が低下する一方、50%精米時の碎米率が上昇する傾向が見られた。「福乃香」は、「五百万石」に比べ、どの温度帯においても消化性が高く、高温でも高い消化性が確保できると考えられた。 酒造好適米「福乃香」について、「山田錦」と同等の精米品質を目指すための生育の目安を明らかにした【参考成果 4 5】。	

試験課題名：野菜の有望系統・新品種の栽培技術の確立		C1-3-3
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：野菜科		
概要	イチゴ「福島 ST14 号」について、電照の有無及び電照期間の違いによる生育と収量に差はなく、中通りにおける高設栽培では電照無しでも草勢維持と収量確保が可能であることを確認した【R4 秋冬作参考成果 1】。 イチゴ「福島 ST14 号」について、育苗時の窒素施肥量に関する試験を実施した結果、180 mg/株が適していることを確認した。また、土耕栽培における本圃基肥窒素施肥量について、収量・生育に差がなかったことから 13kg/10a で十分であると考えられた【R4 秋冬作参考成果 2】。	
試験課題名：花きの有望系統・新品種の栽培技術の確立		C1-3-4
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：品種開発科、花き科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	【リンドウ】 県育成品種「天の川」の草丈の伸長を目的として、早い時期で追肥や、施肥量の増加について検討したが、夏の高温の影響もあり効果は判然としなかった。 【カラー】 県育成 3 品種について、開花球を供試し切り花本数や球根の肥大状況を調査した結果、球根重が重くなるに従い切り花本数が増加する傾向が見られ、概ね 30g 以上であれば開花が期待できた。また、小球の養成について定植期を変えて球根の肥大状況を比較した結果、7 月定植で球根の肥大が良好で軟腐病の発生も少なかった。 浜通り平坦部で抑制栽培を行うと、切り花後の球根はいずれの品種も定植時より大きくなり、再利用可能な 30g 以上の球根も株当たり 1.3～2.1 個と増加したことから、浜通りにおける抑制栽培は有効と考えられた。 培養苗の養成については、所内の試験ではポット仮植苗を定植した株の球根肥大が、セル苗を直接定植した株と比較して優れる傾向が見られたが、現地試験では品種によってはポット仮植苗の球根肥大が劣る傾向となるなど、判然としなかった。また、栽植密度の違いが球根肥大に及ぼす影響についても判然としなかった。 培養苗から球根を養成する技術について、現段階で得られている知見をまとめ、栽培マニュアル（技術資料集）を作成した。	

C 1 - 4 個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成

試験課題名：個性豊かな県オリジナル果樹品種の育成		C1-4-1
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)）一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	モモ「あかつき」に続いて収穫でき、大玉で食味良好な系統である「モモ福島 19 号」を選抜した【参考成果 2 3】。 ニホンナシの交雑実生から、当研究所で育成してナシ黒星病耐病性系統を用いて交雑を行い、獲得実生の中から耐病性を有する 2 個体を選抜した【参考成果 2 4】。 「ナシ福島 7 号」は、ナシ主要品種である「幸水」（S4S5）、「豊水」（S3S5）、「あきづき」（S3S4）と交配親和性が高く、開花期が「幸水」と同時期であることから、「幸水」の受粉 樹としての利用が可能であることを明らかにした【参考成果 2 5】。 リンゴの早期開花に向けた実生の生長促進には、12 月までに加温温室内で播種を行い、最低気温 20℃、夜間を白色＋青色 LED（430～460nm）で補光し、定期的に液体肥料を追肥する育苗方法が効果的であることを明らかにした【参考成果 2 8】。 ブドウの着色を決める MYB 遺伝子型の DNA マーカーを用いて、紫黒色が期待される遺伝子 E2 を持つ 7 個体を幼苗から選抜した【参考成果 3 0】。	

C 1－5 果樹の有望系統の評価および新品種・有望系統の栽培技術の確立

試験課題名：果樹系統適応性検定試験		C1-5-1
予算区分：外部資金（系統適応性・特性検定試験）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	非公開	
試験課題名：県オリジナル果樹品種の安定生産・流通技術の確立		C1-5-2
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究））、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	モモ「はつひめ」は、摘らい無し区では核割れ果の発生がやや多く、よろけ果の発生が多い傾向が見られた。また、人工受粉を行うことで、摘らいの有無にかかわらず平均果実重は300g以上となることが明らかとなった。 2023 年産の「ふじ」は、成熟期の高温により、例年に比べて果皮着色や蜜入りが劣ったが、このような気象条件下でも、本県育成りんご品種である「べにこはく」は果皮着色や蜜入りが優れることを明らかにした【参考成果 2 7】。	

C 1－6 個性豊かな県優良家畜等の改良

試験課題名：牧草・飼料作物の優良草種・品種の選定		C1-6-1
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所飼料環境科		
概要	耐暑性、越夏性が高い極長期利用型のイタリアンライグラス(イタリアンライグラス型フェストロリウム含む)品種を選定するため、利用 1 年目に越夏できた 3 品種の収量性等を調査した結果、「アキアオバ 3」ほか 3 品種が利用 2 年目も越夏可能で標準品種より年間収量が多かった。	
試験課題名：「フクシマ L2」の開放型育種		C1-6-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	「フクシマ L2」種豚群に新 L2 後継豚 3 頭を組み入れることで、近交係数が 13.0%、血縁係数が 32.3%に低下した。「フクシマ L2」の長期的維持及び能力向上を図るため、家畜改良センター茨城牧場から精液を導入し、人工授精を 4 頭実施した結果 3 頭受胎した。	
試験課題名：県ブランド鶏の改良と開発		C1-6-3
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所養鶏科		
概要	県ブランド種鶏の改良の結果、「会津地鶏」及び「ふくしま赤しゃも(川俣シャモ)」の雌系種鶏である「ロードアイランドレッド種 P13」系統、雄系種鶏である「大型会津地鶏」と「大型しゃも」及び「大型しゃも」後継系統の推定育種価は向上し、遺伝的改良は進んでいた。「大型しゃも」の種鶏更新を行った【普及成果 1 6】。「会津地鶏」もも肉の味及び機能性成分含量を数値化し、生産者へ情報提供した。	
試験課題名：胚移植技術を活用した高能力肉用牛の効率的生産技術の確立		C1-6-4
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所動物工学科		
概要	2023 休止	

試験課題名：ゲノム情報を活用した家畜の育種改良技術の確立		C1-6-5
予算区分：国庫（福島牛改良基盤再生事業）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所動物工学科		
概要	県有種雄牛 12 頭(枝肉重量の推定育種価正確度 0.95 以上)の推定育種価(2023 年 9 月)と(独)家畜改良センターとの共同研究で得られたゲノム育種価(2023 年 5 月)との間においては、バラの厚さ及び脂肪交雑の項目で中程度の相関があり、ほか 4 形質で高い相関があった。 県有種雄牛 12 頭(枝肉重量の推定育種価正確度 0.95 以上)の推定育種価(2020 年 7 月)と(国研)農研機構との共同研究で得られたゲノム育種価(2023 年 2 月)との間において、オレイン酸及び MUFA で高い相関があった。 また、R4 に整備した福島県独自訓練群により、県内繁殖雌牛 505 頭についてゲノミック評価し、遺伝的趨勢を確認した。県内繁殖雌牛のゲノム育種価は、基準となる肥育牛群より高かった【参考成果 4 1】。	
試験課題名：ゲノミック評価を利用した繁殖雌牛の評価		C1-6-6
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：畜産研究所動物工学科		
概要	市販の保存液入り DNA 採取キットにより、研究員と農家自身で採材したサンプルから DNA を抽出した。農家自身が採材したサンプルでもゲノミック評価可能な DNA が採材できた。	

C2 農産物を「ふくしま」ならではの製品にする技術の開発

C2-1 県産農産物の特性を活かした利用技術の開発

試験課題名：県産農産物の加工技術の開発		C2-1-1
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：流通加工科		
概要	県産ナシの加工特性を調査した結果、65℃、10 分の加熱加工した場合、CI 値(Crispness Index)は供試した 4 品種ともシャリ感が感じられる目安の 10 を上回り、加工 4 週間後においてもシャリ感が維持されることを明らかにした。 大豆発酵食品テンペの外観を損なわない発酵条件について検討した結果、45%程度の低湿度では外観品質が低下するレベルで黒色孢子が発生したが、湿度 99%程度では孢子発生が軽微であり品質の良いテンペが作成されることを明らかにした。 あんぼ柿の加工工程における傷と冷凍保存の影響について検討した結果、乾燥時に傷がつくと白粉が多く発生すること、加工品完成時の刷毛処理は白粉の発生に影響が少ないことを明らかにした。	
試験課題名：県産農産物の品質保持技術の開発		C2-1-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：流通加工科		
概要	「ゆうやけベリー」の成熟過程における果実品質について検討した結果、糖度は調査期間を通じてどの着色程度においても「とちおとめ」より高く、開花から収穫までの積算温度は「とちおとめ」より低いことが明らかとなった。硬度は貯蔵に伴い「とちおとめ」より低下しやすく、着色程度が低いほど低下幅が大きい傾向であった【R4 秋冬作参考成果 5】。 リンゴの慣行包装時とプラスチック包装削減時における CO₂ 排出量について検討した結果、果実保護材に「PSP モールド」を使用すると CO₂ 排出量は少なく、「PET モールド」を使用すると費用は安く抑えられるが CO₂ 排出量が多くなることが示された。	

試験課題名：本県農産物の機能性成分の評価と利用技術の開発		C2-1-3
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業（研究）） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：流通加工科		
概要	ブロッコリーの遊離アミノ酸は複数種類検出され、花芽ではプロリン、GABA、アラニンなどが多く見られた。主茎の内側部分ではグルタミン酸やアスパラギン酸等の含有量が他の部位より多い傾向が見られ、アミノ酸の種類によって局在は異なっていた【R4 秋冬作普及成果1】。 ブロッコリーの加熱方法別のビタミンC含有量の変化について、フローレットではいずれの加熱方法でも顕著に減少する傾向が見られた。主茎の内側部分や外側部分は、加熱方法によらず、処理後の含有量は加熱前から変化が少なかった。【R4 秋冬作参考成果6】。 ブロッコリーに含まれるスルフォラファングルコシノレートの含有量と局在及びルテインの含有量について調査した。また、ブロッコリーの加熱方法別のアミノ酸含有量及び一次加工後のビタミン類含有量の減少状況について調査した。 県産ブドウ3品種に含まれるGABA含有量と局在について調査した結果、GABAは果肉内壁部に局在し、果肉に多い定量結果と一致した【参考成果9】。	

C2-2 県産農産物の輸出拡大に向けた生産・保鮮技術等の開発

試験課題名：モモせん孔細菌病に対する多目的防災網を活用した防除効果の検証		C2-2-1
予算区分：国庫（園芸グローバル産地育成強化事業） 開始年度：2021 終了年度：2024 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	発芽期から完全落葉期まで多目的防災網を設置することにより、モモせん孔細菌病の防除効果が高く、果実品質への影響は認められないことが明らかとなった【普及成果15】。	
試験課題名：シュッコンカスミソウの輸出に向けた鮮度保持技術の開発		C2-2-3
予算区分：繰入金（園芸グローバル産地育成強化事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：会津地域研究所		
概要	シュッコンカスミソウの乾式輸送での梱包前の処理条件について検討した結果、25℃処理により開花が進行する傾向が見られた。また、品質保持剤（植物生長調節物質）の添加により日持ちが長くなる傾向が見られた。	
試験課題名：ナシ黒星病に対する秋期及び果実肥大後期の新防除体系の検証		C2-2-4
予算区分：国庫（園芸グローバル産地育成強化事業） 開始年度：2021 終了年度：2024 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	ナシ黒星病の越冬源の一つとして重要なりん片生組織露出芽率は、10月中旬頃から高くなり、11月上旬頃にピークとなった。また、落葉率は、10月下旬から増加し、「幸水」は11月上旬、「豊水」は11月下旬までに9割が落葉した。 果実肥大後期に防除効果が高い薬剤を組入れた新たな防除体系の効果は、菌密度が低く判然としなかった。	

試験課題名：花き類の保鮮流通技術の開発		C2-2-6
予算区分：繰入金（園芸グローバル産地育成強化事業） 開始年度：2023 終了年度：2025 担当科所：花き科		
概要	ダリアの巨大輪品種「マルコムズホワイト」で蕾切りの切り前で日持ち性を調査したところ、通常切りと比較し日持ち期間はほぼ同等であるが、花径が小さくなる傾向が見られた。また、中大輪品種「黒蝶」を蕾切りで収穫することで、1本あたりの輸出コストが抑えられることを明らかにした【参考成果20】。 リンドウ「天の川」の輸出を想定した日持ち試験において、STS 剤と糖が含まれている前処理剤を用いることで、日持ち期間が長くなる傾向が見られた。 トルコギキョウでは、日持ち期間が長いとされる無花粉品種「PF ダブルスノー」について輸出を想定した日持ち試験において、日持ち期間は1週間以上確保された。	

C2-3 「福島牛」ブランド競争力強化技術の確立

試験課題名：「福島牛」の高付加価値生産システムの確立		C2-3-1
予算区分：国庫（福島県産農産物競争力強化事業(研究)、福島牛改良基盤再生事業、うまい！「福島県産牛」生産・販売力強化対策事業）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	福島牛ならではの「おいしさ」に関する消費者へのアンケートを実施。和牛肉の注文・購入時に重要視することは、「やわらかさ」「口どけの良さ」「ジューシーさ」の食感と、「うま味」の味に関する項目の回答が多いことがわかった。「霜降り、サシの度合い」については、「変えないでほしい」との現状維持が約9割であった。 光学測定値と理化学分析値・枝肉画像解析値の関連性について調査した結果、光学測定値と理化学分析値の間には、オレイン酸、飽和脂肪酸、一価不飽和脂肪酸の3項目に中程度の相関、粗脂肪含量に高い相関であった。光学測定値と枝肉画像解析値の間には、粗脂肪含量と脂肪面積割合に高い相関、粗脂肪含量と新細かさ指数及びあらさ指数に中程度の相関であった。 ゲノム育種価と「おいしさ」の指標を活用した種雄牛造成に向け、「隆福久」の現場検定を実施し、「隆福久」産子は枝肉重量、ロース芯面積、バラの厚さ、皮下脂肪の厚さが全国平均より優れた成績であった。 地域資源を活用した肥育牛への給与試験において、牛肉の味覚センサー分析及び嗜好型官能評価を実施。酒粕を長期間給与した牛肉は、甘みの値が高かった。嗜好型官能評価では、酒粕を長期間給与した牛で「やわらかい」、「ジューシー」、「脂の甘味が強い」、「味が好ましい」、「全体として好ましい」の項目が有意に高くなった。 和牛総合指数評価技術の開発で収集された枝肉画像、枝肉成績及び血統情報を解析した結果、遺伝相関において「新細かさ指数」は「ロース芯面積」、「歩留基準値」、「BMS」、「脂肪面積割合」で高い正の相関となった。一方「オレイン酸」は枝肉形質及び枝肉画像解析値と負の相関であった。	

C2-4 「ふくしま」ならではの地域特産物を活かした栽培・流通技術の確立

試験課題名：オタネニンジンの産地づくり支援に関する研究		C2-4-4
予算区分：国庫（地域特産活用産地づくり支援事業） 開始年度：2022 終了年度：2025 担当科所：会津地域研究所、品種開発科		
概要	オタネニンジンの培養苗の順化において、温度条件を明期 20℃・暗期 15℃にすることで根部の生育と新芽の形成が促進された。 オタネニンジンのコンテナ育苗において用土連用した場合、収穫時の地下部生育は、液肥の葉面散布で良好であった。また、コンテナ当たり 150 粒、250 粒、350 粒の播種密度で栽培した結果、播種密度が低いほど良苗率が高かった。収穫量は 250 粒播種が最も多かった。 オタネニンジン種子の催芽処理に用いる資材の検討をした結果、パーライト大粒が催芽率及び胚率が高く、扱いやすいことから、催芽処理資材として有望であった。	

試験課題名：エゴマ安定生産体系の確立

C2-4-5

予算区分：国庫（地域特産活用産地づくり支援事業）

開始年度：2022 終了年度：2025

担当科所：畑作科、経営・農作業科

概要

収穫時期の分散に向けた早生系統は、田村在来に比べ、韓国極早生と下郷在来の成熟期が19日早く、収穫時期の分化になると考えられた。

多収実現に向けて最適な栽植密度は、雑草の乾物重とエゴマの子実重から株間15cmであることが示唆された。

エゴマ大規模経営体の経営調査の結果から、作付面積5ha、単位収量30kg/10a、収穫した子実1,500kgを全量エゴマ油として加工、販売すると仮定した経営体の場合、年間収益330万円、栽培に要する年間労働時間は約1,700時間となると試算した【参考成果2】。

D 地球温暖化等の気候変動に対応し、環境と共生する農林水産業を進めるための技術開発等の推進

D1 気候変動に対応し農業生産の安定化に寄与する技術の開発

D1-1 気候変動に対応した生産技術の開発

試験課題名：夏季高温条件下における良質・良食味米生産技術の確立		D1-1-1
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科		
概要	出穂期後 20 日間の平均気温が 26℃を超すと白未熟粒が顕著に増加し、「ひとめぼれ」、「コシヒカリ」と比較し、「天のつぶ」、「福笑い」の方が白未熟粒は少ないことが分かった【参考成果 11】。 飽水管理により夜間の平均地温を低く抑えられ、水位センサー及び自動灌水装置（水位データはクラウド保存され、設定水位に応じて自動で入水）を試験水田(4a)に 1 セット設置することにより、飽水管理に係る時間を削減できた【参考成果 12】。 「ひとめぼれ」では高温登熟条件下の出穂期追肥によって玄米品質の低下を軽減でき、出穂期追肥により品質（整粒歩合 70%以上）や食味（玄米タンパク質含有率 6.5%以下）を維持できる、幼穂形成期の生育量の目安は 1.5×10^6であることを明らかにした【普及成果 5】。	
試験課題名：主要野菜の安定生産技術の確立		D1-1-2
予算区分：国庫（スマート農業プロセスイノベーション推進事業）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：野菜科		
概要	夏秋トマト栽培におけるミスト噴霧により、平均気温 30℃及び 35℃以上の積算時間が短くでき、飽差も改善された。また、ミスト噴霧による収量差は判然としなかったが、トマト品種「りんか 409」で放射状裂果の発生が抑えられた【参考成果 18】。 アスパラガス「ふくきたる」において、秋の萌芽停止後、5℃以下の低温遭遇時間が 0 時間から 300 時間までであれば、どの時期に保温を開始しても 1 週間程度で萌芽が再開することを明らかにした【R4 秋冬作参考成果 4】。また、7 月中下旬に追加立茎を行うことで追加立茎以降の夏どり収量は減少するが、翌年の春芽の収量が 50kg/a 以上増加すると考えられた。「ふくきたる」の 2 年生株の 11 月下旬からの保温開始を行ったが、出荷時期の前進化は確認できなかった。	
試験課題名：温暖化傾向に対応した花きの安定生産技術の確立		D1-1-3
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：花き科		
概要	夏季を経過するトルコギキョウ栽培におけるチップバーンの発生を抑制するため、PF 値により土壌水分を制限し生育状況を調査したが、チップバーンの抑制効果は見られなかった。 リンドウの高温障害である花卉の着色不良について、露地ほ場において遮光を実施し無処理と比較したところ、花卉抽出期からの遮光により花卉着色不良の発生が減少することを確認した。	

試験課題名：主要農作物生育作柄解析調査研究		D1-1-4
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科、畑作科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	水稻については、6～9月の高温により、平年に比べて幼穂形成始期、出穂期が早まる傾向が見られ、成熟期は各方部で3～12日早まった。玄米重（篩目1.7mm以上）は、平年対比で本部が93～107（穂数、m²収量の減）、会津地域研究所が93～108（穂数、1穂収量、m²収量の増）、浜地域研究所が109～116（穂数、登熟歩合の増）であった。品質は、平年に比べて整粒が少なく、粒厚は本部と浜地域研究所で厚く、会津地域研究所では薄かった。 2023年の記録的な夏季高温による水稻への影響について成果として報告した【参考成果13】。 ダイズについては出芽が良好で、開花期が早まった。7月、8月の高温乾燥により登熟不良のため青立ちとなり成熟期は遅れた。本部及び会津地域研究所では減収し畦間灌水を実施した浜地域研究所では増収したが、裂皮粒が発生し精子実重は平年以下となった。 麦類については、出芽は良好で、苗立数は平年並だった。2月以降高温で推移し、出穂期、成熟期は早まった。収量は各方部とも平年並となった。	
試験課題名：温暖化に対応した果樹の生育予測技術及び生育障害対策技術の確立		D1-1-5
予算区分：外部資金（戦略的スマート農業技術等の開発・改良）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科、会津地域研究所		
概要	カキ「平核無」の切り枝をプログラム低温恒温器内で低温処理することで、カキの凍霜害危険度予測モデルを作成した【普及成果13】。 果樹研究所における1991年から2020年の気温とモモ「あかつき」の生育データにより、生育速度（以下、DVR）モデルを作成し、硬核期、収穫期を予測するシステムを改良した【普及成果14】。 2016年～2023年の8年間は、2006年～2016年の10か年間に比較して、平均気温が0.8℃上昇しており、モモ「あかつき」の生育は、満開日が11日、収穫盛期日が9日と顕著な前進が見られることを明らかにした【参考成果22】。 2023年は、リンゴ「ふじ」の果実成熟期である満開後150日以降も気温が高く経過していたことから、果実の着色や蜜入りが不良となったと考えられた【参考成果26】。 ブドウ「ピオーネ」（露地栽培）の果房において、数粒ほど色が入ってきた果房に、アブシジン酸液剤100倍希釈液をハンドスプレーを用いて1果房当たり約8ml散布した結果、散布した果房は、果皮色の向上が確認された【参考成果29】。 1991年～2020年の気温とモモ「あかつき」、ナシ「幸水」、リンゴ「ふじ」の生育データから生育速度モデルを作成し、発芽・開花予測システムを更新した。予測精度は、推定誤差（RMSE）で、発芽日が1.9～2.6日、開花日が1.4～2.2日、満開日が1.4～2.4日と実用的な予測が可能となった【参考成果32】。 会津地域におけるリンゴ「ふじ」、カキ「会津身不知」のDVRモデルを作成し、生育ステージ予測モデルを開発した【普及成果17】。	

D2 環境負荷を低減する農業生産に資する研究開発

D2-1 中山間地における農地管理技術の開発

試験課題名：中山間地における農地保全管理の省力技術体系の確立		D2-1-2
予算区分：繰入金（中山間ふるさと水と土保全基金） 開始年度：2019 終了年度：2023 担当科所：経営・農作業科		
概要	刈払機では、法面面積が大きくなるほど心拍数が上昇するが、リモコン式草刈機では面積が大きくても心拍数の上昇を抑えられた。空調服の有無で心拍数の上昇に差はなかったが、体感的には涼感があることを明らかにした。	

D2-2 環境と共生する病虫害防除技術の開発

試験課題名：総合的病虫害管理（IPM）による環境と共生する農業技術の確立		D2-2-1
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：作物保護科		
概要	営農管理支援ソフトを用いて、浜通り地域の農業経営体の防除実態を把握した。 水稻のいもち病について、出穂前の穂は日平均気温 25℃で出穂 6 日前(出穂始めからの有効積算温度で-90 日℃)から穂いもちを発病する危険性があり、この時期の葉耳間長はおよそ 4cm であることを明らかにした。 トマトすすかび病を対象とし、安価なマイコン開発用ボードを用いた防除判断プログラム及び機器を作製し、予測精度の検証を行った。	
試験課題名：果樹における生物資源等を活用した環境と共生する病虫害防除技術の開発		D2-2-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所病虫害科		
概要	福島市において採集した土着天敵ミヤコカブリダニの薬剤感受性は、アシノナビル水和剤、アセキノシル水和剤、スピネトラム水和剤及びビフェナゼート水和剤では低く、ミルバメクチン乳剤でやや高かった。	

D2-3 有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立

試験課題名：有機農産物の低投入持続型栽培技術の確立		D2-3-1
予算区分：国庫（環境にやさしい農業拡大推進事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：有機農業推進室、経営・農作業科		
概要	水稻有機栽培ほ場において、副産物(稲わら等)のみを再投入して栽培を継続する「低投入持続型水稻有機栽培技術」を実証した。実証 6 年目である本年の精玄米重は前年よりも増収し、低投入区 344～359kg/10a、有機慣行区 527kg/10a と、低投入区の収量は有機慣行区の 65～68%を確保するなど、昨年に引き続き安定した収量を確保できた。 また、水稻有機栽培ほ場において、機械除草の回数がコナギの発消長に及ぼす影響を検討したが、除草前のコナギの発生量に差があったことから、除草回数による除草効果の差は判然としなかった。しかし、4 回除草により発生密度は低減され、イネの生育、収量、品質への影響は認められず安定した収量を確保できた。 野菜有機栽培ほ場の無加温ビニールハウス内で、2 月 27 日定植のリーフレタスとキャベツについて、リーフレタスは 4 月下旬から、キャベツは 5 月中旬から収穫可能であり、秋冬期葉菜類の後作として有望であった。 水稻有機栽培に取り組む一法人の畦畔除草作業を調査した結果、作業は数種類の機械を用いて行われており、刈払機の延べ作業面積が最も多かった。 県内の複数の水稻有機栽培を行う経営体に栽培概況と流通形態を聴き取り、水稻有機栽培の集出荷業者出荷時の利益を試算した結果、22,327 円/10a であった。また、水稻有機栽培における家族経営時の経営モデルを作成した【参考成果 3】。	

D2-4 環境負荷の低減に向けた技術の開発

試験課題名：温室効果ガス排出軽減技術の確立		D2-4-1
予算区分：外部資金（農地土壌炭素貯留量等基礎調査事業(農地管理技術検証)） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	水田の「秋耕」及び「中干し延長」技術による温室効果ガスの発生抑制効果を調査した結果、「中干し延長」及び「秋耕」による削減効果は認められなかった。また、いずれの技術も収量への影響は見られなかった。	

試験課題名：農地における土壌管理実態調査		D2-4-2
予算区分：国庫（農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎調査事業（農地管理実態調査）） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	農地土壌炭素貯留に関する土壌調査を、県内 12 地点で行った。深さ 30cm の農地の土壌炭素量は、23.4～208.5t/ha であった。	
試験課題名：果樹園における省力的環境負荷軽減のための肥培管理技術の確立		D2-4-3
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	モモの効率的な施肥法の確立を目的に、慣行より 50%削減した施肥方法について調査した結果、土壌の化学性、収穫量及び果実品質に差は見られなかったが、主枝先端の新梢長と新梢中窒素含有量が慣行に比べて減少する傾向にあった。 また、リンゴにおいて、肥効調節型肥料の施肥時期（9 月、10 月、3 月）による差について調査した結果、リンゴの樹体生育と果実品質及び着色等で施肥時期の違いによる差は見られなかった。	
試験課題名：効率的肥培管理技術の確立		D2-4-5
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：環境・作物栄養科		
概要	中山間地域におけるソバの安定生産確立のため、会津坂下及び南会津地域のソバほ場 41 か所について、土壌の理化学性及び栽培管理に関する聴き取り調査と、リン酸供給肥料施肥試験を行った結果、リン酸供給肥料を上乗せ施用した区では子実重、千粒重が増加し、ソバの生育促進や収量改善にはリン酸が有効であることが示唆された【参考成果 7】。	
試験課題名：家畜排せつ物堆肥の高度利用技術の開発		D2-4-6
予算区分：繰入金（畜産環境保全対策事業（産業廃棄物税基金）） 開始年度：2022 終了年度：2026 担当科所：環境・作物栄養科、畜産研究所飼料環境科		
概要	乳牛糞にもみ殻くん炭を副資材として投入し堆肥化したが、もみ殻を使用した堆肥化と比較し優良な点はなかった。堆肥の水分が 38%でもペレット化は可能だが、水分 25%の堆肥をペレット化したものより見た目や硬度が劣っていた。もみ殻くん炭入り堆肥をペレット化する場合には、もみ殻くん炭含有量を 40%までにすることがあることが分かった。 県内の公設堆肥センター6 か所の堆肥の散布後の溶出時期や溶出量についての調査やポット試験を行った結果、各堆肥の窒素溶出量や溶出時期は堆肥の種類により違った。また、ポット試験は、生育不良のため堆肥の施用による効果は判然としなかったが、堆肥の施用により可給態リン酸が 10.2～21.3mg/100g、交換性カリ含量が 55.6～106.7mg/100g 増加した。	
試験課題名：農業副産物を活用した高機能バイオ炭施用の作物への影響と炭素貯留効果		D2-4-7
予算区分：外部資金（グリーンイノベーション基金事業） 開始年度：2023 終了年度：2027 担当科所：野菜科		
概要	ブロッコリーのポット試験においてバイオ炭の連年施用による影響及び施用上限を明らかにするため、体積比で 0%、10%、20%、30%バイオ炭を混和して調査を行った結果、混和率による生育、収量に大きな差はなかった。また、30%混和しても生育に影響がないことを確認した。ほ場試験ではバイオ炭の適正な施用量と連年施用による影響を明らかにするため、0kg/10a、200kg/10a、400kg/10a、600kg/10a バイオ炭を施用した結果、施用 1 年目における生育、収量に大きな差はなかった。	

試験課題名：放射性物質除染後ほ場におけるバイオ炭施用の作物への影響と炭素貯留効果 D2-4-8

予算区分：外部資金（グリーンイノベーション基金事業）
 開始年度：2023 終了年度：2027
 担当科所：環境・作物栄養科、浜地域農業再生研究センター

概要	もみ殻くん炭を施用した現地ダイズほ場において、一酸化二窒素の発生量は少なく、くん炭の効果は判然としなかった。
----	--

E 安全・安心な県産農林水産物の安定供給と生産者の所得向上のための試験研究の推進

E 1 産地や経営体において収益性を高める技術の研究開発

E 1-1 水稻、畑作物の安定生産技術の確立

試験課題名：寒冷地における雑草イネ省力防除技術の開発		E1-1-1
予算区分：外部資金（戦略的プロジェクト研究推進事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：稲作科		
概要	雑草イネは、移植時期、代かき及び雑草イネに有効な除草剤による体系処理等を組み合わせた総合防除を行うことで防除が可能である。生産現場でも容易に取り組めるよう本技術を解説したマニュアルを作成した【普及成果6】。	
試験課題名：省力的な稲作栽培に適応した雑草防除技術の確立		E1-1-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：稲作科		
概要	鉄コーティング直播栽培は、除草剤を2～3回散布する体系防除が一般的となっている。トリアファモン・ピラクロニル・ベンゾビスクロン粒剤（商品名：アシュラ1キロ粒剤）をイネ1葉期からノビエ4葉期に1回散布することで、高い除草効果を得られることが確認できた【参考成果14】。	
試験課題名：畑作物の高品質・安定栽培技術の確立		E1-1-3
予算区分：外部資金（福島大学委託）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畑作科		
概要	伝統的発酵食品や新たな大豆加工食品開発に適したダイズ品種選抜のため多様な国内外のダイズ合計161品種・系統を栽培した。生育ステージ・栽培特性を調査し、子実を収穫し福島大学に提供した。 コムギ「夏黄金」は晩播（11月上中旬に播種）することで収量が高まった【参考成果16】。 コムギ「さとのそら」は生育後期重点型の施肥体系で収量が高まった【参考成果17】。 ダイズ難防除雑草（アレチウリ、帰化アサガオ類）に対するトリフルラリン乳剤の播種前土壌混和処理を検討し、おおよそ処理30日まで帰化アサガオ類の生育及び個体密度を抑制した。	
試験課題名：マルチオミクス解析に基づく作物の安定多収に向けた栽培技術の開発		E1-1-4
予算区分：外部資金（ムーンショット型農林水産研究開発事業） 開始年度：2018 終了年度：2024 担当科所：畑作科		
概要	県内のダイズ栽培ほ場における収量関連要素を明確にし、改善に向けた資材・技術を明らかにできる。ダイズを対象に、関係各所から送付された12資材を施用し栽培、生育データとダイズの乾物と土壌を解析担当の研究機関に提供した。	
試験課題名：葉たばこ特別調査		E1-1-5
予算区分：外部資金（日本葉たばこ技術開発協会） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畑作科		
概要	新規薬剤の葉たばこ耕作への適性を検証するため、所定量の薬剤を適期に散布後、官能試験用の原料を生産し、提供した。	

試験課題名：水稻の疎播疎植と高精度２段階施肥体系による省力多収栽培技術の確立		E1-1-6
予算区分：外部資金（オープンイノベーション研究・実用化推進事業） 開始年度：2023 終了年度：2026 担当科所：稲作科		
概要	疎播疎植と高精度２段階ペースト施肥を組み合わせた「天のつぶ」の収量は、いずれも慣行栽培と同等となった。また高精度２段階ペースト施肥の深層の施肥割合を多くした深層区は、側条と深層の施肥割合を均等にした均等区より、穂数や一穂粒数が増加し、やや多収となった。	

E 1 - 2 野菜・花きの安定生産技術の確立

試験課題名：地域特性を活かした施設花きの安定生産技術の確立		E1-2-1
予算区分：外部資金（日本種苗協会）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：花き科		
概要	鉢花カーネーションでは、電球色 LED を使用した電照栽培により、加温設定温度を下げて必要期に出荷でき、燃油消費量を削減できる可能性が示唆された。ただし草丈が伸び過ぎてしまう課題があり、その解決のために節間伸長の抑制を期待して早朝降温処理を試験したが、効果は見られなかった。 トルコギキョウの秋出荷作型における作型適応苗の栽培について、さらなる品質向上を目的として LED による赤色光を照射した結果、供試した 5 品種のうち 3 品種で、やや品質が向上する傾向が見られた。 また、トルコギキョウ品種特性調査として、新系統等の 23 系統（品種）を供試し、ほ場に展開後、生育調査や検討会により、当地域での季咲き作型に適応性の高い系統を評価した。また、技術移転セミナーにより県内生産者に内容を周知した。	
試験課題名：ふくしまの特色ある露地花きの安定生産技術の確立		E1-2-2
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：花き科		
概要	県育成リンドウ品種「ふくしまさやか」、「ふくしましおん」、「ふくしまほのか」、「天の川」の生育ステージを調査した結果、いずれの品種も萌芽期は前進し、開花期も平年並みから前進傾向となった。また、肥効調節型肥料を定植時に 2 年分投入し、定植 3 年目の生育を調査した結果、慣行区と比較して生育や品質に差はみられなかった【普及成果 10】。 ユーカリの越冬対策として敷きわら、白塗り剤樹幹塗布、白色マルチシートによる樹幹被覆を検討した結果、それらの処理により樹幹内部の温度の変動が小さく抑えられることが明らかとなり、その効果はマルチシート被覆が最も高かった。 また、効果的な挿し木増殖技術を確立するため、培地素材として鹿沼土と市販の固化培土を供試し、かん水方法としては底面給水、底面給水した後数時間で排水される方法、ミストによる上部かん水について比較検討した。	
試験課題名：特産野菜の安定生産技術の確立		E1-2-3
予算区分：国庫（風評に打ち勝つ園芸産地競争力強化事業） 開始年度：2021 終了年度：2024 担当科所：野菜科、経営・農作業科		
概要	矮性サヤインゲン栽培の機械化体系における品種は「ピテナ」が「スーパージョット」よりも倒伏度と損傷率が低い傾向にあり、機械収穫に適する品種であることが示唆された。また、株間は 30cm よりも 20cm にすることで面積当たりの収量が多く得られたため、株間 20cm の方が適すると考えられた。 マルチシーダー直装の乗用耕うん機と、枝豆収穫機を導入した矮性サヤインゲン栽培の機械化体系における年間労働時間は 384 時間、収益は -38.8 万円/10a であり、収益性を改善するには使用機械の利用形態の検討が必要であると考えられた。 加工用ブロッコリーでは、側枝が少なく花蕾重が重い傾向がある「SK9-099」を用いて株間 28cm 程度の密植とすることで、花蕾重をより多く確保し収量を多く得られると考えられた。	

E 1 - 3 会津地域に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立

試験課題名：会津地域における野菜オタネニンジンとしての生産技術の開発		E1-3-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：会津地域研究所		
概要	連続採種条件での地下部生育は、追肥区が他に比べ全根長が長く、根径が大きく、根重が重い傾向であった。また、全処理区において日本薬局方の含量規格に適合したギンセノシド含量を示した。	
試験課題名：会津地域における秋ソバ「会津のかおり」の追肥の効果と作期分散		E1-3-3
予算区分：一般財源 開始年度：2023 終了年度：2025 担当科所：会津地域研究所		
概要	秋ソバ「会津のかおり」の収量は、適期播種(8月3日)が最も多く、早播(7月18日)、晩播(8月24日)では劣った。晩播における着蕾期の追肥の効果は、判然としなかった。	

E 1 - 4 浜通り地方に適した作物、園芸品目等の生産技術の確立

試験課題名：浜通りにおける大規模水田利用支援技術の開発		E1-4-1
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域研究所		
概要	ダイズの生育量確保による収量増加を目指し、早播における播種時期、播種量、開花期以降の追肥を検討した結果、極早播(5月上旬播種)と早播(5月下旬播種)では、標播(6月上旬播種)と比べ生育量は優ったが、障害粒の発生が多く、収量は劣った。また、開花期以降の追肥による増収効果は見られなかった。 浜通りにおける小麦品種「さとのそら」の高品質・安定生産を実現するための栽培法を確立するため、施肥体系及び収穫適期の簡易指標の作成について検討した結果、施肥体系については、窒素施用を追肥重点的な施肥体系とすることで、収量が高まる傾向が認められた【参考成果 17】。また、収穫適期は出穂後の積算気温や穂の外観から判別可能であることを確認した。 全国的に発生が問題となっている除草剤抵抗性ノビエの検定法の確立を目指し、抵抗性系統と感受性系統の除草剤反応の差が明瞭化する条件の検討を行った結果、MS 培地(1倍)とビトロキシロキサール・メタキシルM液剤(1/2000倍)混用条件下では、抵抗性系統、感受性系統の除草剤反応の差が明瞭となり、結果も安定したことから本条件が抵抗性検定条件として適当だと判断した。また、シハロホップブチルは薬量0.3~2.7 ppmで、ペノキススラムは薬量0.0045~0.019 ppmで抵抗性系統と感受性系統間の草丈の差が1cm以上となり、達観で容易に感受性の有無の判別が可能であった。	
試験課題名：浜通りの気候を活かした野菜・花き等の生産振興支援技術の確立		E1-4-2
予算区分：科研費、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：浜地域研究所		
概要	カンパニュラの抽苔摘心では、仕立て本数が増えるほど、切り花品質は低下する傾向にあったが、基部の曲がりはいささか小さい傾向であった。 ヤマユガの絹糸腺量は、家蚕と比べると少ないものの、ヤマユガ以外の野蚕と比べると高い傾向であった。ヤマユガ抜け殻繭現地調査では、南相馬市小高区、浪江町、田村市、葛尾村、大熊町、双葉町の12か所で確認することができた。	

E 1 - 5 果樹の安定生産技術の確立

試験課題名：革新的栽培技術体系による果樹の栽培管理技術の確立		E1-5-1
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	ニホンナシ「幸水」のジョイント樹形と新一文字型樹形は、慣行樹形と比較して、15 年生でも収量が多く確保された。果実品質は、樹形による差は見られないことが確認された。 ニホンナシ「あきづき」の新一文字型樹形は、慣行樹形に比較して 10a 当たり収量が早期から継続して高く推移することが確認された。 ブドウの盛土式根圏制御栽培における 10a 換算収量は、「クイーンニーナ」「シャインマスカット」とともに慣行栽培と比べて有意差は認められなかった。また、盛土を追加したことによる当年の効果は認められなかった。	

試験課題名：モモ「あかつき」の核障害軽減対策技術の確立		E1-5-2
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	モモ「あかつき」の収穫果における核割れ果発生率は、早期管理区（摘蕾・摘花で慣行区の半分まで花芽数を整理し、予備摘果は行わず、仕上げ摘果一発処理を実施）が慣行区と比較して少ない傾向にあったが、核頂部の亀裂が有意に多くなった。	
試験課題名：大規模経営に対応できるリンゴの省力・高品質生産技術体系の確立		E1-5-3
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所栽培科		
概要	リンゴ「ふじ」において、摘花剤、摘果剤散布により、摘果作業時間が慣行区より約 15%削減された。10a 換算収量は慣行区よりやや増加し、果実品質は、試験区、慣行区ともに差が見られないことが明らかになった。 定植1年目のリンゴ「ふじ」の新梢発生本数は HTS 台が最も多く、マルバカイドウ台と M.26 台は同等であった。新梢長については、HTS 台が最も長く、M.26 台が最も短かった。	

E 1 - 6 畜産の安定生産技術の確立

試験課題名：乳牛の安定生産技術の確立		E1-6-1
予算区分：外部資金（農林水産省：輸出促進のための新技術・新品種開発事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：畜産研究所酪農科		
概要	（国研）農研機構動物衛生研究部門で試作した黄色ブドウ球菌(SA)BM1006 株を抗原とし、ケモカインをアジュバントに用いた製剤を搾乳牛へ皮下投与し、粘膜免疫及び全身免疫の誘導を確認した。試作乳房炎ワクチンの投与区は 1 回接種区及び 2 回接種区の 2 区を設けたが、乳汁中 SA 特異的 IgA は各区とも皮下投与の翌週から上昇した。また、乳汁中 SA 特異的 IgG は、1 回接種区では皮下投与の 2 週間後、2 回接種区では 4 週間後をピークに上昇した。各区とも試作乳房炎ワクチン接種による栄養状態や乳質への影響は観察されなかった【 参考成果 40 】。	

試験課題名：肉用牛の安定生産技術の確立		E1-6-2
予算区分：寄附金（JA グループ福島寄附金）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所沼尻分場		
概要	発酵飼料を全期間給与した試験では、和牛の短期肥育において、醸造副産物を主原料とした発酵飼料を全期間給与したことにより、生後約 19 カ月齢までの飼料摂取量が増加し、牛群個体間のバラツキが小さくなった。また、本試験に供試した肥育牛の枝肉成績や食味性の低下は認めなかった。 肥育牛に発酵飼料を全期間給与し、強化区のみ発酵飼料を生後 9 カ月齢から 14 カ月齢まで増量した発酵飼料の強化試験では、生後 12 カ月齢までの発育に差を認めず、体重、体高、胸囲は両区ともに黒毛和種正常発育曲線（（公社）全国和牛登録協会）の発育上限付近で推移した。 発酵飼料と酒粕給与の試験では、酒粕区は令和 5 年 10 月 3 日（3.2 カ月齢）に、また、対照区は令和 6 年 1 月 11 日（3.9 カ月齢）に試験を開始した。両区とも、試験開始時から発酵飼料を給与し、供試牛は黒毛和種正常発育曲線（（公社）全国和牛登録協会）における正常発育の範囲で発育していることを確認した【参考成果 4 3】。	
試験課題名：豚の安定生産・高付加価値化技術の確立		E1-6-3
予算区分：繰入金（産業廃棄物税基金）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：畜産研究所肉畜科		
概要	群飼で酒粕ペレットを配合飼料の 30%代替給与したところ、発育、肉質及び枝肉成績に違いはなく、飼料費は去勢及び雌ともに低下した。また、嗜好型官能評価では、去勢が対照区で「全体的に好ましい」と評価された。 桃皮残さと白酒ヌカを混合することにより、約 4 日間の通風乾燥で水分含量を 10%台まで落とすことができた。一般成分、製造単価及び桃皮残さ利用量を考慮し、桃飼料の混合割合は原物重量比 2：1 が適正と考えられた。	

E 1 - 7 新たな技術・手法等の導入効果に関する経営的評価

試験課題名：GAP を活用した経営改善効果の検証		E1-7-1
予算区分：国庫（第三者認証 G A P 取得等促進事業） 開始年度：2022 終了年度：2024 担当科所：経営・農作業科		
概要	アンケート結果から、GAP 認証取得により農作業安全や従業員等の意思疎通についての意識向上や、認証取得後 1～3 年ごろから、コスト削減や販路拡大により経営改善効果が見られた。 農作業事故内容から、FGAP の労働安全に関わる管理点と照らし、管理点に沿った活動となっていないことが明らかとなり、事故発生の一因と考えられた【参考成果 4】。	

E 2 農産物の安定供給に寄与する鳥獣被害防止・病虫害防除等に係る研究開発

E 2 - 1 野生鳥獣被害対策技術の確立

試験課題名：ICT 機器等を利用した野生鳥獣被害対策技術の確立		E2-1-1
予算区分：繰入金（中山間ふるさと水と土保全基金） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：企画技術科		
概要	無料地図ソフトを利用して Web 上において、鳥獣被害対策関連情報を地図上に可視化して関係者間で共有する手法を 3 集落で実証し、通信型センサーカメラによる獣種判別時間の削減及びデータ回収等のための巡回回数削減について省力化を確認した。 鳥獣被害対策に ICT 機器導入支援マニュアルを作成した【普及成果 1】。	

E 2-2 農作業事故防止技術体系の確立

試験課題名：農作業事故による怪我のデータ収集とその体系化		E2-2-1
予算区分：国庫（地域農業担い手活性化支援事業） 開始年度：2021 終了年度：2023 担当科所：経営・農作業科		
概要	県内の負傷事故について、農業機械別等の発生状況を整理し、3件の聴き取り調査において発生要因を明らかにした。また、令和3年から5年に行った聴き取り調査12件の事故発生要因と対策をまとめた【参考成果5】。	

E 2-3 新奇病害虫・難防除病害虫防除技術の確立

試験課題名：新奇・難防除病害虫に対する防除技術の開発		E2-3-1
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：作物保護科		
概要	令和5年度の病害虫診断依頼件数は133件で、前年比201.5%であった。内訳は、作物22件(16.5%)、野菜62件(46.6%)、花き及び樹木類49件(36.8%)であった。診断・同定結果は、ウイルス・ウィロイド病が9件(6.8%)、細菌病が10件(7.5%)、糸状菌病が59件(44.4%)、虫害が9件(6.8%)、生理障害15件(11.3%)、薬害が3件(2.3%)、不明・正常が28件(21.0%)であった。 クモヘリカメムシは中通り北部で広く捕殺され、分布域が拡大していることが確認された。分布域拡大・定着には2月上旬の日最高気温の平均値が影響していると考えられた。 灰色かび病が問題となったトマトのほ場では、QoI剤及びSDHI剤に対して、耐性菌が確認された。 トルコギキョウ立枯病発生ほ場で、土壌還元消毒とてんろ石灰処理を実施したところ、前年40%の収穫率が80%まで回復することを確認した。 トルコギキョウ斑点病について、ユニフォーム粒剤及びオリゼメート粒剤の定植時土壌表面処理及びセルトレイ処理で本病に対する高い防除効果を確認した【参考成果6】。	

E 2-4 果樹の病害虫に対する防除技術の確立

試験課題名：果樹の重要な課題である病害虫に対する防除技術の確立		E2-4-1
予算区分：外部資金（安全な農畜水産物安定供給のための包括的レギュラトリーサイエンス研究推進委託事業）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	雨よけ処理を継続することで、モモせん孔細菌病を対象とした防除を削減できること、新規資材のモモせん孔細菌病に対する防除効果を明らかにした。また、酸化亜鉛水和剤を組み入れた防除体系のモモせん孔細菌病に対する効果を確認した。 フレールモアによる落葉処理では、乗用草刈機による粉碎処理と同等のナシ黒星病の防除効果が認められた【参考成果35】。 除草ロボットによる落葉粉碎処理効果や子のう胞子の飛散消長について明らかにした。	
試験課題名：果樹等の幼木期における生産安定技術の確立		E2-4-2
予算区分：外部資金（農林水産研究推進事業） 開始年度：2020 終了年度：2024 担当科所：環境・作物栄養科、果樹研究所病害虫科		
概要	急性枯死症発生ほ場に定植したモモの樹は、いずれの品種においても発病はせず、品種間差は判然としなかった。また、土壌中の病原細菌の動態を調査した結果、9～10月に増殖することが示唆された。 急性枯死症防止のための排水対策を実施した各園地について、土壌硬度はおおむね暗きよ設置区＜暗きよ未置区、気相率は暗きよ設置区＞暗きよ未設置区となった。土壌物理性、化学性と急性枯死少との関係は判然としなかった。	

試験課題名：果樹における農薬耐性、抵抗性を管理する技術確立		E2-4-4
予算区分：一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	ナミハダニで感受性が高く安定していたのは、ミルベメクチン、アセキノシル、ピフェナゼート、アシノナピルであった。カンザワハダニは感受性の低下はなく、リンゴハダニはシフルメトフェン、シエノピラフェンの感受性が低かった。	
試験課題名：果樹病害虫の防除法改善に関する試験		E2-4-5
予算区分：外部資金（オープンイノベーション研究・実用化推進事業）、一般財源 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	リンゴ褐斑病の子のう胞子の飛散盛期は、5月4～6半旬で、気温及び降水時間から推定される時期と一致した。 ブドウ晩腐病に対して、イブフルフェノキン水和剤を幼果期に用いた防除体系は、慣行防除体系よりも高い防除効果が得られることが明らかとなった【参考成果38】。 ブドウ晩腐病や黒とう病の伝染源となるブドウ巻きひげは、専用の除去器具を用いて効率的に除去出来ることが明らかとなった【参考成果39】。 ナシヒメシンクイの防除薬剤として、トラロメトリン水和剤の残効性が高かった。 新規抵抗性誘導剤は、モモせん孔細菌病に対して防除効果が認められた。	
試験課題名：相次いで進入した外来カミキリムシから日本の果樹と樹木を守る総合対策手法の確立		E2-4-7
予算区分：外部資金（イノベーション創出強化研究推進事業） 開始年度：2022 終了年度：2025 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	本県においてクビアカツヤカミキリの発生、被害は認められなかった。また、ツヤハダゴマダラカミキリ成虫のトチノキとリンゴ間の選好性を調査した結果、トチノキをより選好した。	
試験課題名：輸出検疫対象害虫に対する効果的な防除技術の開発		E2-4-8
予算区分：外部資金（植物検疫上の要求事項を満たすための体制の構築委託事業） 開始年度：2023 終了年度：2023 担当科所：果樹研究所病害虫科		
概要	モモに発生するシロカイガラムシ類の発生生態を把握し、ウメシロカイガラムシの第1世代幼虫の孵化時期にブプロフェジン水和剤、スピロテトラマト水和剤及びスルホキサフロル水和剤のいずれかにより防除を行うことで、クワシロカイガラムシを同時防除できることを明らかにした【参考成果34】。	

E 2 - 5 新農薬・新資材等の効率的利用法

試験課題名：安全で効率的な新農薬・新資材等の実用化		E2-5-1
予算区分：外部資金（新農薬等に関する試験研究事業） 開始年度：2021 終了年度：2025 担当科所：作物保護科、環境・作物栄養科、稲作科、畑作科、野菜科、果樹研究所栽培科、病害虫科、会津地域研究所、浜地域研究所		
概要	新農薬の実用化試験として、水稻、野菜及び果樹の殺菌剤及び殺虫剤 102 剤、水稻、畑作物及び果樹の除草剤及び植物成長調整剤等 12 剤の実用化試験を受託した。このほか、肥料・農薬等の効率的利用法として、水稻、野菜及び果樹の 34 試験を受託した。 夏秋キュウリの隔離床養液栽培において、夏越しが可能で、土耕栽培と同等の収量、品質を確保出来る栽培技術を明らかにした【普及成果 8】。 ナシのジョイント栽培において、毎年 9 月に基肥として肥効調節型肥料を窒素成分当たり慣行から 3 割削減した量を使用することで、慣行施肥と同等の生育と収量を確保できることが明らかとなった【普及成果 3】。 モモ栽培において、9 月下旬～10 月中下旬に肥効調節型肥料を 1 回施用する試験を実施した結果、慣行施肥並みの生育、収量が確保できた【参考成果 8】。 リンゴ褐斑病の二次感染期の防除薬剤としてピラジフルミド水和剤が有効であることを明らかにした【参考成果 3 7】。 4 月播種の乾田直播における基肥一発施肥体系では、LPS20H+LP70+LPS60H の組合せは収量面で優り、肥料配合割合として有望であると考えられた【参考成果 4 8】。	

4 試験設計・試験成績検討会の開催状況

(1) 一般課題

開催日	検討会名	会場
令和5年 6月30日	第1回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
8月25日	第2回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
12月13日	第3回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
令和6年 1月 5日	第1回果樹専門別検討会	果樹研究所、オンライン
1月 9日 ～10日	畜産専門別検討会	畜産研究所、オンライン
1月11日 ～12日	第4回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン
2月15日	第2回果樹専門別検討会	果樹研究所、オンライン
2月22日	第5回生産環境・作物園芸専門別検討会	本部、オンライン

(2) 放射性物質対策

開催日	検討会名	会場
令和6年 1月16日	令和5年度放射性物質試験研究課題に関する検討会	本部、オンライン

5 試験研究成果の公表

(1) 試験研究成果一覧

ア 普及に移しうる成果（生産者に活用され農業振興に寄与する研究成果、研究に利用できる新たな手法等の研究成果、行政施策の推進に活用できる研究成果）

（ア）令和4年度秋冬作

No.	成 果 名	担当部所
1	ブロッコリーに含まれるアミノ酸と局在	生産環境部
（イ）令和5年度		
No.	成 果 名	担当部所
1	「鳥獣被害対策に ICT 機器をどう使う？」導入支援マニュアルを作成しました	企画経営部
2	データベースを活用した経営シミュレーションツールを作成しました	
3	ナシジョイント栽培で肥効調節型肥料を利用することにより3割減肥できる	生産環境部
4	「天のつぶ」の高密度播種苗栽培では側条施肥や側条2段ペースト施肥によって初期分けつを促進できる	作物園芸部
5	「ひとめぼれ」における高温登熟条件下の出穂期追肥の効果と幼穂形成期生育量の目安	
6	福島県における雑草イネ総合防除技術	
7	中通りの春まきタマネギ直播栽培では「トタナ」を4月上旬に播種すると8月中旬に収穫できる	
8	夏越しが可能で20t/10aを確保できる施設キュウリの簡易な隔離床養液栽培	
9	キクの電照栽培に用いることができる電球形LEDランプ	
10	肥効調節型肥料を利用することで、リンドウの定植時に2年分の施肥を1度に行うことができる	
11	ナシ「王秋」のジョイントV字トレリス樹形による早期成園化	果樹研究所
12	水稻育苗ハウスを有効活用したブドウの盛土式根圏制御栽培	
13	カキの凍霜害危険度推定シートを作成しました	
14	モモ「あかつき」の硬核期・収穫期予測システムの改良	
15	多目的防災網の設置によってモモせん孔細菌病の発生を軽減できる	
16	「川俣シャモ」の産肉能力を維持する種鶏更新	畜産研究所
17	会津地域における果樹（リンゴ・カキ）の発育予測モデルの開発	会津地域研究所
18	夏秋キュウリ栽培の作業性を向上させる「つる下ろし」栽培	浜地域研究所

イ 参考となる成果(指導者の指導上の参考として適当と思われる情報)

(ア) 令和4年度秋冬作

No.	成 果 名	担当部所
1	中通りにおけるイチゴ「ゆうやけベリー」は電照無しでも収量を確保できる	作物園芸部
2	イチゴ「ゆうやけベリー」における基肥窒素量は13kg/10aで十分である	
3	イチゴ「ゆうやけベリー」は夜冷短日処理により収穫が早まる	
4	アスパラガス「ふくきたる」の萌芽特性	
5	イチゴ「ゆうやけベリー」の収穫時期別の果実成熟過程における品質	生産環境部
6	ブロッコリーに含まれるビタミンCの加熱前後の含有量変化	
7	発芽玄米麴は電子レンジ処理により麴菌の繁殖が改善される	
8	収穫後のエゴマ子実を紙袋で保管する際は袋内で結露しないように注意する	

(イ) 令和5年度

No.	成 果 名	担当部所
1	ハウス内環境を遠隔監視できる安価なシステムの導入事例	企画経営部
2	エゴマ大規模経営体における年間収益の試算	
3	水稻有機栽培の現地事例に基づく所得の試算	
4	農作業事故の発生現場ではGAPの労働安全に係る管理点の不適合が多い	
5	県内の農作業負傷事故の発生事例	
6	トルコギキョウ斑点病の粒剤による防除	生産環境部
7	ソバの収量改善にリン酸の供給は有効である	
8	モモの肥効調節型肥料による効率的施肥法	
9	ブドウのGABAは果肉内壁部から果実中心部に局在する	
10	「天のつぶ」の乾田直播栽培で収量650kg/10aを確保するための生育の目安	作物園芸部
11	出穂期後20日間の平均気温や品種と玄米品質の関係	
12	水位センサーを用いた自動灌水によって登熟期間中の飽水管理を省力化できる	
13	2023年の記録的な夏季高温による水稻への影響	
14	鉄コーティング直播の低コスト除草体系	
15	パン・中華麺用小麦品種「夏黄金」栽培における省力施肥体系	
16	パン・中華麺用の小麦品種「夏黄金」は晩播することにより収量が高まる	
17	日本めん用の小麦品種「さとのそら」は追肥重点体系で栽培することにより収量が高まる	

No.	成 果 名	担当部所
18	トマト品種「りんか409」のミスト噴霧を利用した高温対策	作物園芸部
19	キクの温湯浸漬処理後は水挿し状態でも暗黒処理ができる	
20	蕾切りでダリア切り花の輸出に係る輸送経費を削減できる	
21	モモジョイントV字トレリス樹形における10年生までの生産性	果樹研究所
22	近年の気候温暖化に伴うモモ「あかつき」の生育の前進	
23	「あかつき」とリレー販売できる大玉で食味良好な「モモ福島19号」を育成しました	
24	接種試験によるナシ黒星病耐病性個体の選抜	
25	「ナシ福島7号」の交配親和性	
26	2023年の高温条件下におけるリンゴ「ふじ」の着色と蜜入りの特徴	
27	2023年の高温条件でも果皮着色・蜜入りが優れるリンゴ「べにこはく」	
28	リンゴの育種年限を短縮できる生育促進技術	
29	アブシジン酸液剤の果房散布はブドウ「ピオーネ」の果皮着色の促進に有効である	
30	DNAマーカーによる紫黒色の果皮をもつブドウ交雑実生の幼苗選抜	
31	2022年に発生したカキ奇形果の特徴	
32	発育速度モデルによる果樹の発芽・開花予測技術の更新	
33	酸化亜鉛水和剤はモモせん孔細菌病の防除に有効である	
34	ウメシロカイガラムシを適期に防除することでクワシロカイガラムシを同時防除できる殺虫剤	
35	フレールモアによる落葉処理は乗用草刈機と同様にナシ黒星病の発病を抑制する	
36	ナシ黒星病に対する梅雨期以降の「豊水」果実の感受性	
37	リンゴ褐斑病の二次感染期に有効な防除薬剤	
38	イプフルフェノキン水和剤はブドウ晩腐病の防除に有効である	
39	ブドウ巻きひげの効率的な除去方法	
40	黄色ブドウ球菌に対する試作乳房炎ワクチンは乳汁にIgA・IgG抗体を誘導する	畜産研究所
41	福島県内繁殖雌牛のゲノミック評価状況(2023)	
42	水田輪作での子実用トウモロコシ栽培にはRM115の品種が利用できる	
43	短期肥育の発酵飼料給与が肥育中期までの飼料摂取量を増加させる	会津地域研究所
44	会津平坦部での水稻初冬直播き栽培技術	
45	酒造好適米「福乃香」の精米品質を考慮した生育の目安	

No.	成 果 名	担当部所
46	浜通りにおける「コシヒカリ」の乾田直播栽培	浜地域研究所
47	浜通りにおける「ふくひびき」の乾田直播栽培で 700kg/10a を確保するための生育の目安	
48	温暖化に対応した「天のつぶ」乾田直播栽培における肥効調節型肥料の最適な組合せ	

(ウ) 放射線関連支援技術情報（農業における放射性物質対策の推進となる情報）

No.	成 果 名	担当部所
1	農地土壌の非交換性カリ含量の簡易測定法	生産環境部
2	カリ資材を投入せずにダイズを連作した場合の子実への放射性セシウム移行の変化	作物園芸部
3	山羊乳及び山羊肉の移行係数は牛に比べて高い	畜産研究所
4	凝集促進処理した乳牛ふん由来堆肥と牛ふん堆肥の混用による放射性セシウム吸収抑制効果の検証	浜地域農業再生研究センター
5	放射性セシウム低減水稻品種・系統の特性	

エ 営農再開実証技術情報（避難地域等の営農再開の推進に活用できる情報）

(ア) 令和 4 年度秋冬作

No.	成 果 名	担当部所
1	クロレート S の冬期散布によって、散布 17 か月後の翌年初夏までスギナの発生を抑制できる（南相馬市）	浜地域農業再生研究センター

(イ) 令和 5 年度

No.	成 果 名	担当部所
1	メタン発酵消化液を化学肥料代替とした飼料用米の栽培実証(浪江町)	浜地域農業再生研究センター
2	マメ科緑肥ペルシアンクロローバによる雑草抑制と秋ソバに対する地力回復効果の実証(大熊町)	
3	水田畦畔の抑草効果が期待できるイブキジャコウソウの福島県浜通りにおける初期生育確保技術(大熊町)	
4	降水後の湛水が長期間続く農地でも、緑肥作物セスバニア栽培により有機物の供給が期待できる(双葉町)	
5	電気柵監視装置の導入によって電気柵の適正管理が図られる(南相馬市)	
6	リモコン草刈機の活用によって電気柵下除草の負担軽減に繋がる(南相馬市)	
7	ヘアリーベッチは出芽前に湛水または土壌水分が飽和状態になると出芽率が著しく低下する	
8	2023 年の気象条件では「山木屋在来ソバ」は 7 月下旬～8 月上旬の播種が適していた(川俣町)	
9	2023 年の気象条件では「会津のかおり」を 9 月中旬に播種することで 11 月上旬の収穫が可能であった(富岡町)	

No.	成 果 名	担当部所
10	排水不良ほ場ではソバ播種後に小畦立てを導入することによりソバの収量増加が期待できる(川内村)	浜地域農業再生 研究センター
11	浜通り中山間地域で小麦「夏黄金」は「ゆきちから」と同等に栽培できる(葛尾村)	
12	除染後農地でのエゴマ栽培は雑草害のリスクが高いため、移植栽培が望ましい(大熊町)	
13	福島県浜通りにおける夏播き緑肥作物による炭素、窒素投入量(南相馬市)	
14	阿武隈中山間地域でもピーマンのトンネル栽培は露地栽培よりも所得向上が期待できる(川内村)	
15	ユーカリ品種「ポリアンセモス」は檜葉町で発生している斑点性病害の被害が少ない(檜葉町)	
16	浜通り平坦部におけるトルコギキョウ加温促成栽培の土壌消毒対策の実証(浪江町)	
17	浜通り平坦部におけるトルコギキョウ季咲き栽培の土壌病害対策の実証(浪江町)	
18	抵抗性オヒシバ発生花木ほ場における雑草防除体系の実証(浪江町)	
19	特定復興再生拠点区域における牧草栽培ではカリ肥料を増施することが必須である(大熊町)	
20	除染後農地における土壌肥沃度のばらつきの現状	

(2) 東北農業研究成果情報(東北地域の試験研究機関における顕著な研究成果)

No.	成 果 名	区分	担当部所
1	ナシ栽培におけるハダニ類の密度を抑制するカブリダニ類に配慮した防除体系	成果	果樹研究所

(3) 「みどりの食料システム戦略」技術カタログ掲載

No.	成 果 名	担当部所
1	果樹の防霜対策を効果的に実施するための凍霜害危険度推定シート	果樹研究所

6 品種登録・職務発明

(1) 品種登録
なし

(2) 品種登録出願
なし

(3) 特許取得
なし

(4) 特許出願
なし

(5) 勤務発明届
なし

7 技術開発に伴う表彰・学位取得

(1) 表彰

ア 第21回日本作物学会論文賞[主催 日本作物学会]

鈴木健策、柏木純一、中島大賢、長菅輝義、望月俊宏、安彦友美、古畑昌巳、大平陽一、千葉雅大、木村利行、矢野真二、阿部光希、松田晃、齋藤寛、笹川正樹（農業総合センター）、高橋元紀、西村拓、濱本昌一郎、常田岳志、西政佳、由比進、下野裕之 ※斜字体は当機関外所属

「水稻の初冬直播き栽培における播種時期と種子コーティングが出芽率に及ぼす影響の広域評価」日本作物学会紀事、第91巻4号 p.291-301(2022)

イ 一般社団法人日本種苗協会設立50周年記念感謝状[主催 一般社団法人日本種苗協会] 農業総合センター

「全日本野菜・花き品種審査会 ユーストマ（季咲き）」

(2) 学位取得 該当なし

8 有識者懇談会の開催

技術開発、地域農業支援、先進的農業者の育成、食の安全の確保、県民との交流等の全国的な動向や、県内の農業者及び消費者のニーズを把握し、よりの確かつ効果的に業務推進を図ることを目的に、外部の有識者から意見を頂く「福島県農業総合センター有識者懇談会」を開催した。

(1) 有識者懇談会の開催

開催日	開催場所	テ ー マ
令和5年 9月6日	農業総合センター	1 農業総合センターの概要と令和4年度事業実績について 2 令和5年度の取組について 3 担い手育成の取組について

(2) 有識者委員（敬称略）

氏名	所属・役職名等
河野 恵信	福島大学農学群食農学類 教授
浦嶋 泰文	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター 農業放射線研究センター センター長
今泉 仁寿	福島県農業協同組合中央会 常務理事
木目澤 久實子	福島県指導農業士会 副会長
野崎 玲子	みやぎ生協コープふくしま 地域代表理事

9 技術・研究に関する職員研修

No	研 修 名	所属・職名	氏 名	研修主催機関	研修テーマ	研修期間
1	農林水産関係研究リーダー研修	畜産研究所 所長	山本みどり	農林水産省	研究リーダーとして必要な知見の習得及び能力の向上	6/29- 6/30
2	牛ゲノム選抜手法研修会	畜産研究所 研究員	谷内田 柊	(公社)畜産技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽出に必要な知識・技術の習得	7/11- 7/14 7/18- 7/21
3	研究職員派遣研修	作物園芸部 研究員	松崎 拓真	福島大学 農学群食農学類	イネ育種の基本から有用形質を制御するQTL等を解析する技術の習得	8月-12月 12日間
4	中央畜産技術研修会(畜産環境保全)	畜産研究所 研究員	菅野 那奈	農林水産省	堆肥化処理・利用技術の習得	9/4- 9/8

No	研 修 名	所属・職名	氏 名	研修主催機関	研修テーマ	研修期間
5	農林水産関係若手研究者研修	浜地域農業再生研究センター研究員 浜地域研究所副主任研究員	浅枝 諭史 古川 鞠子	農林水産省	知的財産、研究開発、研究倫理等に関する基礎知識の習得	9/28- 9/29
6	牛ゲノム選抜手法研修会	畜産研究所研究員	谷内田 柊	(公社)畜産技術協会	ゲノム解析、SNP情報抽出に必要な知識・技術の習得	10/ 3-10/ 6 10/10-10/13
7	研究職員派遣研修	作物園芸部研究員	鈴木 寛人	(国研)農研機構 農業環境研究部門	メッシュ農業気象データとその利用技術	10/23-11/ 2
8	研究職員派遣研修	果樹研究所副主任研究員	日下部翔平	(国研)農研機構植物防疫研究部門	モモの細菌性病害の研究に係わる技術の習得	10/30-12/ 1
9	病害虫防除所職員等中央研修	安全農業推進部副主査	石川万里那	農林水産省	発生予察事業等に関する基礎的知識及び技術の習得	12/19-12/22
10	国際競争力プロ技術研修会	畜産研究所主任研究員	矢内 伸佳	(国研)農研機構畜産研究部門	ゲノム育種価計算手法研修	1/25

10 試験研究推進会議の開催

現場と密着した実用性の高い技術開発と迅速な技術移転を図ることを目的に、センター本部、会津地域研究所、浜地域研究所、果樹研究所及び畜産研究所ごとに農業者(指導農業士等)、団体、市町村を構成員とした「試験研究推進会議」を下記のとおり会議を開催した。

開 催 日	部門・開催場所	出 席 者					内 容
		農業者	市町村	JA	県関係	関係機関	
令和5年 12月 6日～ 12月22日	本部(書面開催)	6	5	1	3	1	1 試験研究テーマ及び研究課題について 2 農業総合センターの令和4年度研究成果について
令和5年 6月14日	果樹	3	5	2	1	19	1 試験研究課題について 2 研究成果について 3 地域の課題と試験研究への要望について
令和5年 11月28日～ 12月20日	畜産(書面開催)	4	20	5	15	13	1 試験研究課題及び成果について
令和5年 12月 7日～ 12月23日	会津地域 (書面開催)	1	6	0	4	0	1 試験研究の取組について 2 研究成果について 3 地域の課題と試験研究への要望について
令和6年 1月23日～ 2月9日	浜地域(書面開催)	3	8	-	-	-	1 浜地域研究所における試験研究の取組について 2 地域の現状と研究に関する意見・要望について

※ 浜地域農業再生研究センター業務連携会議 令和6年3月(書面開催)

11 所内ゼミ

回	開催日	場 所	内 容	講 師	出席者
1	令和5年 4月14日	多目的ホール*	農業の安全、適正使用について 農産物安全確保について	安全農業推進部主幹兼副部長兼指導・有機認証課長 仁井 智己 企画経営部企画技術科副主任研究員 廣瀬 允康	160名
2	5月 8日 9日	多目的ホール*	日本学術振興会 e-ラーニング 集合視聴	センター職員	56名
3	5月23日	大会議室*	初任者研修	所長 和田山安信 安全農業推進部主幹兼副部長兼指導・有機認証課長 仁井 智己 企画経営部企画技術科長 木幡 栄子	23名

回	開催日	場 所	内 容	講 師	出席者
4	5月29日	大会議室	ハウス管理のポイントと注意点	作物園芸部副部長兼品種開発科長 大竹 祐一	28名
5	6月16日	大会議室*	統計研修（実験計画法、実験デザイン、データの見方）	畜産研究所主任研究員 矢内 伸佳	39名
6	6月26日	3階ゼミ室*	第66回東北農業試験研究発表会予演会	企画経営部企画技術科副主任研究員 廣瀬 允康 作物園芸部野菜科主任研究員 八木田靖司 浜地域農業再生研究センター研究員 佐藤 優平	22名
7	11月28日	多目的ホール*	「特定復興営農」1－1 報告会	浜地域農業再生研究センター研究員 浅枝 諭史 京都大学複合原子力科学研究所 助教 谷垣 実 高知工科大学環境理工学群 准教授 百田佐多生	60名
8	12月15日	1階会議室	IoT 関連でとりあえず今できること	事務部長 川上 幸洋	35名
9	令和6年 1月31日	果樹研究所 大会議室	IoT 関連でとりあえず今できること	事務部長 川上 幸洋	12名
10	2月27日	3階ゼミ室*	派遣研修報告会	作物園芸部品種開発科研究員 松崎 拓真 作物園芸部稲作科研究員 鈴木 寛人 果樹研究所病害虫科副主任研究員 日下部翔平	33名
11	3月14日	大会議室	設計、成績の基本のキ	生産環境部長 太田 弘志 生産環境部作物保護科研究員 前原 瞳 企画経営部企画技術科主任研究員 野田 智美	65名
12	3月26日	多目的ホール*	先輩を囲む集い （県職員、又は研究員としての経験から得た教訓等）	所長 和田山安信 生産環境部長 太田 弘志	101 名

*はオンライン同時開催

1 2 初任者研修・新規採用職員研修

回	開催日	開催場所	内 容	講 師
1	令和5年 5月23日	大会議室*	センター職員としての心構え、農産物の安全管理、試験研究の進め方、研究活動に関する諸規程	センター職員
2	令和6年 3月19日	多目的ホール*	OJTの実績報告及び自己評価を題材としたプレゼンテーション実践	—

*はオンライン同時開催

1 3 その他研修

回	開催日	開催場所	内 容	講 師
1	令和5年 7月14日	3階ゼミ室*	農林水産試験研究に係る計画や制度 わかりやすい発表資料の作成方法他	農業振興課 主任主査 齋藤 隆 主査 佐久間祐樹
2	10月16日	畜産研究所 会議室	仕事の進め方・文書作成のポイント	畜産研究所副所長 松澤 保
3	11月15日	大会議室*	統計基礎研修	東北大学大学院農学研究科 特任教授(客員) 池田 郁男

*はオンライン同時開催

Ⅲ 地域農業支援

1 技術移転・技術支援

(1) 技術移転セミナー

地域ごとにセミナーを開催し、普及に移しうる成果、参考となる成果、営農再開実証技術情報等の農業総合センターの試験研究成果の現地への円滑な技術移転を図るとともに、意見交換を行った。

回	月日	場所	テーマ等	内 容 、 講 師	出席者数
1	8/ 7	郡山市 (農業総合センター)	トルコギキョウ ほ場見学会	○全日本花卉品種審査会「トルコギキョウ(季咲き)」の結果について 作物園芸部花き科 研究員 熊坂京 ○ほ場見学	17名
2	8/ 8	福島市 (果樹研究所)	ナシ栽培における 黒星病の秋期防除 と土着天敵を活用 したハダニ類防除	○ナシ黒星病の秋期防除対策について 果樹研究所 病害虫科 研究員 小松健太郎 ○ナシ栽培における土着天敵を活用したハダニ類 防除について 果樹研究所病害虫科 主任研究員 中村傑 ○ナシにおける病害虫発生状況について 病害虫防除所 主査 藤田剛輝	36名
3	9/ 1	郡山市 (農業総合センター)	雑草イネについて ～発生と防除法～	○雑草イネについて～発生と防除法～ 作物園芸部稲作科 主任研究員 渡邊洋一	39名
4	9/ 1	郡山市 (農業総合センター)	トマトかいよう病 防除法	○トマトかいよう病防除法 生産環境部作物保護科 主任研究員 穴戸邦明	8名
5	9/ 8	福島市 (果樹研究所)	リンゴ・ナシ・モモ ・ブドウにおける 最新の栽培技術と 品種紹介、病害虫防 除について	○リンゴ・オリジナル品種「べにこはく」栽培のポ イント 果樹研究所栽培科 科長 岡田初彦 ○ナシの新しい栽培法～J V樹形栽培～ 果樹研究所栽培科 研究員 佐藤寛人 ○ナシ黒星病は秋期防除が重要 果樹研究所病害虫科 研究員 小松健太郎 ○ナシのハダニ類対策は土着天敵を活用 果樹研究所病害虫科 主任研究員 中村傑 ○モモ・オリジナル品種「はつひめ」栽培のポイント 果樹研究所栽培科 副主任研究員 高橋堯之 ○モモせん孔細菌病対策の最新知見 果樹研究所病害虫科 副主任研究員 日下部翔平 ○この虫に注意！侵入を警戒する外来カミキリムシ 果樹研究所病害虫科 研究員 高橋佳大 ○ブドウの新しい栽培法～盛土式根圏制御栽培～ 果樹研究所栽培科 主任研究員 尾形亜希子	76名
6	10/12	川内村 (コミュニティ センター)	川内村におけるピー マンのトンネル 栽培の現地検討会	○川内村におけるピーマンのトンネル栽培の実証 研究について 浜地域農業再生研究センター 研究員 小椋智文 ○ピーマンの出荷・販売実績について 福島さくら農業協同組合 ふたば統括センター 営農課 課長補佐 山田昌弘	27名
7	R6 2/21	富岡町 (富岡町文化交 流センター「学 びの森」)	土壌肥沃度ばらつ き改善システム の実演会	○「見える化」技術を活用した土壌肥沃度のばらつ き改善技術について 浜地域農業再生研究センター 技術研究科長 平山孝 ○土壌肥沃度改善システムの実演 先端プロ「土壌肥沃度改善」コンソーシアム	46名
8	3/ 8	郡山市 (農業総合センター)	肉用牛のAI超音波 肉質診断	○AI超音波肉質診断の活用について 畜産研究所肉畜科 研究員 堀切眞太郎	29名

注) *はオンライン参加者含む。

(2) 成果発表会

令和5年度に当センターの試験研究で得られた各分野の最新研究成果を中心に、会場及びオンラインにより研究成果発表会を開催し、広く情報の共有を図った。

回	月日	場所	テーマ等	内 容	出席者数
1	2/28	郡山市 (農業総合センター)	令和5年度研究成果 発表 (畜産)	○畜産に関する成果 ○話題提供	52名 (21)
2	3/ 1	郡山市 (農業総合センター)	令和5年度研究成果 発表 (本部)	○稲作・野菜・花きに関する成果 ○作物共通に関する成果	104名 (32)
3	3/ 6	福島市 (JA福島ビル)	令和5年度研究成果 発表 (果樹)	○ニホンナシ・モモ・リンゴ・ブドウに関する成果 ○晩霜害対策 ○高温対策	132名 (28)
4	3/12	大熊町 (Linkる大熊)	令和5年度研究成果 発表 (浜)	○浜地域の農業、営農再開に関する成果 ○農林水産分野の先端技術展開事業の取組	61名 (29)
5	3/13	会津坂下町 (会津地域研究所)	令和5年度研究成果 発表 (会津)	○会津地域の稲作・果樹に関する成果 ○鳥獣害対策に関する成果	45名 (23)

注) Zoom によるオンライン開催併用であり、出席者数の()はオンライン参加者数

(3) 技術支援(鳥獣害防止対策)

内 容	支援地方、実施月日	担当者
県段階活動支援 (県段階連携活動、各種研修支援等)	県全域 15回 令和5年 4/21、7/5、7/14、8/25、10/13、10/16、 10/30、11/6、11/10、11/24、11/28、12/26 令和6年 2/9、2/13、2/29	企画技術科 副主任研究員 廣瀬允康
	全5回 会津 6/27、2/19 会津坂下 7/26、2/19 南会津 2/2	
地方会議活動支援 (地方会議、モデル集落・ 重点支援集落活動等)		
その他	農業法人、企業、個人等	6回
	試験研究機関野生鳥獣関係情報交換会	4回

2 指導・啓発活動

研修会の講師、及び資料の作成・配付により技術の普及を図った。

(1) 研修会

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
1	企画経営部 作物園芸部 安全農業推進部 有機農業推進室	本馬昌直 五十嵐裕二 大竹祐一 新妻和敏 小林恭子 仁井智己 岡崎徹哉	JICA 研修員研修 農業総合センターの概要 福島県の稲作の概要 品種の育成、種子生産、先進技術開発 福島県の有機農業の概要 試験研究と普及現場の連携	7/26	JICA
2	安全農業推進部 生産環境部 作物園芸部 果樹研究所	仁井智己 伊藤博樹 遠藤美咲 山田真孝 新妻和敏 中村 淳	福島県農業管理指導士認定研修	11/20 - 11/21	福島県
3	安全農業推進部 生産環境部 作物園芸部 果樹研究所	遠藤美咲 山田真孝 新妻和敏 中村 淳	福島県農業適正使用アドバイザー認定研修	11/20 11/30	福島県
4	安全農業推進部	藤田剛輝	令和5年度日本ナシ黒星病対策研修会	11/15	県南農林事務所
5		石川万里那	JA ふくしま未来花卉部会栽培出荷反省会 (コギクに寄生するアザミウマ類調査)	11/22	JA ふくしま未来花卉部会
6		青木大祐	令和5年度 JA 東西しらかわ園芸振興大会 (野菜病虫害の発生状況と対策について)	2/ 7	JA 東西しらかわ
7		金澤優紀	住友化学農業セミナー(水稻における主要な病虫害の発生状況と防除対策について)	3/12	住友化学株式会社
8	企画経営部	作田善紀	江別市農業委員協議会視察研修(スマート農業に関する研究成果)	6/ 5	江別市農業委員会
9		廣瀬允康	専門技術向上研修(GAP 推進・鳥獣被害対策)	6/ 9	農業振興課
10		作田善紀 宮川貴光	令和5年度就農研修(中級)	7/14	農業短期大学校
11		作田善紀	視察研修(スマート農業に関する研究成果)	7/21	福島県立安積高等学校
12		廣瀬允康	令和5年度両沼地域鳥獣被害対策担当者 連携会議	7/25	会津坂下普及所
13		廣瀬允康	令和5年度就農研修(中級)	8/25	農業短期大学校
14		宮川貴光	視察研修(福島県農業総合センターにおけるスマート農業の取組)	11/ 7	福島明成高校 PTA 会
15		朽木靖之	視察研修(転換畑の排水対策技術)	11/10	茨城県境管内土地改良区
16		廣瀬允康	県中管内多面的機能支払交付金研修会	11/24	県中農林事務所
17		作田善紀	令和5年度野菜技術情報会議(第3回) (プロックリー選別自動収穫機の開発)	12/ 6	農業振興課
18		廣瀬允康	令和5年度両沼地域鳥獣被害対策担当者 連携会議	2/19	会津坂下普及所
19		松崎 俊	視察研修(GAP 導入による意識変化と経営改善効果の分析)	2/26	下郷町認定農業者連絡協議会

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
20	生産環境部	木村真澄	「ゆうやけベリー」栽培検討会 ※品種開発科、野菜科とともに対応。	5/22 8/21 11/24 3/ 6	園芸課
21		堀越紀夫	第2回花き技術情報会議(トルコギキョウ土壌病害対策について)	6/13	農業振興課
22		堀越紀夫	第1回ひとつ、ひとつ、実現する郡山農業塾(病虫害防除編)	6/26	県中農林事務所
23		前原 瞳	令和5年度農作物技術講習会	7/ 5	福島県農業共済組合
24		穴戸邦明	営農指導員養成技術研修講座	7/20	JA 全農福島
25		中村孝志	令和5年度技術交流まつり	10/11	福島県県産品加工支援センター他
26	作物園芸部	新妻和敏	専門技術向上研修(作物)	5/17	農業振興課
27		三田村春香 成田元樹	いちご「ゆうやけベリー」栽培検討会	5/22	園芸課
28		渡邊洋一	水稻種子場生産者研修会	5/26	福島県米改良協会
29		新妻和敏	専門技術向上研修(作物)	7/ 6	農業振興課
30		鈴木寛人	「福、笑い」現地検討会	7/10	水田畑作課
31		鈴木寛人	水稻生育管理等指導講習会	7/11	全国肥料商連合会福島県部会
32		星 輝幸	第2回営農指導員養成技術研修講座	7/20	JA 全農福島
33		渡邊洋一	JA 仙台視察研修	7/26	JA 仙台中央営農センター
34		菅田 充 大寺真史	専門技術向上研修(作物)	7/27	農業振興課
35		鈴木保奈美	リンドウ栽培講習会	11/28	JA 会津よつば
36		渡邊洋一	JA 仙台視察研修	12/ 7	JA 仙台中央営農センター
37		渡邊洋一	水稻採種技術研修会	2/ 8	福島県米改良協会
38		大寺真史	大豆・子実用とうもろこし生産振興セミナー	2/13	水田畑作課
39		渡邊洋一 鈴木寛人	下郷町認定農業者研修会	2/26	下郷町認定農業者連絡協議会
40		大寺真史	南会津地方そば栽培講習会	3/ 6	南会津農林事務所
41		三田村春香 成田元樹	第4回いちご「ゆうやけベリー」栽培検討会	3/ 6	園芸課
42		鈴木寛人	喜多方市認定農業者研修会	3/ 6	喜多方市認定農業者協議会山都支部

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
43	作物園芸部	鈴木寛人	「福、笑い」研究会説明会	3/14	水田畑作課
44	果樹研究所	日下部翔平	営農指導員養成技術研修講座	5/18	JA 全農福島
45		佐久間宣昭 中村 傑 高橋佳大	福島大学農学群食農学類学生実習	6/ 6 6/13 6/20 6/27	福島大学農学群食農学類
46		中村 傑	応用昆虫学	6/19	福島大学
47		中村 傑 日下部翔平	専門技術向上研修(果樹病虫害)	7/10	農業振興課
48		岡田初彦 中村 淳	果樹共済損害評価技術研修会	7/20	福島県農業共済組合
49		高橋堯之 佐久間宣昭	富女子会勉強会	10/30	富女子会
50		小松健太郎	令和 5 年度日本ナシ黒星病対策研修会	11/15	JA 夢みなみ 白河果樹部会 県南農林事務所
51		岡田 初彦 尾形亜希子 中村 傑	令和 5 年度スマート農業社会実装推進事業実証ほ(ぶどう)現地検討会	11/28	相双農林事務所双葉農業普及所
52		日下部翔平	南東北地区兼商会技術部会果樹分科会現地研修会	12/ 8	アグロカネショウ株式会社
53		岡田初彦 阿部初紀	J.V.C. 令和 5 年度冬期研修会	12/11	J.V.C.(ジャパン・ヴィティカルチャー・クラブ)
54		中村 傑	うもれぎの会防除検討会	12/11	県北農林事務所
55		中村 傑	令和 5 年度飯坂東地区おうとう栽培販売反省会	12/17	JA ふくしま未来おうとう専門部会湯野班
56		中村 淳	農薬講習会	12/22	福島県農薬商業組合
57		尾形亜希子 高橋堯之 穴澤拓哉 佐藤寛人	園友会冬季研修会	1/12	園友会
58		志村浩雄 岡田初彦 佐藤寛人	令和 5 年度スマート農業社会実装推進事業実証ほ(なし)現地検討会	1/19	相双農林事務所農業振興普及部
59		志村浩雄 岡田初彦 穴澤 拓哉	リンゴ剪定講習会	1/22	福島市園芸農産振興会
60		高橋佳大 中村 淳	令和 6 年度版果樹栽培防除暦説明会	2/ 5	JA 夢みなみ白河果樹部会
61		尾形亜希子 佐藤寛人 佐久間宣昭 高橋佳大 志村浩雄 中村 淳	果樹経営者研修会経営発展研修会	2/13	果樹経営者研究会
62		岡田初彦 中村 淳	令和 5 年度果樹(モモ・ナシ・リンゴ)セミナー	2/26	JA 全農福島

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
63	果樹研究所	岡田初彦 日下部翔平	果樹基礎技術研修会	3/ 1	福島県農業共済組合
64		中村 傑	病害虫に関する講習会	3/ 7	野田果樹共同防除組合
65		尾形亜希子	ぶどう根圏制御栽培意見交換会	3/26	JA ふくしま未来
66	畜産研究所	萩原 瞳	専門技術向上研修(牧草生産管理)	5/18	農業振興課
67		遠藤幸洋 齋藤美緒	専門技術向上研修(放牧及び草地管理)	6/29	農業振興課
68		鈴木浩之 松崎稔史 吉田朋恵	専門技術向上研修(酪農)	7/13 7/14	農業振興課
69		萩原 瞳	専門技術向上研修(トウモロコシ)	8/ 3	農業振興課
70		原 恵 小松一樹	専門技術向上研修(肉用牛)	9/15	農業振興課
71		佐藤妙子 尾形賢治	専門技術向上研修(養鶏、養豚)	10/12	農業振興課
72		堀切真太郎 猪腰雄也	セリ前ワンポイント講座「福島県基幹種雄牛」	12/ 5 - 6	JA 全農福島
73		遠藤幸洋	JA グループ福島和牛繁殖農家全体研修会 「腹づくりを重視した飼養管理について」	1/31	JA グループ和牛繁殖 飼育者協議会 他
74		矢内伸佳	ゲノミック評価について	2/21	JA 東西しらかわ
75		齋藤美緒	セリ前ワンポイント講座「繁殖管理と子 牛の育成管理のポイント」	3/ 5 - 6	JA 全農福島
76		原 恵	県基幹種雄牛「隆福久」について	3/11	福島県家畜人工授精協会
77		矢内伸佳 原 恵	福島県におけるゲノミック評価について 県基幹種雄牛「隆福久」について	3/19	うつくしま福島畜産 mother's クラブ e-EN
78		堀切真太郎	超音波技術研修会(延べ10回) 枝肉調査研修会(延べ10回) 枝肉撮影研修会(1回)	6/15 - 12/ 1	畜産課
79	会津地域研究所	芳賀紀之	第1回おたねにんじん栽培研修会	6/13	会津農林事務所
80		小森秀雄	水稻の生育状況と今後の肥培管理	7/ 5	全肥商連福島県部会 会津支部会
81		芳賀紀之	第2回おたねにんじん栽培研修会	8/ 1	会津農林事務所
82		小森秀雄	水稻の生育状況と今後の肥培管理	8/ 4	JA 会津よつば西部稲作 部会
83		芳賀紀之	おたねにんじん催芽処理研修会	8/ 8	磐梯町薬草栽培研究会
84		芳賀紀之	第3回おたねにんじん栽培研修会	10/24	会津農林事務所
85		小森秀雄	2023 年の水稻生育品質と今後の対策	1/18	JA 会津よつば
86		中村陽登	第4回おたねにんじん栽培研修会	2/28	会津農林事務所

No	所属	担当者	内 容	月日	主 催 者
87	浜地域研究所	佐藤弘一	水稻生育管理等現地指導講習会	7/10	全肥肥料商連合会福島県部会
88	浜地域農業再生研究センター	小椋智文	たまねぎ出荷反省会	8/25	JA ふくしま未来

(2) 技術指導資料

No	所 属	掲 載 資 料 名	発行年	発 行
1	園芸課 生産環境部 作物園芸部	「ゆうやけベリー」栽培の手引き(改訂版)	5.9	園芸課
2	有機農業推進室 企画経営部	水稻有機栽培におけるスマート農業技術 (令和5年度農業教育高度化事業)	6.1	農業総合センター
3	作物園芸部 企画経営部	タマネギ直播栽培技術 (令和5年度農業教育高度化事業)	6.1	農業総合センター
4	果樹研究所 企画経営部	ナシ栽培のスマート化に向けたジョイントV 字樹形(令和5年度農業教育高度化事業)	6.1	農業総合センター
5	企画経営部	「鳥獣被害対策に ICT 機器をどう使う？」導 入支援マニュアル	6.3	農業総合センター
6	作物園芸部	福島県における雑草イネ総合防除マニュアル	6.3	農業総合センター
7	作物園芸部 会津地域研究所	福島県育成カラー品種球根養成のための技術 資料	6.3	園芸課
8	果樹研究所	水稻育苗ハウスを利用したブドウの盛土式根 圏制御栽培導入マニュアル	6.3	農業総合センター果樹研究所
9	果樹研究所	ナシのジョイントV字トレリス樹形による早 期成園化技術導入マニュアル	6.3	農業総合センター果樹研究所
10	会津地域研究所	イネ初冬直播き技術マニュアル(Ver.1.1)	6.3	岩手大学

(3) 技術相談対応件数

部 所		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
安全農業推進部	指導・有機認証課	7	7	9	18	8	20	19	16	14	23	23	21	185
	発生予察課	0	2	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	6
	分析課	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	部合計	7	9	9	21	8	20	19	17	14	23	23	21	191
有機農業推進室		2	4	7	5	6	3	3	4	2	1	2	0	39
企画経営部	企画技術科	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	3
	経営・農作業科	0	2	0	1	0	0	0	1	1	0	0	1	6
	部合計	0	3	0	1	0	0	1	1	1	0	1	1	9
生産環境部	作物保護科	15	23	16	17	26	12	8	7	1	2	3	3	133
	環境・作物栄養科	0	0	1	1	2	2	1	1	1	1	0	0	10
	流通加工科	0	0	0	2	1	3	2	1	0	0	0	0	9
	部合計	15	23	17	20	29	17	11	9	2	3	3	3	152
作物園芸部	品種開発科	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	稲作科	6	5	10	6	2	2	5	0	1	0	2	0	39
	畑作科	2	1	2	2	0	2	1	2	1	0	1	0	14
	野菜科	1	0	5	0	1	0	0	2	1	0	2	1	13
	花き科	1	1	1	1	0	0	0	2	0	3	0	1	10
	部合計	10	8	18	9	3	4	6	6	3	3	5	2	77
本 部 合 計		34	47	51	56	46	44	40	37	22	30	34	27	468
果樹研究所		12	16	20	21	19	14	18	13	7	12	15	8	175
畜産研究所		1	5	4	1	2	2	2	3	4	2	2	2	30
会津地域研究所		4	1	0	0	1	2	0	1	1	0	0	0	10
浜地域研究所		1	1	2	5	4	1	1	3	0	1	2	0	21
浜地域農業再生研究センター		16	12	12	13	7	5	3	3	1	3	5	2	82
農業総合センター合計		68	82	89	96	79	68	64	60	35	48	58	39	786

3 主要農作物種子生産実績

福島県主要農作物種子生産取扱基本要綱に基づき、原原種・原種ほを設置し、優良種子を生産することにより本県主要農作物の生産性と品質向上を図った。

(1) 担当者

所 属	職	氏 名	担当作物
事務局農場管理課	課 長	笹川 正樹	－
作物園芸部	部 長	五十嵐 裕二	－
稲作科	科 長	新妻 和敏	水稻
	主任研究員	渡邊 洋一	水稻
畑作科	科 長	五十嵐 秀樹	小麦、大豆
	主任研究員	菅田 充	小麦、大豆
会津地域研究所	所 長	吉田 直史	－
	専門研究員	松木 伸浩	水稻、小麦
	主任研究員	芳賀 紀之	水稻、小麦
	主任研究員	浜名 健雄	水稻
	主任研究員	真部 武	小麦
浜地域研究所	専門研究員	佐藤 弘一	水稻

(2) 原原種・原種ほ設置面積

項目	水 稻(a)	小 麦(a)	大 麦(a)	大 豆(a)
原原種 直 営	24.0	5	0	16.0
原 種 直 営	513.5	31	0	95.0
委 託	0	0	0	0.0
合 計	537.5	36	0	111.0

(3) 生産状況

ア 水稻

区分	品 種	生 産 地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	コシヒカリ	会津地域研究所	20.0	468
	こがねもち	本 部	4.0	80
	小 計		24.0	548
原 種 直営	コシヒカリ	会津地域研究所	220.0	9,074
	ひとめぼれ	会津地域研究所	70.0	3,150
	天のつぶ	会津地域研究所	90.0	4,408
	里山のつぶ	本 部	35.8	1,140
	夢の香	本 部	7.0	180
	こがねもち	本 部	24.0	660
	ふくひびき	本 部	19.8	600
	ふくひびき	浜地域研究所	14.0	810
	まいひめ	本 部	6.4	120
	小 計		487.0	20,142
合 計			511.0	20,690

イ 小麦

区分	品 種	生 産 地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	ゆきちから	会津地域研究所	5	17
	小 計		5	17
原 種 直営	きぬあずま	本 部	8	240
	ゆきちから	本 部	8	278
	ゆきちから	会津地域研究所	15	120
	小 計		31	638
合 計			36	655

ウ 大豆

区分	品 種	生 産 地	面積(a)	生産量(kg)
原原種 直営	あやこがね	本 部	8	12
	里のほほえみ	本 部	8	20
	小 計		16	32
原 種 直営	タチナガハ	本 部	15	50
	あやこがね	本 部	40	349
	里のほほえみ	本 部	40	144
	小 計		95	543
合 計			111	575

※大豆原種の生産数量は、良品及び二番口の数量の合計値である。

4 オリジナル品種（園芸作物等）種苗生産実績

福島県育成品種（園芸作物等）種苗生産取扱基本要綱に基づき、普及すべき園芸作物等の優良な品種について品質の高い種苗を安定的に供給することを目的として、種苗生産及び販売を行った。

(1) 担当者

所 属	職	氏 名	担当作物
作物園芸部	部 長	五十嵐 裕二	－
作物園芸部	副部長兼品種開発科長	大竹 祐一	－
野菜科	科 長	星 輝幸	アスパラガス
	専門員	大越 聡	アスパラガス
花き科	科 長	福田 秀之	リンドウ
	研究員	星 太介	リンドウ
会津地域研究所	所長	吉田 直史	－
	主任研究員	芳賀 紀之	オタネニンジン
	研究員	中村 陽登	オタネニンジン

(2) 生産量及び販売量

ア アスパラガス種子

品種名	生産量(粒)	販売量(粒)	備考
ふくきたる	142,208	44,400	令和4年産及び令和5年産種子を販売
はるむらさきエフ	6,342	4,600	平成20年産種子を販売

イ リンドウ苗（令和5年5月販売）

品種名	販売予定数(本)	備考
ふくしましおん	1,800	128穴セルトレイ15枚
ふくしまみやび	480	128穴セルトレイ4枚

令和5年2月播種

ウ オタネニンジン種子

品種名	生産量(粒)	備考
かいしゅうさん	31,409	

5 オリジナル品種の親株等の供給実績

オリジナル品種について、種苗増殖するための親株等を育成し、許諾先に供給した。

作 物	品種名	規格	供給数量	供 給 先	生 産 地
イチゴ	ふくはる香	原種苗	150 株	福島さくら農業協同組合	本部
	ふくあや香		15 株		
	ふくはる香	原種苗	72 株		
カラー	はにかみ	培養苗	100個体	株式会社ベルディ	本部
モモ	はつひめ	穂木	3 kg	有限会社伊達農園	果樹研究所
リンゴ	べにこはく	穂木	3 kg		
ブドウ	あづましずく	穂木	10 kg	有限会社芦沢農園	
	ふくしずく	穂木	3 kg		
	あづましずく	穂木	12 kg	有限会社菊池園芸	
	あづましずく	穂木	6 kg	株式会社福島天香園	
	ふくしずく	穂木	1 kg		
	あづましずく	穂木	22 kg	株式会社カワイぶどう園	
ソバ	会津のかおり	原原種	200 kg	会津のかおり種子協議会	会津地域研究所

6 家畜管理及び生産実績

(1) 畜産研究所本所

ア 家畜繁養実績

(ア) 種雄畜

(頭)

畜種及び品種	年度初頭数	受 入		払 出	年度末頭数
		購 入	組 替	廃用その他	
牛 黒 毛 和 種	16	-	4	3	17
豚 ランドレース種	5	-	0	1	4
デュロック種	13	-	3	2	14
大ヨークシャー種	1	-	-	1	0

(イ) 基幹種雄牛（黒毛和種）

名 号	生年月日	産 地	血 統		推定育種価(R5.9評価)		
	登録番号		父	母の父	枝肉重量 (kg)	ロース芯面積 (cm ²)	脂肪交雑 (基準値)
たかふくひき 隆福久	H30. 6.29 黒原6332	石川郡 平田村	隆之国	安福久	37.277	22.645	2.997
かつただやすふく 勝忠安福	H24. 6.28 黒原5825	石川郡 古殿町	勝忠平	安福久	68.118	9.080	2.497
ふくひらはる 福平晴	H23. 6. 3 黒原5637	耶麻郡 猪苗代町	平茂晴	平茂勝	59.468	9.750	2.704
たくみ 多久実	H22.10. 1 黒原5638	石川郡 玉川村	安福久	安平	16.444	17.144	2.824
かつひらやす 勝平安	H20.12.25 黒原5373	田村市	北平安	平茂勝	47.276	17.816	2.501
さくらさくひかり 桜 咲 光	H20. 8. 7 黒原5302	耶麻郡 猪苗代町	第1勝光	福桜(宮崎)	45.528	11.321	2.021
たかゆり 高百合	H20. 8.21 黒原5303	双葉郡 川内村	百合茂	安福栄	78.721	11.614	1.765
ふくかげさくら 福景 桜	H17.11.22 黒原4949	耶麻郡 猪苗代町	景 東	福桜(宮崎)	39.758	15.492	2.092
かつはやしげ 勝隼茂	H17.10.11 黒原4850	石川郡 石川町	平茂勝	第5隼福	68.746	8.351	2.373
きたひらしげ 喜多平茂	H16.10.25 黒14188	喜多方市	平茂勝	北国7の8	63.408	9.528	2.472
だい かつひかり 第1勝 光	H15. 3.27 黒原4570	本宮市	平茂勝	東平茂	93.932	17.239	2.216

注 現在、繁養していない基幹種雄牛も含む。

(ウ) 種雄豚

品 種	名 号 (登録番号)	生年月日	血 統	
			父	母
ランドレース種 (フクシマル2)	フクシマル 1 0019	H30. 1. 13	フクシマル 2 0203	フクシマル 1 0150
	証明番号LL07-A000168		証明番号LL07-A000154	証明番号LL07-A000155
	フクシマル 2 0181	R1. 8. 31	フクシマル 8 0074	フクシマル 3 0163
	証明番号LL07-A000186		証明番号LL07-A000042	証明番号LL07-A000162
	フクシマル 3 0013	R2. 3. 30	フクシマル 8 0167	フクシマル 2 0023
	証明番号LL07-A000190		証明番号LL07-A000063	証明番号LL07-A000176
	フクシマル 9 0038	R4. 1. 20	フクシマル 4 0071	フクシマル 4 0192
	証明番号LL07-A000259		証明番号LL07-A000075	証明番号LL07-A000161
デュロック種 (フクシマル桃太郎)	フクシマル 1 0167	R4. 8. 18	フクシマル 4 0061	フクシマル 3 0096
	証明番号LL07-A000265		証明番号LL07-A000182	証明番号LL07-A000251
	ナガラ ナガラ フクシマル 5 0190	H30. 6. 1	ナガラ フクシマル モータ フクシマル 4 0058	ナガラ フクシマル 6 0109
	証明番号 DD07-A000336		証明番号DD07-A000063	証明番号DD07-A000071
	ナガラ 1154 ナガラ フクシマル 2 0168	R1. 7. 1	ナガラ 1154 ナガラ フクシマル 2 0048	ナガラ フクシマル モータ フクシマル 1 0001
	証明番号 DD07-A000357		証明番号DD07-A000048	証明番号DD07-A000315
	ナガラ 1154 ナガラ フクシマル 2 0141	R1. 6. 29	ナガラ 1154 ナガラ フクシマル 2 0048	ナガラ フクシマル 3 0036
	証明番号DD07-A000358		証明番号DD07-A000048	証明番号DD07-A000322
	ナガラ フクシマル フクシマル 5 0175	R2. 12. 31	ナガラ フクシマル モータ フクシマル 8 0152	ナガラ ナガラ フクシマル 1 0011
	証明番号DD07-A000393		証明番号DD07-A000350	証明番号DD07-A000347
	ナガラ ナガラ フクシマル 7 0094	R3. 7. 18	ナガラ ナガラ フクシマル 2 0076	ナガラ フクシマル モータ フクシマル 1 0001
	証明番号DD07-A000397		証明番号DD07-A000345	証明番号DD07-A000315
	フクシマル ナガラ フクシマル 1 0106	R3. 7. 22	フクシマル ナガラ フクシマル 03 0191	ナガラ ナガラ フクシマル 3 0090
	証明番号DD07-A000398		証明番号DD07-A000314	証明番号DD07-A000373
	フクシマル ナガラ フクシマル 1 0119	R3. 7. 26	フクシマル ナガラ フクシマル 03 0191	ナガラ ナガラ フクシマル 3 0091
	証明番号DD07-A000399		証明番号DD07-A000314	証明番号DD07-A000374
	ナガラ フクシマル フクシマル 7 0150	R3. 10. 6	ナガラ フクシマル フクシマル 2 0174	フクシマル ナガラ フクシマル 1 0011
	証明番号DD07-A000412		証明番号DD07-A000329	証明番号DD07-A000347
	ナガラ フクシマル フクシマル 7 0154	R3. 10. 6	ナガラ フクシマル フクシマル 2 0174	フクシマル ナガラ フクシマル 1 0011
	証明番号DD07-A000413		証明番号DD07-A000329	証明番号DD07-A000347

品 種	名 号 (登録番号)	生年月日	血 統	
			父	母
デュロック種 (フクシマル桃太郎)	ナガラ ナガラ フクシマル 1 0016	R4. 1. 28	ナガラ フクシマル モータ フクシマル 8 0152	ナガラ フクシマル 3 0130
	証明番号DD07-A000417		証明番号DD07-A000350	証明番号DD07-A000387
	フクシマル モータ ナガラ フクシマル 3 0044	R4. 3. 13	フクシマル モータ フクシマル フクシマル 7 0297	ナガラ ナガラ フクシマル 3 0092
	証明番号DD07-A000419		証明番号DD07-A000303	証明番号DD07-A000375
	フクシマル モータ ナガラ 1154 フクシマル 1 0050	R4. 3. 19	フクシマル モータ フクシマル フクシマル 7 0297	ナガラ 1154 ナガラ フクシマル 3 0107
大ヨークシャー種	証明番号DD07-A000420		証明番号DD07-A000303	証明番号DD07-A000380
	フクシマル ナガラ フクシマル 1 0085	R4. 5. 22	フクシマル フクシマル モータ フクシマル 2 0158	ナガラ フクシマル 3 0128
	証明番号DD07-A000424		証明番号DD07-A000088	証明番号DD07-A000385
	シントク ダブル 2018-3 1367	H30. 11. 25	シントク ダブル 2015-3 1404	シントク ダブル 2016-7 0217
	証明番号WW01-A001742		証明番号WW01-A000828	証明番号WW01-A001342
大ヨークシャー種	シントク ダブル 2018-3 1373	H30. 11. 26	シントク ダブル 2015-6 1254	シントク ダブル 2016-7 0244
	証明番号WW01-A001746		証明番号WW01-A000808	証明番号WW01-A001349

イ 各家畜繋養状況

(ア) 乳用牛移動表

区 分	年度初 頭 数	増 加				減 少				年度末 頭 数
		生産	組替	購入	小計	出荷	組替	その他	小計	
成雌牛	38	-	10	-	10	9	-	9	18	30
育成牛	13	-	12	-	12	1	10	-	11	14
子牛	14	26	-	-	26	14	12	1	27	13
合 計	65	26	22	0	48	24	22	10	56	57

(イ) 肉用牛移動表										(頭)
区 分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数
		購入	組替	その他	小計	出荷	組替	その他	小計	
基幹種雄牛	5	-	1	-	1	-	-	-	-	6
直接検定牛	11	1	10	2	13	-	13	3	16	8
待 機 牛	11	-	3	-	3	2	1	-	3	11
肥育試験牛	27	-	-	17	17	19	-	-	19	25
供 卵 牛	11	5	-	-	5	3	-	5	8	8
合 計	64	6	14	19	39	24	14	8	46	58

(ウ) 豚移動表											(頭)
区 分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数	
		生産	導入	組替	小計	出荷	組替	その他	小計		
成豚 (雄)	デュロック	14	-	-	4	4	4	-	-	4	14
	大ヨークシャー	1	-	-	-	-	-	-	1	1	0
	ランドレース	4	-	-	2	2	1	-	-	1	5
成豚 (雌)	デュロック	15	-	-	4	4	3	-	2	5	14
	ランドレース	13	-	-	8	8	4	-	4	8	13
	その他	17	-	-	4	4	-	-	1	1	20
子豚	デュロック	64	233	-	-	233	6	151	70	227	70
	ランドレース	69	73	-	-	73	8	77	19	104	38
	雑種	40	433	-	-	433	-	295	52	347	126
肥育豚		171	-	-	501	501	570	-	7	577	95
合 計		408	739	-	523	1,262	596	523	156	1,275	395

※ 成豚（雄）及び（雌）の出荷には払下を含む。

ウ 各種生産実績

(ア) 乳生産販売状況 (kg)

年 度	販売量
平成25年度	194,079.0
26年度	209,508.0
27年度	212,350.0
28年度	204,974.0
29年度	228,930.0
30年度	214,889.0
31年度	211,623.0
令和 2年度	215,047.0
3年度	207,329.0
4年度	178,515.0
5年度	203,444.0

(kg)		
年月	販売量	
令和5年度	4月	17,031.0
	5月	15,400.0
	6月	16,885.0
	7月	18,246.0
	8月	18,771.0
	9月	18,913.0
	10月	18,932.0
	11月	18,271.0
	12月	15,767.0
	1月	15,979.0
	2月	15,648.0
	3月	13,301.0
	合計	203,444.0

(イ) 肉用牛精液生産実績		(本)			
		生 産	払 出	廃 棄	
		生産	売払	その他	
前年度繰越		117,591	—	—	—
令和5年	4月	225	98	—	—
	5月	319	50	56	—
	6月	272	90	102	—
	7月	574	51	60	—
	8月	864	48	140	—
	9月	732	60	—	—
	10月	429	78	—	2
	11月	265	88	121	—
	12月	119	115	168	3
	令和6年 1月	280	37	—	—
	2月	166	293	5	—
	3月	208	190	1	216
次年度繰越		117,591	1,198	653	221

(ウ) 肉用牛検定実績

a 直接検定実績 (頭)

保 留	検定中
6	0

b 現場後代検定実績 (頭)

終 了	実施中
—	9

(エ) フクシマ L2 生産実績 (維持頭数及び更新、配布状況)

	実績	内訳	
		雄	雌
種雄豚数 (頭)	5	5	—
種雌豚数 (頭)	13	—	13
分娩腹数 (腹)	9	—	9
生産子豚数 (頭)	73	44	29
離乳頭数 (頭)	63	—	—
育成率 (%)	86.3	—	—
子豚登記数 (頭)	17	5	12
自場更新数 (頭)	1	1	—
配布場所数 (戸)	2	1	1
配布頭数 (頭)	4	1	3

(オ) デュロック種「フクシマD 桃太郎」生産実績

a 維持頭数及び更新、配布状況

	実績	内訳	
		雄	雌
種雄豚数 (頭)	14	14	-
種雌豚数 (頭)	14	-	14
分娩腹数 (腹)	30	-	30
生産子豚数 (頭)	233	114	119
離乳頭数 (頭)	175	-	-
育成率 (%)	75.1	-	-
子豚登記数 (頭)	13	9	4
自場更新数 (頭)	9	7	2
配布場所数 (戸)	2	2	-
配布頭数 (頭)	3	3	-

b と体形質

性別 及び 頭数	生体重	と体重	と体長	背腰長		と体幅	ロース		背脂肪の厚さ		
	と殺前 (kg)	冷 (kg)	(cm)	I (cm)	II (cm)	(cm)	長さ (cm)	断面積 (cm ²)	カタ (cm)	セ (cm)	コシ (cm)
去勢 5 (標準偏差)	116.8 1.9	76.7 2.1	90.4 2.0	75.5 1.7	65.8 1.9	37.9 1.2	55.4 1.7	21.2 3.2	5.2 0.2	3.4 0.4	4.4 0.5
雌 5 (標準偏差)	116.6 1.6	76.9 1.0	93.2 1.6	78.6 1.4	68.6 1.1	37.3 1.2	58.3 1.4	23.0 5.0	4.8 0.3	2.8 0.5	4.1 0.6

(カ) 飼料作物生産実績

a 牧乾草生産量(本所)

区分	収穫期間	面積(a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総 量	10a当り	総 量	10a当り
1番草	5/ 9 ~ 5/24	2,020	122,620	607	83,894	384
2番草	6/18 ~ 7/ 5	1,975	48,457	245	37,223	188
3番草	7/24 ~ 8/22	1,975	73,048	370	51,260	256
4番草	9/13 ~ 9/19	1,280	62,221	486	34,151	269
合計	-	-	297,038	-	206,528	-

b トウモロコシサイレーズ(本所)

ほ場No.	収穫期間	面積(a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総 量	10a当り	総 量	10a当り
8	8/28 ~ 8/30	210	106,733	5,083	39,171	1,865
9	8/31 ~ 9/ 1	180	82,368	4,576	29,817	1,657
合計	-	390	189,101	4,849	68,988	1,769

注 収穫面積は、ほ場内枕地を除く実栽培面積

(キ) 鶏移動表(成鶏羽数)

(羽)

区 分	年度初 羽 数	受 入				払 出				年度末 羽 数
		生産	導入	組替	小 計	出荷	組替	その他	小 計	
保存鶏	育成	-	784	-	-	784	-	647	137	784
	成鶏	559	-	-	647	647	-	647	647	625
育種鶏	育成	-	1,969	-	-	1,969	-	1,502	467	1,969
	成鶏	2,003	-	-	1,502	1,502	1,997	-	51	2,048
種 鶏	育成	718	1,412	-	-	1,412	1,136	-	294	1,470
	成鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-
実用鶏	育成	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	成鶏	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計		3,280	4,165	-	2,149	6,314	3,133	2,149	1,530	6,812
										3,782

(ク) ふ化実績

区 分	入卵個数 (個)	ふ化羽数(羽)			
		育雛	出荷	その他	
保 存 鶏	6,463	2,022	784	-	1,238
育 種 鶏	5,390	3,615	1,969	-	1,646
種 鶏	13,063	9,234	1,412	1,280	6,542
実 用 鶏	68	61	-	10	51
計	24,984	14,932	4,165	1,290	9,477

(ケ) 卵の生産状況 (個)

月	産卵数				
		正常卵	廃棄卵	種 卵	破損卵
4月	34,190	31,961	824	601	804
5月	33,405	24,072	848	7,646	839
6月	30,250	23,250	1,080	4,949	971
7月	2,666	2,489	87	0	90
8月	447	361	62	0	24
9月	10,345	9,131	858	0	356
10月	24,194	22,344	1,116	0	734
11月	30,112	25,192	578	3,798	544
12月	36,186	31,627	463	3,541	555
1月	32,665	31,584	525	0	546
2月	29,850	24,990	517	3,761	582
3月	31,797	21,906	552	8,565	775
合計	296,093	248,902	7,510	32,861	6,820

(2) 沼尻分場

ア 肉用牛移動表

ア 肉用牛移動表											(頭)	
品種	区分	年度初 頭 数	受 入				払 出				年度末 頭 数	
			生産	組替	その他	小計	出荷	組換	その他	死亡		小計
黒毛和種	成牛(雌)	71	—	10	4	14	—	—	3	2	5	80
	子牛	34	57	—	2	59	14	18	6	3	41	42
	肥育試験牛	12	—	18	—	18	12	—	—	—	12	18
合 計		117	57	28	—	91	26	18	9	5	58	140

※その他は所内移動

イ 産子成績

(頭)

品種	分娩頭数	(死産)	(流産)	生産頭数	ヘイ死
黒毛和種	58	(1)	(0)	54	3

注 死産及び流産は分娩頭数の内数

ウ 繁殖成績(妊娠率)

人工授精(受胎頭数/授精頭数)	受精卵移植(受胎頭数/移植頭数)
86.8% (66頭/76頭)	50.0% (6頭/12頭)

エ 牧乾草生産量(沼尻分場)

区分	収穫期間	面積 (a)	生産量(現物 kg)		乾物生産量(kg)	
			総 量	10a当り	総 量	10a当り
1番草	6/17 ~ 6/25	1,660	79,153	477	66,833	403
2番草	8/21 ~ 8/29	1,660	87,734	529	49,414	298
合計	-	-	166,877	-	116,247	-

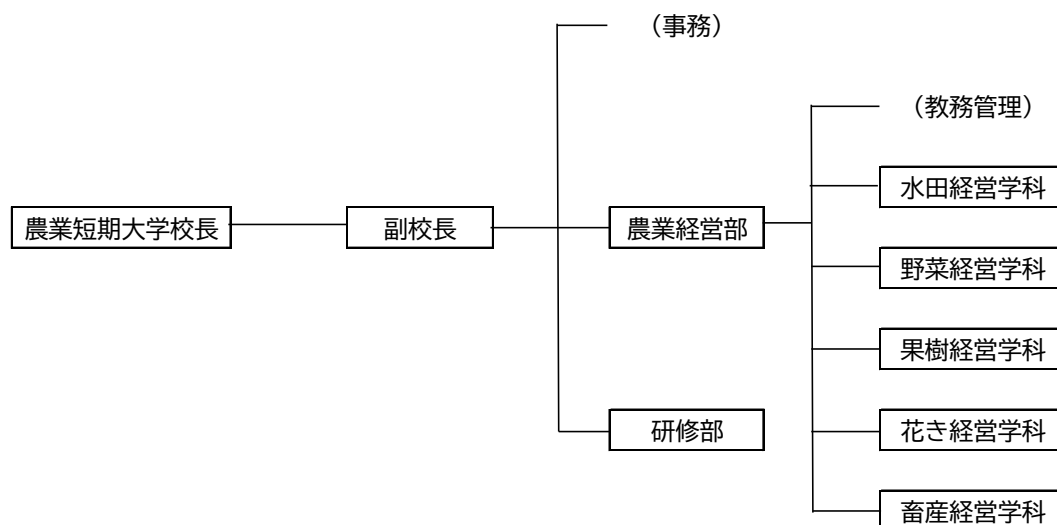
注 沼尻分場のある猪苗代町は、国の通知に基づく永年生牧草の流通・利用自粛地域であるため、除染を実施し、モニタリング検査で利用可能となった草地においてのみ収穫した。なお、利用ができない草地については維持管理のみを実施した。

IV 先進的農業者育成・支援

1 農業短期大学の業務実績

(1) 概要

ア 組織



イ 施設 区 分	主 な 施 設 内 容
教育施設	本館(教室、教養ホール、視聴覚教室、職員室、事務室、会議室、講師控室) 研究実験棟(各学科、学科教室(ゼミ室)、実験演習室、研究室、無菌室、培養室) 多目的学習棟(図書室、情報処理演習室、学生ホール) 男子寮(けやき寮)、女子寮(せんだん寮)、食堂、体育館
実習教育施設	実習教育棟、作業棟、機械格納庫、果実選果場、鉄骨ハウス等栽培施設、 乳牛舎、肉牛舎、肥育牛舎、畜産加工演習棟、堆肥舎、パドック、農産物直売所(アグリハウス万葉)
研修施設	研修棟、屋外トイレ 農業機械実習棟(整備実習室)、トラクタ運転練習コース 農産加工技術センター(開発室、発酵加工室、高湿加工室、粉体加工室)

(2) 農業経営部の取組

実践的な農業の技術力と優れた経営力を備えた地域のリーダーとなる農業者を育成するため、農業に関する講義や実験・演習、実習、研修などの教育を行った。

ア 学生の状況(学年毎の定員、農業経営部 60 名)

(ア) 学生数は1学年 59 名、2 学年 45 名、合計 104 名(前年度 93 名)であり、1 学年はほぼ定員となった。しかしながら学生数、減少による高校改革、少子高齢化などにより定員確保は大きな課題である。

学科別では、水田経営学科 23 名、野菜経営学科 31 名、果樹経営学科 19 名、花き経営学科 10 名、畜産経営学科 21 名の在籍数となっている。

出身高校別では農業課程が 60 名、普通課程 30 名、その他が 14 名であり、農業高校出身の学生が 58%となっている。

農家・非農家別では専業農家 19 名、兼業農家 18 名、非農家 67 名であり、非農家出身の学生がおよそ 6 割を占めている。

出身地域別では県北が 25 名、県中が 23 名、県南 18 名、会津 15 名、南会津 2 名、相双 7 名、いわき 6 名、県外 8 名であり、各地域からの応募がある。

(イ) 令和 5 年度の専門士(農業専門課程)の称号が付与される者(卒業生)は、45 名であった。

(ウ) 独立行政法人日本学生支援機構の奨学金貸与者は、1 学年 10 名、2 学年 5 名であった。

(エ) 学生寮の令和 5 年度の入寮は、2 学年は男子 19 名、女子 6 名、1 学年は男子 25 名、女子 7 名であった。

イ 専修教育の状況

(ア) 水田経営学科

1 学年は、農場実習で水稻、麦類、大豆、イモ類などの食用作物の栽培や加工を体験し、基礎的な技術、観察力などを身に付けた。また、県内・県外研修や先進農家等留学研修により、実践的な経営感覚を養った。

2 学年は、卒業論文における研究対象の作物を水稻または畑作物から選択し、研究で得られた成果を就農後に活用できる課題に取り組むとともに、作物の栽培や調査研究を通して、高度な技術と経営感覚を身につけた。

JGAP 及び FGAP については、「米（玄米）」、「そば」、「小麦（JGAP のみ）」で認証を取得しており、更新審査に当たって講義や実習で新たなリスクを評価するとともに、農場施設及び帳簿の点検作業を行い、学生が主体となって受審した。JGAP 指導員資格を学生 4 名が取得した。

また、近年の米価下落に鑑み、大玉村の『あだたらの里「福、笑い」栽培研究会』の一員として本県のオリジナル水稻品種「福、笑い」の栽培や、本宮市の酒造メーカー「大天狗酒造」と連携した県オリジナル酒造好適米「福乃香」の栽培、本校産小麦を使用した乾麺「アグリカレッジ福島うどんばい」の直売実習等での販売に取り組んだ。

スマート農業については、福島大学食農学類の准教授 2 名によるスマート農業に関する講義を受講し、最新のスマート農業の動向について知識を深めた。併せて、スマート農業機械を操作する実践的な研修を受講した。

学生の進路については、2 学年 13 名のうち 7 名が卒業後に就農した（親元就農 2 名、法人就農 5 名）。

（イ） 野菜経営学科

1 学年は、県内で栽培が盛んなキュウリやトマト、アスパラガス等の栽培の基礎を学ぶとともに、スマート農業、環境制御技術等の最新の農業技術などについても学習し、知識・栽培技術を高めた。また、県内先進農家において長期研修を行い優れた技術や経営について学んだ。

2 学年は、産地の課題解決や高収益生産などの卒業論文調査研究に取り組むとともに、6 回開催した直売実習などで消費者のニーズを捉えながら生産物を直接販売するなど、高度な栽培技術の習得や経営実践力を養った。また、農業に係る優良事例について学生自ら企画して現地で視察・調査を行い知識や技術を高めた。

JGAP 及び FGAP の認証を取得しているトマト、キュウリにおいて、リスク評価や 管理作業及び収穫の記録作成等の実践が学生に定着するとともに、更新審査の準備、事前の模擬審査について学んだ。

学生の進路については、2 学年 15 名のうち 2 名が自家就農、8 名が法人就農した。

（ウ） 果樹経営学科

JGAP、FGAP の認証品目である「ぶどう」「かき」部門において、学生主体の実践活動が定着した。特に、経験の浅い 1 学年に対し、2 学年が分かりやすく指導、助言するなど、学生間での技術の伝承が進み、GAP に対する意識は大きく向上した。

果樹の生育状況は、春先の気温が高く、開花時期が平年より 2 週間程度早まり生育初期の管理が慌ただしかったが、以後の適期管理により高品質果実の生産が実現でき、卒業論文調査研究も充実した取りまとめができた。

さらに、生産物すべての販売を学生が主体となって担うことにより、責任感を持ち、達成感を味わうことができた。また、いくつかの事業所を訪問しての販売活動を通して農業経営における顧客管理の重要性も体感することができた。

学生の進路については、2 学年 6 名で就農する者はいなかった。

（エ） 花き経営学科

花き経営の基礎である栽培管理については、猛暑による高温障害の影響で一部のキクやシクラメンに開花遅延が見られたものの、各栽培品目共に順調に生育し、計画どおりの生産・販売を行うことができた。特に早朝からの収穫実習や校内外の直接販売の実習など、学生自ら生産から販売まで実践し、技術力や販売力を養うことができた。

また、県内の先進農家や県外の生花店、花き関連展示会への視察研修を行うなど高度な栽培技術や先進的な経営感覚を実際に体験し、花き経営への理解を深めることができた。

GAP 取組の一環としては、令和 3 年度に取得した「花き日持ち品質管理認証」について継続認定を受けるとともに、認証シールを作成し宿根カスミソウの販売時に添付するなど、学生は花きの日持ち性向上の意義を認識し、実習に取り組んだ。

学生の進路については、2 学年 2 名のうち 1 名が法人就農した。

（オ） 畜産経営学科

講義や実習を通して、乳用牛や肉用牛に関する知識や飼養管理技術の習得に努めた。飼養管理面では、飼養衛生管理マニュアルに基づく実践により、衛生管理に対する理解を深めることができた。また、責任分担制の下、監視カメラによる分娩予定牛の観察や休日の飼養管理を実施させることにより責任感を持って管理するという意識醸成を図った。スマート農業に関しては、NOSAI 福島や畜産研究所の研究員を講師に迎え、超音波診断技術に関する研究会を開催し、技術習得を図った。

校外活動では、子牛セリ市場や各種研修会への参加、乳業工場や（国研）農研機構畜産研究部門等の視察研修を実施した。

学生の進路については、2 学年 9 名のうち 1 名が自家就農、2 名が法人就農した。

- (カ) その他特徴的な取組
- a 福島大学食農学類との連携の具現化(本校教育への支援、福大生実習受け入れ、学生の交流活動、他)
- ・根本文宏特任研究員 校内プロジェクト発表会指導・講評 1、2 学年
 - ・講義(スマート農業実践) 窪田陽介准教授「スマート農業の概論」
渡邊芳倫准教授「スマート農業と環境保全型農業の取組」
- b GAP の取組
- (a) GAP 概論の開講
- 本校職員、環境保全農業課職員、GAP・IT サポート合同会社佐久間輝仁代表を講師として GAP 概論を実施した。講座では、GAP の基本理念や本県での取組状況の説明、グループワーク、本校農場における取組状況の見学等を行い、GAP に関する理解を深めた。GAP 更新審査に向けて模擬審査を実施し、学生に審査の流れや書類の内容を把握させるとともに、農場審査に対する準備を実施させた。学生は、更新審査にも立ち会い審査作業の補助等を行うことで、審査への理解を深めた。
- (b) JGAP 認証品目
- | | | |
|--------|-------------|------------------------|
| 水田経営学科 | 米(玄米)、そば、小麦 | |
| 野菜経営学科 | トマト、きゅうり | |
| 果樹経営学科 | ぶどう、かき | *更新認証日：令和 5 年 12 月 4 日 |
- (c) FGAP 認証更新
- 令和 2 年度末に認証を取得したふくしま県 GAP(FGAP)の更新認証申請を行った(令和 5 年 11 月 2 日)。
- (d) JGAP 指導員資格取得 2 学年 9 名、1 学年 11 名
- (e) 三重県農業大学校との GAP 交流(令和 5 年 9 月 19 日～9 月 21 日)
- 代表学生 5 名、引率職員 2 名で、三重県農業大学校を訪問し交流会を実施した。交流会では、GAP の取組状況や学生自治会活動に関する情報・意見交換、両校の農産物を直売実習で販売する直売交流、施設見学等を行った。
- (f) 花き日持ち品質管理認証(令和 3 年 12 月 1 日取得)
- 認証シールを作成し、認証取得品目である宿根カスミソウの販売時に添付し、日持ち認証に対する意識の向上及び PR を図った。
- c スマート農業に係る人材育成(教職員の技術習得、研修講座開設)
- (a) スマート農業実践の開講
- 本校職員、福島大学食農学類准教授 2 名によるスマート農業に関する講義と、農業機械メーカー((株)南東北クボタ)と連携し、スマート農業機械(4 機種)を操作演習する研修を実施した。
- d 地域との連携
- (a) 農業体験の受入(認定こども園ポプラの木、中島幼稚園)
- (b) 矢吹町と本校との連携協定による取組「フロンティア農園」による町民との交流(6 回開催、参加数延べ 93 名)。
- (c) インターンシップの受入(安積高校探求活動、白河実業高校施設見学、福島大学食農学類 3 年生短期受入)
- (d) 物産販売施設の経営強化研修会
- (e) JA 東西しらかわとの連携協定
- 地域農業の発展と就農する担い手の確保(米の提供について)
- (f) 矢吹町広報誌で毎月本校学生を紹介
- e 販売活動
- (a) 三重農大との交流
- GAP 取組を通じて交流を実施している三重農大産の煎茶等を本校直売実習で本校学生が販売(6/16)。
- (b) 福、笑いの販売
- 本県のオリジナル水稻品種「福、笑い」の栽培研究会『あだたらの里「福、笑い」栽培研究会』の一員として、「福、笑い」の栽培に取り組んだ。本校産「福、笑い」は、あだたらの里直売所等で販売された。
- (c) 農業総合センターまつりにおける農産物販売の実施
- 農業総合センターまつりに 2 学年、職員が参加し、乾麺、小麦粉、ミニトマト、たまねぎ、なし(幸水)、ぶどう(ピオーネ)、小ギク、カスミソウなどの農産物販売を実施した(9/1)。

f 情報発信

- (a) テレビ・ラジオによる学生募集案内
 - ・県政広報テレビ番組2回
 - ・おしえてキビタン(6/24放送「アグリカレッジ福島 オープンキャンパスに行こう!」)
 - ・キビタンGo(1/10放送「アグリカレッジ福島で農業を学ぼう」)ラジオ 13回
 - ・農家の皆さんへ(4月、5月、7月、11月、12月、1月)6回
 - ・キビタンスマイル(4月、6月、9月、10月、11月、12月、1月)7回
 - ・テレビ・ラジオ30秒スポットCM 5回
 - ・オープンキャンパス参加者募集(6月)、櫛隆祭開催(10月)
 - ・一般入試前期(11月)、一般入試後期(12月)、長期研修生募集(1月)
- (b) 県の公式Twitterへの学生募集掲載
オープンキャンパス参加者募集(7月)、櫛隆祭開催(10月)
- (c) 新聞広報(県からのお知らせ)4回
オープンキャンパス参加者募集(6月)、一般入校試験前期(11月)
一般入校試験後期(12月)、長期研修生募集(1月)
- (d) 雑誌掲載1回 月刊コロブス7月号
- (e) 矢吹町広報誌「広報やぶき(農短大生のひとりごと)」12回
- (f) 外部講師の授業における、Instagramによる学校紹介
- (g) 福島放送情報番組「シェア」における本校「直売実習」の放映
福島放送「シェア」の県民リポーターである坂本陽子氏(やぶき観光案内所所長)が、8月9日開催の「直売実習」について取材を実施。農産物直売所「アグリハウス万葉」への商品の搬入・陳列・ポップ掲示などの売場作り、来場者への商品の説明や販売の風景、次回9月20日予定の本直売実習の開催予告などの動画撮影を行い、同番組で8月16日に放映された。
- (h) こおりやま産業博への参加

g 学生募集

- (a) 県外(東京、千葉、埼玉、栃木、茨城)への学校要覧の送付
近年は茨城、栃木、埼玉、東京の高校よりオープンキャンパスへの参加及び、受験されているため、関東圏への農業高校へ情報提供を実施した。
- (b) 通信制、定時制への学校訪問
近年、通信制、定時制からの学生応募が増加しているため実施した。
- (c) オープンキャンパスの時間短縮
県外からの参加者、天候などを考え内容を詰めて午前中開催とした。

h その他

- (a) 今年度櫛隆祭において農業関連企業、地元飲食店、農業法人、キッチンカーによる販売や企業紹介。修明高校、光南高校による販売や活動紹介などを行った。
2,500名程度の来場者となり、本校をアピールする良い機会となった。
- (b) 卒業記念講演
3月1日(金)斎藤恭紀気象予報士による記念講演を実施した。

i 統合事業関係

「令和5年度福島県特定原子力施設交付金事業」を活用して新たなパイプハウスを1棟新設し、長期就農研修生受け入れ強化を図った。

ウ 進路指導の取組

(ア) 就農への誘導

令和5年度卒業生45名は全員進路が決定した。内訳は就農21名(47%)、農協・農業団体3名(6%)、農業関連産業12名(27%)、他産業4名(9%)、公務員4名(9%)、進学1名(2%)であり、就農率は過去最高となった。

- a 令和3年度から就農支援サポート支援員(1名)を配置し、新規就農にかかる支援体制の充実、強化を図っている。県内の農業法人や各市町村、各農林事務所との連携を図り、親元就農に向けた準備支援や、雇用就農者を増やすため、農業法人の求人に関する意識調査、農業法人と学生とのマッチング、学生との個別相談、就農相談会開催支援の取組を行った。
- b 県内研修を活用し、現地において農業の復興に取り組む農業法人や技術革新に取り組む意欲的な法人の研修を実施した。
- c 学生の就農意欲高揚のため、1学年を対象とした就農相談会「相双地域における農業法人等視察相談会」、「ふくしま農業人フェア2023 for Students」に参加した。

(イ) 進路に対する意識付けと支援

- a 1学年を対象として8月に進路希望調査を実施した。
- b 学生の進路に対する目的意識を強く持たせるとともに、就職を希望する学生に対しては就職活動における心構えを、また、自家就農を希望する学生には雇用する立場となる経営者としての資質向上が図られるよう、就農講座、農業法人等就職講座において指導を実施した。

- c ハローワーク白河と連携し2学年7名を対象に、ジョブサポーターによる個別面談を実施した。また、ふくしま生活・就職応援センターと連携し1学年19名を対象に個別面談を実施した。
- (ウ) 資格取得支援
 - a 大型特殊免許（農耕車に限る） 2年生 32名が免許を取得した。
 - b けん引運転免許（農耕車に限る） 2年生 26人が免許を取得した。
 - c 毒物劇物取扱者 1年生 5名が資格を取得した。
 - d 刈払機取扱作業安全衛生教育 1年生 49名受講
 - e アーク溶接業務特別教育 1年生 25名受講
 - f 家畜人工授精師 畜産経営学科2年生 9名が資格を取得した。
- (エ) 就農準備資金の活用
 - a 就農準備資金は、就農を希望する青年が農業技術及び経営ノウハウの習得のための長期の研修実施を支援する制度で、交付金が年額150万円で最長2年間交付される。本校農業経営部の学生と研修部長期研修の研修生が交付要件を満たす研修として位置づけられている。2学年11名、1学年12名、長期就農研修生3名が受給した。
 - b 本制度を活用した2学年の就農分野は、親元就農4名、雇用就農7名であった。
- エ 学生募集の取組
 - (ア) 募集要項等の送付
 - 募集要項等を高校155校、県の43機関、59市町村、19団体に送付し、学生募集への協力を依頼した。
 - (イ) 高校訪問他
 - 県内の高校120校を訪問し、進路担当教員に対して、本校の概要及び募集について説明するとともに生徒の進路希望状況について調査した。加えて県外高校4校に訪問した。
 - (ウ) 進路説明会への参加
 - 高校主催の説明会26校延べ37校に参加し、本校の概要等について説明した。今年度から郡山、白河会場での進学相談会に参加した。
 - (エ) オープンキャンパスの開催
 - 7月15日(土)、7月23日(日)、8月3日(木)にオープンキャンパスを開催し、本校の施設及び講義内容等について説明した。29校78名の高校生等及び74名の保護者が参加した。案内は高校116校、59市町村、農林水産部の16機関、2団体に送付し、協力を依頼した。
 - (オ) 県広報の活用
 - 広報課30秒スポット放送5回、キビタンスマイル(ふくしまFM)7回、農家の皆さんへ(ラジオ福島)6回、農業総合センターだよりに学生募集の案内を掲載した。
 - (カ) 学校見学の受け入れ
 - 県立高校4校の生徒80名、教員7名が来校し、農業の現状に関する施設・設備の見学及び教育内容の説明を行った。
 - (キ) 募集結果は、推薦入校試験受験者31名、一般入校試験(前期)受験者11名、一般入校試験(後期)受験者1名の計43名が受験し、43名が合格となった。

オ 学生数
(ア) 学科別

※入校時

学 科	1学年			2学年			計		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
水田経営学科	10	0	10	12	1	13	22	1	23
野菜経営学科	14	2	16	8	7	15	22	9	31
果樹経営学科	12	1	13	3	3	6	15	4	19
花き経営学科	6	2	8	2	0	2	8	2	10
畜産経営学科	6	6	12	6	3	9	12	9	21
計	48	11	59	31	14	45	79	25	104

(イ) 農家、非農家別

※入校時

	1学年		2学年		合計	
	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)
専業	11	19	8	18	19	18
農家 兼業	8	13	10	22	18	17
計	19	32	18	40	37	35
非農家	40	68	27	60	67	65
合 計	59	—	45	—	104	—

(ウ) 出身高校課程別

※入校時

	1学年		2学年		合計	
	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)	学生数(名)	割合(%)
農業高校	29	49	31	69	60	58
普通高校	23	39	8	18	31	30
その他	7	12	6	13	13	12
合 計	59	—	45	—	104	—

カ 教育科目

区分	科目名	単位 数	授業時間数			授業回数(時限数)			
						1 学年		2 学年	
			講義・演習	実験	実習	前期	後期	前期	後期
共通 教養 科目	全 学 科 共 通	生物基礎	1	15		7			
		化学基礎	1	15		7			
		数学基礎	1	15		7			
		国語表現Ⅰ	1	15		7			
		国語表現Ⅱ	1	15			7		
		国語表現Ⅲ	1	15				7	
		人間と社会	1	15				7	
		体育	4	60		14	6	7	3
		教養講座	1	15		3	4		
		就農講座Ⅰ	2	30			14		
		農業法人等就職講座Ⅰ							
		就農講座Ⅱ	1	15				7	
		農業法人等就職講座Ⅱ							
		① 小計	15	225	0	45	31	28	3

区分		科目名	単位 数	授業時間数			授業回数（時限数）			
							1 学年		2 学年	
				講義・演習	実験	実習	前期	後期	前期	後期
共通専門科目	全学科共通	農業経営	2	30					14	
		農業経営演習	2	30						14
		農業法規	2	30						14
		農業関連産業論	1	15		5	2			
		簿記概論	3	45		22				
		農業情報処理基礎	2	30			14			
		農業情報処理応用	1	15						7
		農業情勢Ⅰ	1	15					7	
		農業情勢Ⅱ	1	15						7
		土壌肥料概論	2	30		14				
		農業機械	2	30		14				
		農業機械基礎実習	1		45	6	16			
		農業機械操作実習Ⅰ	1		45				22	
		マーケティング論	1	15					7	
		マーケティング演習	2	30						14
		食品製造	1	15				7		
		スマート農業実践	1	15				7		
		GAP 概論	1	15		7				
		卒業論文	10	150				15	30	30
		簿記検定講座*	2	30				14		
		毒物・劇物取扱解説*	1	15		7				
		毒物劇物取扱者資格講座*	1	15		7				
		農業機械操作実習Ⅱ*	1		45					
		② 小計 （*自由選択科目を除く）	37	525	0	90	68	61	80	86
専門科目	水田野菜果樹花き学科共通	農業概論	2	30		14				
		作物保護	2	30			14			
		植物生理	1	15		7				
		環境保全と農業	2	30					14	
		有機農業	1	15				7		
		農産物流通	1	15					7	
		農学実験	1		30	8	6			
		③ 小計	10	135	30	0	29	20	7	21
		水田経営学科	先進農家等留学研修	5		225	44			
			水田経営研修	2		90	10	12	19	4
	作物経営実習		25		1125	140	130	195	97	
	水田経営基礎		2	30		14				
	水田経営応用		2	30			14			
	水田経営実践		2	30				7	7	
	食品製造演習		2	30			14			
	④-1 小計		40	120	0	1440	208	170	221	108
	野菜経営学科	先進農家等留学研修	5		225	44				
		野菜経営研修	2		90	10	12	19	4	
		野菜経営実習	25		1125	140	130	195	97	
		野菜生産概論	2	30		14				
		野菜栽培各論	2	30			14			
		野菜経営各論	2	30				7	7	
		食品製造演習	2	30			14			
		④-2 小計	40	120	0	1440	208	170	221	108

区分		科目名	単位 数	授業時間数			授業回数（時限数）			
							1 学年		2 学年	
				講義・演習	実験	実習	前期	後期	前期	後期
専門科目	果樹経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44			
		果樹経営研修	2			90	10	12	19	4
		果樹経営実習	25			1125	140	130	195	97
		果樹生産概論	2	30		14				
		果樹栽培各論	2	30			14			
		果樹経営各論	2	30				7	7	
		食品製造演習	2	30			14			
		④-3 小計	40	120	0	1440	208	170	221	108
	花き経営学科	先進農家等留学研修	5			225	44			
		花き経営研修	2			90	10	12	19	4
		花き経営実習	25			1125	140	130	195	97
		花き生産概論	2	30		14				
		花き栽培各論	2	30			14			
		花き経営各論	2	30				7	7	
		フラワー装飾演習	2	30			14			
		④-4 小計	40	120	0	1440	208	170	221	108
水田、野菜、果樹、花き経営学科共通必修科目合計（①、②、③、④）			102	1,005	30	1530	350	282	336	218
専門科目	畜産経営学科	畜産概論	1	15			7			
		家畜育種学	1	15				7		
		家畜繁殖学Ⅰ	1	15				7		
		家畜繁殖学Ⅱ	2	30					14	
		家畜栄養学	1	15		7				
		家畜衛生学	1	15					7	
		畜産環境保全	1	15					7	
		家畜解剖生理学	1	15		7				
		家畜解剖実験	1		30	14				
		先進農家等留学研修	5			225	44			
		畜産経営研修	2			90	10	12	19	4
		畜産経営実習	25			1125	132	138	188	104
		乳用牛・肉用牛概論	2	30		14				
		飼料作物	1	15						7
		食品製造演習	2	30			14			
		乳用牛飼養管理技術応用	2	30			14			
肉用牛飼養管理技術応用										
	乳用牛経営	1	15					7		
	肉用牛経営									
⑤ 小計			50	255	30	1440	235	192	235	122
畜産経営学科必修科目合計（①、②、⑤）			102	1005	30	1530	348	284	343	211

履修科目 （必修科目 102 単位、自由選択科目 5 単位の合計）	107	1065	30	1575	660	576
--------------------------------------	-----	------	----	------	-----	-----

キ 非常勤講師一覧

科目		講師名	所属・職・機関
共通教養科目	全学科共通	化学基礎	廣谷岳人 ベスト学院
		国語表現Ⅰ	穴沢えり ベスト学院
		国語表現Ⅱ	穴沢えり ベスト学院
		国語表現Ⅲ	阿部光二 ベスト学院
		体育	水野純子 メディカルフィットネスさくら

		科目	講師名	所属・職・機関
共通専門科目	全学科共通	農業経営演習	宗像春望	会計コンサルタント
		農業法規	本庁職員	福島県庁
		農業関連産業論	担当職員	福島県林業研究センター 福島県農業協同組合中央会 福島県農業共済組合
		簿記概論	宗像春望	会計コンサルタント
		農業情報処理基礎	志間幸恵	シブスパソコンスクール
		農業情報処理応用	志間幸恵	シブスパソコンスクール
		農業情勢Ⅱ	本庁職員	福島県庁
		土壌肥料概論	諸橋一信	諸橋肥料店
		マーケティング論	横尾恵美	しゅふコミ代表
		マーケティング演習	横尾恵美	しゅふコミ代表
		食品製造	郡司尚子	郡山女子大学准教授
		(自由選択) 簿記検定講座	宗像春望	会計コンサルタント
		(自由選択) 毒物・劇物取扱解説	高山博英	元県職員
	専門科目	作物保護	草野憲二	福島県植物防疫協会
		環境保全と農業	谷口崇至	AW エンジニアリング代表取締役社長
		農産物流通	久野雅己	株式会社ソーシャルスピーカー代表取締役
		フラワー装飾演習	中村良美	フラワースタジオ POCO A POCO 主宰
		家畜育種学	國分洋一	元県職員
		家畜栄養学	土屋友充	元県職員
		家畜衛生学	担当職員	中央家畜保健衛生所
		家畜解剖生理学	二瓶由佳	元県職員
		家畜解剖実験	担当職員	中央家畜保健衛生所
		飼料作物	土屋友充	元県職員

ク 教育行事

月	日	行 事 名
令和 5年 4月	7日	始業式
	10日	入校式
	11日	学生健康診断・オリエンテーション
	28日	防災避難訓練
	5月23日～24日	東日本親善球技大会(福島県主催)
	17日	卒業論文設計発表会
	6月 7日	植付け祭
	6月21日～ 7月 5日	先進農家等留学研修(前期)
	16日	直売実習 (1回目)
	7月20日	直売実習 (2回目)
	21日	学校記念日
	15日	オープンキャンパス (1回目)
	23日	オープンキャンパス (2回目)
	8月 3日	オープンキャンパス (3回目)
	9日	直売実習 (3回目)
	9日～21日	夏期休業
	24日～ 9月 7日	先進農家等留学研修(後期)
	9月 6日	毒物劇物取扱者資格試験
	20日	直売実習 (4回目)
	26日～29日	前期試験 (1・2学年)
	10月 3日	後期授業開始
	22日	櫛隆祭
	11月 1日	直売実習 (5回目)
	16日	校内意見発表会 (1学年)
	7日	防災避難訓練
	17日	収穫祭、球技大会(学生自治会、寮自治会主催)
	19日	日商簿記検定試験
	22日	直売実習 (6回目)
	12月15日	卒業論文発表会
	16日～ 1月9日	冬季休業

月 日	行 事 名
令和 6年 1月17日～18日	東日本農業大学校等プロジェクト発表・交換大会
23日～24日	後期試験（2学年）
23日～ 2月22日	家畜人工授精に関する講習会
2月14日～15日	後期試験（1学年）
19日～26日	海外農業研修（タイ25日まで、ニュージーランド26日まで）
25日	日商簿記検定試験
3月 1日	卒業記念講演会 （講師：斎藤恭紀氏「農業に及ぼす気象の影響」）
8日	卒業式
11日	終業式
12日～ 4月 8日	春期休業

ケ 各種表彰者		
月 日	行事名	結 果
		最優秀
		「農業の未来と夢」 果樹経営学科 1 年 樺山 元紀
		優秀1席
令和5年 11月16日	校内意見発表会	「日本の農業の未来」 果樹経営学科 1 年 小水 大晟
		優秀2席
		「農業王に俺はなる」 野菜経営学科 1 年 白坂 光太郎
		最優秀賞
		「我が家の牧草地における生産性の向上に向けた管理方法の検討」
		畜産経営学科 2 年 佐藤 颯柊
		優秀賞
令和5年 12月15日	校内卒業論文発表会	「肥育牛における乾燥ビール粕給与が産肉性に及ぼす影響」
		畜産経営学科 2 年 諸根 こはる
		優秀賞
		「矢吹町におけるワキシコーンの栽培」
		水田経営学科 2 年 坂本 峻太郎
		銀賞
令和6年 2月 9日	第34回ヤンマー学生 懸賞作文	「私の農業」 野菜経営学科 1 年 櫛田 心音
		銅賞
		「農業王に俺はなる」 野菜経営学科 1 年 白坂 光太郎

コ 卒業生の進路状況		
	進 路	農業経営部
就 農	自家	5
	法人	16
	研修	0
	小計	21
非就農	農協	2
	農業団体	1
	農業関連産業	12
	他産業	4
	公務員	4
	進学	1
	小計	24
未定		0
合 計		45

(3) 研修部の取組

ア 研修実施状況

就農研修は就農希望者や新規就農者の技術習得を目的として初級・中級コースを設け、受講希望者のレベルに応じた体系により実施した。

長期就農研修は就農希望者が就農後の農業経営を早期に安定できるよう、1年を単位とした実習主体の研修として実施した。

初級、中級、長期研修の実施により、初級1名、長期就農研修8名(内果樹6名)計9名が新規就農した。

また、「令和5年度福島特定原子力施設地域交付金事業」を活用し、新たにパイプハウス1棟を増設して長期就農研修生受入れ強化を図った。

農産加工研修は、加工初心者を対象とした「基礎コース(全4回継続参加)」を年2回開催し農産加工に必要な講義を実施した。実際に農産加工品開発を行っている方を対象に「応用コース」を開催し、より高いレベルの商品開発につなげた。

農業機械研修では、大型特殊免許及びけん引免許(いずれも農耕車限定)の取得支援を目的とした「安全運転技術総合コース」、農業機械の基本操作や点検整備、ロボット技術や情報通信技術(ICT)を活用したスマート農業を学ぶ「技術向上コース」を実施した。

また、農業者が抱える課題解決のため、本校の施設・設備を活用する施設利用研修については就農・農産加工・農業機械の各種研修体系の中に組み入れて実施するとともに、農作業安全に関する研修については現地の要請に応じ実施した。

イ 研修実績

(ア) 就農研修

a 初級

名 称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a)春コース	[講義]・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習]・栽培管理実習	就農予定(希望)者 15名	15名	5~7月(5日) (日曜日開催)
(b)秋コース	[講義]・栽培のための基礎知識 ・営農に係る基礎知識 [実習]・栽培管理実習		15名	8~11月(5日) (日曜日開催)

b 中級

名 称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 中級	[講義、演習、見学] 必修科目：土壌肥料 農業経営、 農業機械、鳥獣害対策 選択科目：水稻、野菜、果樹、 花き、畜産、有機農業	就農予定者 及び就農者 15名	15名	5~8月 (必修科目10日) (選択科目各4日) (平日開催)

c 長期就農研修

名 称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間
(a) 長期就農研修	[実習、講義] 栽培管理実習を柱にした1年間の研修 研修科目： 施設野菜、露地野菜、果樹、 花き、水稻・畑作物、畜産、 有機栽培 研修場所： 農業短期大学校、果樹研究所、 本部、会津地域研究所、 浜地域研究所	福島県内で農業により生計を立てることを目標とし、就農前に農業の知識及び技術の習得を目指す者 21名(左記の研修場所における総受入れ人数)	10名 内訳 農業短大 3名 果樹研 7名	令和5年4月 ～ 令和6年3月

d 施設利用研修					
名称		主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 令和5年度地場産物活用のための作物栽培研修	講義 実習	学校園の運営手法、 施肥量の計算 施肥、畝立て、播種 作業及び育苗、竹プラ ンター作り	県北・相双・いわ き地区の市町村 立小・中学校教 諭・栄養教諭	9名	8/9～8/10(2日)

e 研修用ハウス増設				
事業名		主な内容	事業量	事業費
農業短期大学校研修用ハウス整備事業		研修希望者の多い施設栽培の強化を図るため、環境制御装置等を実装した栽培施設を整備する。	5.4×18m 一式(1棟)	11,990,000

(イ) 農産加工研修

a 基礎(春コース)					
名称		主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 営業許可と食品表示		・衛生管理、食品営業許可 ・栄養表示	農産物加工 販売予定者 15名	15名	5/10(1日)
(b) 殺菌と包装		・食品の殺菌方法 ・6次化に関する補助事業等の紹介			5/24(1日)
(c) 瓶詰め・袋詰め食品		・瓶詰め・袋詰めの加工方法			6/ 7(1日)
(d) 事例紹介		・優良農産加工者による事例紹介 ・加工所運営			6/21(1日)

b 基礎(秋コース)					
名称		主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 営業許可と食品表示		・衛生管理、食品営業許可 ・栄養表示	農産物加工 販売予定者 15名	11名	10/ 4(1日)
(b) 殺菌と包装		・食品の殺菌方法 ・6次化に関する補助事業等の紹介			10/18(1日)
(c) 瓶詰め・袋詰め食品		・瓶詰め・袋詰めの加工方法			11/ 1(1日)
(d) 事例紹介		・優良農産加工者による事例紹介 ・加工所運営			11/15(1日)

c 応用					
名称		主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 加工技術応用		・新商品づくり ・食品の殺菌方法	農産物加工 販売者15名	13名	8/30(1日)

d 施設利用研修					
名称		主な内容	対象者	受講者数	期間(日数)
(a) 農産加工		・福島県農産物加工者連絡協議会全体研修	福島県農産物加工者 連絡協議会	22名	4/26(1日)
		・アスパラガス加工	福島県農林企画課	3名	5/ 1(1日)
		・中華ちまきの冷凍販売	福島県農産物加工者 連絡協議会	4名	6/14(1日)
		・福島県農産物加工者連絡協議会全体研修	福島県農産物加工者 連絡協議会	10名	7/26(1日)
		・令和5年度地場産物活用のための作物栽培研修	県北・相双・いわき地 区の市町村立小・中・ 学校教諭・栄養教諭	9名	8/ 9(1日)

名称	主な内容	対象者	受講者数	期間(日数)
(a) 農産加工	・ トマトのレトルト加工	鮫川村	1名	9/ 4(1日)
	・ イチゴのドライ加工	鮫川村	1名	1/12(1日)
	・ ゆず加工	福島県農産物加工者 連絡協議会	5名	2/ 8(1日)
	・ 浅漬けの急速冷凍	株式会社デリー開発 福島	2名	2/13(1日)
	・ カレーとスープのレトルト加工	NP0 法人クローバー 福祉会	2名	2/20(1日)
	・ りんごのドライ加工	福島県農産物加工者 連絡協議会	1名	2/13(1日)
	・ 福島県農産物加工者連絡協議会 全体研修	福島県農産物加工者 連絡協議会	22名	3/13(1日)

(ウ) 農業機械研修

a 安全運転技術総合コース

名称	主な内容	対象者及び 定員	受講 者数	期間(日数)
(a) けん引 操作 (農耕車限定)	・ けん引免許(農耕車限定) 取得に向け、公道を安全に運転ができるための技術習得	農業者等 各9名	6名 8名 7名 8名 9名	第1回 5/23～ 5/25(3日) 第2回 6/ 6～ 6/ 8(3日) 第3回 6/27～ 6/29(3日) 第4回 7/ 4～ 7/ 6(3日) 第5回 10/ 3～10/ 5(3日)
(b) 大型特殊 操作 (農耕車限定)	・ 大型特殊免許(農耕車限定) 取得に向け、公道を安全に運転ができるための技術習得	農業者等 各9名	9名 9名 10名	第1回 10/17～10/19(3日) 第2回 10/31～11/ 2(3日) 第3回 12/ 4～12/ 6(3日)

b 技術向上コース

名称	主な内容	対象者及び 定員	受講 者数	期間(日数)
(a) 初めての 刈払機	・ 刈払機の基礎知識 ・ 基本操作の習得	農業者等 各8名	7名 1名	第1回 5/17 (1日) 第2回 8/24 (1日)
(b) 初めての 農機整備	・ 農業機械(トラクタ、刈払機 管理機)の点検整備	農業者等 各8名	4名 9名	第1回 9/ 6 (1日) 第2回 1/17 (1日)
(c) スマート 農業	・ ドローンの基本知識及び飛行 操作体験 ・ ロボット通信技術及び情報 通信技術(ICT)の基礎 知識	農業者等 10名	6名	12/13～12/14(2日)
(d) 初めての アーク溶接	・ アーク溶接の基礎知識 ・ 基本操作の習得	農業者等 8名	5名	2/ 6～ 2/ 7(2日)
(e) トラクタ 操作技術 向上	・ トラクタの基本操作 ・ ロータリ耕 ・ 点検整備	農業者等 各8名	8名 8名	第1回 11/ 8～11/ 9(2日) 第2回 11/21～11/22(2日)
(f) コンバインの 整備点検	・ 整備点検技術の習得	農業者等 各10名	6名 8名	第1回 8/30(1日) 第2回 8/31(1日)

c 農作業安全推進コース

名称	主な内容	対象者及び定員	受講者数	期間(日数)
(a) 現地支援研修 現地で学ぶ農 作業安全	・農作業事故の現状 ・農機械の安全対策	矢吹町・弥栄地区	25名	6/ 4(1日)
		JA夢みなみ石川地区	30名	9/21(1日)
		福島・川俣地区新規就農者	12名	11/17(1日)
		県中農林(多面的機能支払 交付金)	192名	11/24(1日)
		相双農林(多面的機能支払 交付金)	300名	11/30(1日)
		県北農林(福島富女子会)	16名	1/ 9(1日)
		JA福島さくらたむら地区	34名	2/21(1日)
		郡山市農業委員会	30名	2/27(1日)
		三春町	30名	3/15(1日)

d 施設利用研修

名称	主な内容	対象者	受講者数	期 間(日数)
(a) 農業機械	・農作業安全	郡山市園芸振興セン ター研修生	5名	5/16(1日)
	・専門技術向上研修	普及指導員	15名	5/22(1日)
	・トラクタ基本操作	女性農業者	7名	11/14(1日)
	・トラクタ免許	郡山市園芸振興セン ター研修生	2名	11/28～11/29(2日)
	・けん引運転免許	郡山市園芸振興セン ター研修生	3名	1/24～ 1/26(3日)
	・農作業安全	須賀川農業普及所	8名	2/ 1(1日)
	・けん引運転免許	みずほ郡山RC	5名	2/13～ 2/15(1日)

2 福島県農業総合センター農業短期大学校運営会議の開催

大学校が適切かつ円滑に運営されるよう、大学校の教育・研修等の基本的事項について、県内各層の意見を徴し、助言を求めるため設置。令和2年度からは学校教育法に基づく学校関係者評価委員会を兼ねる。

(1) 農業短期大学校運営会議の開催

開催日	開催場所	テ ー マ
令和6年 2月28日	農業総合センター 農業短期大学校教養ホール	1 令和5年度の教育実績 2 学校評価 3 令和6年度の教育内容 4 学生の活動紹介（映像による学校・学科紹介） 5 意見交換

(2) 運営会議委員（敬称略）

氏名	所属・役職名等
鈴木 光一	福島県指導農業士会 会長
中田 幸司	うつくしまふくしま農業法人協会 会長
鈴木 正洋	福島県農業会議 担い手・経営対策部長
紺野 明宏	福島県農業協同組合中央会 人材育成部長
菅野 雅敏	就農支援センター 所長
安田 修久	福島県高等学校教育研究会農業部会 部会長
新田 洋司	福島大学 教授
志間 幸恵	大学校外来講師
諸根 茂喜	農業短期大学校後援会 会長
小沢 充博	農業短期大学校同窓会 会長
竹内 孝重	農業担い手課 課長

V 食の安全・環境と共生する農業支援

1 安全農業推進部の業務実績

(1) 指導・有機認証課の業務

ア 農薬に関する業務

農薬取締法に基づき、農薬販売の届出受理、農薬販売者に対する立入検査等を実施した。このほか、農薬適正使用、航空防除等の指導を行った。

(ア) 農薬販売届の受理(令和6年3月31日現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
66	39	36	1,231

(イ) 農薬販売者立入検査(令和6年3月31日現在)

立入検査 延べ数	注意指導票による指導実件数							
		販 売 の 制限、禁 止	虚 偽 宣 伝 等 の 禁止	販 売 所 の届出	帳 簿 の 備付、記 載、保管	その他 (表示等)	指導延べ 件数計	左のうち 改善済み 件数
243	29	0	0	14	32	0	46	46

(ウ) 主な農薬適正使用指導記録

月 日	内 容	受講者数
7月6、7日	農薬危害防止講習会	260
11月20、21、30日	農薬適正使用アドバイザー認定・更新研修	76
11月20、21、30日	農薬管理指導士認定・更新研修	32

(エ) ゴルフ場の検査・指導

農薬使用実績に基づく適正使用確認件数	35
福島県ゴルフ場農薬安全使用指導要綱に基づく立入検査	10

(オ) 航空防除(無人航空機)に関する指導

無人ヘリ防除 実施面積	8,528.7ha(水稻 7,801.7ha、大豆 556.0ha、麦類 133ha、松 10ha、その他 28ha)
マルチローター計画 面積(殺虫剤 のみ)	4,864.9ha(水稻 4,447.9ha、大豆 393.8ha、麦類 4.4ha、野菜 11.9ha、松 6.9ha その他 0.1ha)
事故発生状況	0 件
指導対応状況	防除実施者等に対し、周辺住民等への事前情報提供、飛散防止、作業事故防止、 事故発生時の報告方法等について文書で周知し、併せて防除所のホームページ に情報を掲載した。

※小数点第2位を四捨五入しているため、合計が合わない場合がある。

(カ) 農作物病虫害防除指針掲載農薬登録変更内容の確認とホームページによる周知

防除指針掲載農薬の登録内容変更に関する情報	12 回
-----------------------	------

(キ) 農薬流通量調査

令和4年10月～令和5年9月までの期間(令和5農薬年度)を対象に、農薬卸売業者及びホームセンターから農薬販売量の報告を求め、県内の流通量を取りまとめた。

分 類	令和5農薬年度		令和4農薬年度	
	流通品目数	流通量 (t, kl)	流通品目数	流通量 (t, kl)
殺菌剤	293	773	299	794
殺虫剤	330	1,270	338	1,393
殺虫殺菌剤	180	902	174	915
除草剤	562	2,371	565	2,445
その他	139	4,417	145	4,742
合 計	1,504	9,733	1,521	10,288

※小数点第1位を四捨五入しているため、合計が合わない場合がある。

イ 農作物の野生鳥獣被害取りまとめ

令和4年4月～令和5年3月までの期間を対象に、各市町村から野生鳥獣による農作物の被害状況の報告を求め、県内の被害状況を取りまとめた。令和4年度の総被害面積は令和3年度の60.7%、総被害金額は令和3年度の85.0%となった。

分 類	令和4年度		令和3年度	
	被害面積(ha)	被害金額(千円)	被害面積(ha)	被害金額(千円)
鳥害	7.92	28,385	8.76	26,559
獣害	65.13	90,463	111.60	113,283
合計	73.05	118,848	120.36	139,842

ウ 肥料に関する業務

肥料の品質の確保等に関する法律に基づき、知事登録肥料の登録申請等受理及び保証値の分析、指定混合肥料・特殊肥料・肥料販売の届出受理、生産業者等への立入検査及び収去を実施した。

(ア) 知事登録普通肥料 登録・届出受理(令和6年3月31現在)

新規登録	登録更新	変更届出	失効届出	届出件数
3	8	5	2	47

(イ) 指定混合肥料届出受理(令和6年3月31現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	届出件数
0	0	10	17

(ウ) 特殊肥料生産・輸入届出受理(令和6年3月31現在)

	生産(輸入)業者届出	変更届出	廃止届出	届出件数
生産	44	28	56	684
輸入	0	0	0	11

(エ) 肥料販売業務開始届出受理(令和6年3月31現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	有効届出数
43	92	55	1,122

(オ) 肥料生産・販売事業場立入検査(令和6年3月31現在)

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
84	15	表示票、帳簿、届出内容(生産業者) 内容成分(収去肥料)

(カ) 肥料入荷量調査

調査対象期間は、令和 4 年 6 月～令和 5 年 5 月までとした。

総入荷量は 69,658t で、前年比 74%であった。

(t)

窒素質	りん酸質	加里質	複 合	石灰質	有機質	その他	指定混合
2,333	2,362	1,618	15,223	7,410	1,389	3,214	23,829

(キ) 肥料生産数量調査

令和 5 年 1 月～12 月までの 1 年間を対象に、肥料の生産数量を調査し取りまとめた。

項 目	知事登録肥料	指定混合肥料	特殊肥料	輸入特殊肥料
事業者数	19 (13)	6 (3)	528 (430)	6 (1)
銘柄数	49 (34)	27 (9)	625 (490)	11 (1)
生産数量 (t)	2,469	495	209,835	20

()内は生産・輸入実績があるもの

エ 飼料に関する業務

飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律に基づき、販売届の受理や業者への立入検査を実施した。

(ア) 飼料販売届出受理(令和 6 年 3 月 31 現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	販売者総数
3	17	3	56

(イ) 飼料添加物販売届出受理(令和 6 年 3 月 31 現在)

新規届出	変更届出	廃止届出	販売業者総数
0	8	0	11

(ウ) 飼料製造・販売事業者立入検査(令和 6 年 3 月 31 現在)

立入検査件数	収去・分析	主な検査・指導事項
54	10	・表示票、帳簿、届出事項、重量検査(製造業者) ・BSE 対応ガイドライン、有害物ガイドライン及び食品残さガイドライン等の遵守状況 ・栄養性及び安全性(収去飼料)

オ 有機認証に関する業務

日本農林規格等に関する法律(JAS 法)に基づき、登録認証機関として有機農産物生産行程管理者の認証業務を実施した。

(ア) 業務経過

月 日	内 容
4 月 6 日、8 月 25 日、10 月 26 日、12 月 7 日	認証書交付式
4 月 13 日	有機認証検査員委任状交付式及び第 1 回認証業務担当者会議
6 月 15 日	第 1 回認証業務講習会(受講者 25 名)
9 月 29 日	格付実績及び面積報告(農林水産省へ)
10 月 4 日	第 2 回認証業務担当者会議
10 月 17 日	第 1 回公平性委員会
11 月 1 日、2 日	有機 JAS 指導員研修(基礎研修)
11 月 2 日	FAMIC による実地調査の立会対応(1 回目)
11 月 30 日	登録認証機関内部監査
12 月 6 日	第 2 回認証業務講習会(受講者 28 名)
1 月 31 日	FAMIC による実地調査の立会対応(2 回目)
2 月 14 日	第 2 回公平性委員会
2 月 19 日、22 日	認証生産行程管理者全体研修会(22 日は書面開催)
2 月 22 日	第 3 回認証業務担当者会議

(イ) 認証状況 (令和 6 年 3 月 31 日現在)

申請受理件数	2 (150)	
受理後自ら申請を取り下げた件数	0 (4)	
新たな認証生産行程管理者数	4 (136)	
認証しなかった件数	0 (8)	
認証を取り消した件数	0 (2)	
認証を自ら取り下げた件数	3 (76)	
認証生産行程管理者数	58	個人 55、組織 3、農家総数 64
認証ほ場面積(令和 4 年度) (a)	7,468	水田 5,598、畑 1,704、その他 166

() 内は業務開始からの累計

(ウ) 有機農産物格付実績(kg)(令和 4 年度)

野菜	17,181.3
果樹	832.5
米	123,503.6
小麦	0.0
そば	4,792.5
大豆	0.0
その他豆類	12.8
雑穀	0.0
きのこ類	258,069.0
植物種子 (エゴマ)	0.0
香辛料 (ハーブ)	219.0
計	404,610.7

令和 5 年 9 月に農林水産大臣へ報告

(2) 発生予察課の業務

ア 病害虫発生予察事業

植物防疫法に基づき、病害虫の発生予察・診断、防除対策情報提供等を実施した。

(ア) 普通作物

水稻は定点調査 19 か所、巡回調査 280 ほ場、麦類は定点調査 3 か所、巡回調査 36 ほ場、ダイズは巡回調査 36 ほ場において病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、予察灯 1 か所、フェロモントラップ延べ 24 か所で害虫の発消長を調査した。

(イ) 果樹

リンゴで定点調査 8 か所、巡回調査 32 ほ場、モモで定点調査 4 か所、巡回調査 19 ほ場、ナシで定点調査 5 か所、巡回調査 25 ほ場、ブドウは定点調査 3 ほ場、カキは巡回調査 7 ほ場で、病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ延べ 22 か所、カメムシ越冬量調査 2 か所で害虫の発消長を調査した。

(ウ) 野菜・花き

野菜は、キュウリで定点調査 5 か所、巡回調査 9 ほ場、トマトで定点調査 5 か所、巡回調査 7 ほ場、イチゴで定点調査 5 か所、巡回調査 16 ほ場のほか、令和 5 年度からアスパラガス、ピーマン、ネギ、ナス、ホウレンソウの巡回調査及び定点調査と、カンショ、パレイシヨ、ダイコンの定点調査を令和 5 年度から実施した。花きは、キクで定点調査 4 か所、巡回調査 7 ほ場、リンドウで巡回調査 6 ほ場において、病害虫の発生状況を定期的に調査した。また、フェロモントラップ延べ 20 か所で害虫の発消長を調査した。

(エ) 情報の提供

病害虫発生予察情報を延べ 15 回発表し、各作物の防除対策資料として提供した。また、モモハモグリガ、水稻斑点米カメムシ類、野菜類・花き類ハスモンヨトウの注意報とトマトキバガの特殊法を発表した。さらに、麦類赤かび病で 1 回、水稻斑点米カメムシ類で 1 回、リンゴ褐斑病で 2 回、モモせん孔細菌病で 2 回、ナシ黒星病で 1 回、野菜類トマトキバガで 1 回、花き類クロゲハナアザミウマで 1 回、野菜類・花き類ハスモンヨトウで 1 回の計 10 回の防除情報を発表した。このほか、ホームページに各作物の病害虫発生状況、防除対策情報、BLASTAM、予察灯やフェロモントラップのデータなどの防除情報を提供した。

(オ) 国への報告事務

病害虫発生予察現況報告(13 回)、ウンカ類発生現況報告(随時)、各農作物病害虫発生面積報告(10 月、3 月)、その他病害虫発生情報等を報告した。

(カ) 病害虫防除員

農家 77 名、農協職員 41 名を委嘱し、予察灯やフェロモントラップの調査及び病害虫発生状況情報を定期的に収集した。

イ 病害虫診断同定

令和 5 年度の依頼件数は、50 件であった。

診断・同定の結果	病害	19 件(糸状菌 14 件、ウイルス 3 件、細菌 2 件)
	虫害	15 件(カメムシ目 3 件、アザミウマ目 2 件等)
	その他	16 件(原因不明 16 件)

ウ 侵入調査事業

重要病害虫の侵入に伴う農業生産の影響を防止するため、県内の未発生地域への重要病害虫の侵入を早期に発見し、速やかに的確な防除を実施できるよう、対象病害虫の発生を調査する。

(ア) 侵入警戒調査

a イネミイラ穂病発生状況調査

水稻の予察ほ場 3 か所において、国内では未発生のイネミイラ穂病の発生の有無を 9 月に 1 回調査した。イネミイラ穂病は、いずれの調査ほ場においても認められなかった。

b 火傷病発生状況調査

果樹(リンゴ、ナシ)の予察ほ場、定点調査 5 か所において、国内では未発生の火傷病の有無を 5 月、10 月に調査した。火傷病は、いずれの調査ほ場においても認められなかった。

c チチュウカイミバエ発生状況調査

果樹(リンゴ、ナシ)の予察ほ場、定点調査 5 か所において、誘引剤(トリメドルア剤)をスタイナー型トラップに入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。チチュウカイミバエは、いずれの調査ほ場においても誘殺されなかった。

d コドリガ発生状況調査

果樹(リンゴ、ナシ)の予察ほ場、定点調査 8 か所において、誘引剤(コドレルア剤)をジャクソン型トラップに入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。コドリガは、いずれの調査ほ場においても誘殺されなかった。

e ミカンコミバエ種群発生状況調査

果樹(リンゴ、ナシ)の予察ほ場、定点調査 5 か所において、誘引剤(メチルオイゲノール及びキュウラル混合剤)をスタイナー型トラップに入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。ミカンコミバエ種群は、いずれの調査ほ場においても誘殺されなかった。

f クインスランドミバエ発生状況調査

果樹(リンゴ、ナシ)の予察ほ場、定点調査 5 か所において、誘引剤(メチルオイゲノール及びキュウラル混合剤)をスタイナー型トラップに入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺数を調査した。クインスランドミバエは、いずれの調査ほ場においても誘殺されなかった。

g ウリミバエ発生状況調査

果樹(リンゴ、ナシ)の予察ほ場、定点調査 5 か所において、誘引剤(メチルオイゲノール及びキュウラル混合剤)をスタイナー型トラップに入れ、4~10 月まで月 1 回誘殺を調査した。ウリミバエは、いずれの調査ほ場においても誘殺されなかった。

h ウメ輪紋ウイルス(*Plum pox virus*)の発生状況調査

調査地点は県内 4 か所とし、苗生産園(母樹園)2 か所(福島市、伊達市)と本病が国内ではほぼウメでのみの発生であることから、ウメ生産地のある県中農林事務所農業振興普及部及び会津農林事務所会津坂下農業普及所管内にそれぞれ 1 か所を設定した。

苗生産園(母樹園)の調査は、ほ場で目視による病徴確認を行った後、病徴の有無によらず 1 か所当たり 5 樹を選定し、1 樹から成葉 5 枚以上を採取して横浜植物防疫所に検体を送付し、検定を依頼した。生産園地の調査は、苗生産園(母樹園)と同様に目視調査及び試料採取後、イムノクロマト法によるウイルス検定を行った。

目視調査では、いずれの調査ほ場でも疑似症状は認められなかった。ウイルス検定の結果、すべての検体が陰性であり、本県でウメ輪紋ウイルスの発生は確認されなかった。

i *Xylella fastigiosa* 発生状況調査

果樹(ブドウ、ナシ)の定点調査 4 か所において、国内では未発生の *Xylella fastigiosa* による症状の有無を 7 月に調査した。*Xylella fastigiosa* による症状は、いずれの調査ほ場においても認められなかった。

j トマトキバガ発生状況調査

県内トマト及びミニトマトほ場 6 か所において、2 か所(田村市、南会津町)は令和 5 年 5 月から、4 か所(矢吹町、喜多方市、猪苗代町、相馬市)は同 8 月からフェロモントラップを設置し、10 日おきに調査を行った。また、発生ほ場においては、近隣のトマトハウス内を目

視調査し、寄生及び被害について確認した。令和5年8月9日に、会津地域にて県内初の誘殺を確認し、令和5年8月22日に特殊報第1号を発表した。その後、9月に県内各所で誘殺が相次いで確認され、9月21日に県中地域のトマトハウスを目視調査した結果、トマトキバガ幼虫の寄生と葉の食害が確認された。

k トマト関連センチュウ類発生状況調査

侵入警戒有害動植物であるバナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、カンキツネモグリセンチュウの3種について、発生拡大を未然に防ぐため、発生状況について調査を実施した。定点調査3か所(田村市、中島村、南会津町)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回による目視調査及び農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

バナナネモグリセンチュウ、コロンビアネコブセンチュウ、カンキツネモグリセンチュウの3種による被害は確認されなかった。

l トマト関連ウィロイド類発生状況調査

ウィロイド類の侵入警戒有害動植物であるCLVd、PCFVd、TCDVd、TASVd、PSTVdの5種について、定点調査3か所(田村市、中島村、南会津町)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回による目視調査及び農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

CLVd、PCFVd、TCDVd、TASVd、PSTVdの5種による被害は確認されなかった。

m トマト関連ウイルス類発生状況調査

ウイルス類の侵入警戒有害動植物であるPepMV、ToBRFV、ToMMV、ToLCNDVの4種について、定点調査3か所(田村市、中島村、南会津町)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回による目視調査及び農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。

PepMV、ToBRFV、ToMMV、ToLCNDVの4種による被害は確認されなかった。

n スイカ果実汚斑細菌病の発生状況調査

県内夏秋露地キュウリ主要産地の5ほ場を選定し、2023年6~9月に月1回調査した。1ほ場あたり任意の100果について、発病の有無を確認した。スイカ果実汚斑細菌病の発生は確認されなかった。

o ジャガイモがんしゅ病発生状況調査

定点調査2か所(二本松市)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員による貯蔵調査を実施した。ジャガイモがんしゅ病の発生は確認されなかった。

p *Thecaphora solani* 発生状況調査

ジャガイモの病害 *Thecaphora solani* の発生状況について定点調査2か所(二本松市)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員による貯蔵調査を実施した。*Thecaphora solani* の発生は確認されなかった。

q コロラドハムシ発生状況調査

ジャガイモのコロラドハムシの発生状況について、定点調査2か所(二本松市)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。コロラドハムシの発生は確認されなかった。

r ジャガイモシストセンチュウ

定点調査2か所(二本松市)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。ジャガイモシストセンチュウの発生は確認されなかった。

(イ) 緊急防除等対象病害虫調査

a キウイフルーツかいよう病のPsa3系統の発生状況調査

キウイフルーツ生産園地のある農林事務所農業振興普及部及び農業普及所のうち2部所に対し、各2園地程度を選定して目視による病徴確認又は生産者への聞き取り調査を依頼した。疑似症状が確認された際は現地調査を行い、発生程度を確認した後、農業総合センター果樹研究所に検体を持ち込み、病原細菌の同定を依頼した。

会津若松市、大熊町及び檜葉町の計3園地で調査が行われたが、発生は確認されなかった。

b クビアカツヤカミキリの発生状況調査

県境に近い県内4か所(白河市、西郷村、いわき市2か所)で、調査時期はフラスの確認しやすい4月上旬及び夏季に調査した。1か所当たりサクラ100樹程度について、フラス及び寄生(成虫、幼虫)の有無を確認した。疑わしいフラスを確認した場合は、夏季の調査時に成虫の有無を再確認した。

一部の樹体にフラスが確認されたが、カミキリムシ類によるものではなかった。また、本種をはじめカミキリムシ類の寄生は確認されなかった。

c ジャガイモシロシストセンチュウ発生状況調査

定点調査2か所(二本松市)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。ジャガイモシロシストセンチュウの発生は確認されな

かった。

d テンサイシストセンチュウ発生状況調査

定点調査1か所(磐梯町)において、国が定めた侵入調査マニュアルに基づき、巡回調査及び農家病害虫防除員によるほ場調査を実施した。テンサイシストセンチュウの発生は確認されなかった。

エ ベトナム向け輸出なし検査

植物防疫法に基づき、本県より輸出されるベトナム向けなしについて、海外への病害虫の侵入を防止するため、「ベトナム向け輸出なし検査実施要領」に基づき輸出検査を行った。

病害虫防除所職員(5名)が横浜植物防疫所長より栽培地検査補助員を委嘱され、輸出対象のなし生産園地(郡山市、いわき市)について補助員検査を実施した。また、横浜植物防疫所の植物防疫官が同園地について実施する栽培地検査の補助を行った。

オ 主要病害虫の発生状況

(ア) 水稲

a いもち病

本田での葉いもちの初発確認は、中通り地方で7月下旬、浜通り地方で7月上旬だった。会津地方では8月上旬まで発生が確認されなかった。高温、少雨の影響によって発病が抑制され、8月上旬の発生ほ場割合は平年より低く、すべて微発生だった。

穂いもちの初発確認日は、全域で平年並であった。9月上旬の発生ほ場割合は平年より低く、発病程度も低かった。

b 紋枯病

紋枯病の初発確認日は、全域で平年並であった。発生ほ場割合は少雨の影響で平年並～低く推移したが、一部の常発地域で高温の影響によって病斑が上位葉へ進展し、穂枯れに至った株も確認された。

c 稲こうじ病

9月上旬の発生ほ場割合は、全域で平年より低く、発病程度も低かった。

d ごま葉枯病

9月上旬の発生ほ場割合は、中通り地方で平年よりやや低く、浜通り地方で平年並、会津地方では発生が確認されなかった。

e イネミズゾウムシ

6月下旬の発生ほ場割合は、全域で平年並～高く、中通り地方では被害程度の高いほ場も確認された。

f イネドロオイムシ(イネクビホソハムシ)

6月下旬の発生ほ場割合は、中通り地方、浜通り地方で平年並、会津地方では発生が確認されなかった。チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認されている地域では、薬剤の置き換えが進んでいる。

g ニカメイガ(ニカメイチュウ)

幼虫の発生ほ場割合は、全域で平年並か低かった。

h フタオビコヤガ(イネアオムシ)

8月の幼虫の発生ほ場割合、発生程度ともに平年より低く、すくい取りでも発生量は平年より少なかった。

i イナゴ類

発生量は平年よりやや少なく推移し、8月下旬の発生ほ場割合、被害程度はともに平年より低かった。

j 斑点米カメムシ類

すくい取り調査では、畦畔雑草では平年より発生地点割合、発生程度が平年より高く、注意報を発表した。本田では発生地点割合、発生程度とも平年並～やや高く推移した。坪刈り調査における斑点米混入率は平年より高かった。

k イチモンジセセリ(イネツトムシ)

8月下旬の幼虫の発生ほ場割合は、全域で平年より低く、発生程度も低かった。

(イ) ムギ類(令和5年産)

a 赤かび病

6月の発病穂率は、中通り地方で平年よりやや高く、浜通り地方で平年並、会津地方では発生が確認されなかった。

b 雪腐病類

会津地方の麦産地での根雪期間は平年並で、葉先が枯れた株はあったが、枯死面積率は平年より低かった。

(ウ) ダイズ

a 紫斑病

子実調査では、被害は中通り地方、浜通り地方で平年よりやや少なく、会津地方でやや多かった。

b ベと病

8月の発生ほ場割合は、中通り地方、浜通り地方で平年よりやや高かった。子実調査では、被害は全域で平年並～やや多かった。

c 吸実性カメムシ類

9月の払落し調査では、県全体で発生が平年より多かった。子実調査では、被害は全域で平年より多かった。

d フタスジヒメハムシ

9月の払落し調査では、払落し頭数は中通り地方、浜通り地方で平年並、会津地方で多かった。子実調査では、被害は中通り地方、浜通り地方で平年並、会津地方で多かった。

e マメシンクイガ

子実調査では、被害は全域で平年よりやや少ない～少なかった。連作初年目でも、連作ほ場が付近にあったことで被害が大きいケースが確認された。

f ウコンノメイガ

8月の幼虫による葉巻の発生程度は、全域で平年よりやや低い～低かった。

(エ) リンゴ

a 斑点落葉病

新梢葉での発生は、5月下旬から確認された。発生ほ場割合は、平年より高く推移したが、発生程度は低く推移し、総じて平年並の発生状況であった。

b 褐斑病

6月下旬から新梢葉での発生が確認され、県中・県南では10月まで発生ほ場割合は平年より高く推移し、会津では6月～9月まで平年より高く推移した。発病葉率の高いほ場では、早期落葉する事例も確認された。

c 腐らん病

5月下旬の発生ほ場割合は、平年よりやや高く、南会津で発生程度が高い傾向であった。

d 輪紋病

9月～11月の発生ほ場割合は、平年より高く推移し、県中・県南の発生程度は高い傾向であった。

e すず点病

中通りでは、9月上旬から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年並で推移した。

f シンクイムシ類

モモシンクイガ及びスモモヒメシンクイ果実被害は、8月から一部のほ場で確認された。

g アブラムシ類

新梢での寄生の発生ほ場割合は、5月は平年並、6月は平年より低かった。

h ハダニ類

6月から新梢葉の寄生が確認され、8月の発生ほ場割合は、平年よりやや高くなったものの、9月には平年より低くなった。

中通り北部ではナミハダニ、中通り南部及び会津ではリンゴハダニが優占する傾向にあった。

(オ) モモ

a セン孔細菌病

春型枝病斑の初発確認は、3月22日(参考調査「ゆうぞら」)であった。発生ほ場割合は、平年並であった。新梢葉での発生は5月下旬から確認され、発生ほ場割合は、平年よりやや低く推移したが、9月下旬には平年並になった。果実の発生ほ場割合は、平年よりやや低かった。

b シンクイムシ類

ナシヒメシンクイによる新梢の被害は、7月から確認され、発生ほ場割合は平年より高く推移した。

c モモハモグリガ

前年からの越冬量は、平年より多かった。

新梢葉の被害は、5月上旬から確認され、発生ほ場割合は、平年よりかなり高かった。その後一斉に防除が行われ、6月以降発生ほ場割合は低下していき、9月には被害葉が確認されなくなった。

d ハダニ類

新梢葉の寄生は、5月から確認された。7～8月は発生ほ場割合が急増し一部では寄生程度

の高いほ場も見られたが、9月には急減した。優占種は、クワオオハダニであったが、ナミハダニが確認される場合も多かった。

(カ) ナシ

a 黒星病

花そう基部病斑の初確認は、4月13日であった。5月の発生ほ場割合は、平年よりやや少なかった。新梢葉での発生は、5月下旬から確認された。発生ほ場割合は、平年並～少なく、果実での発生は6月下旬から確認された。発生ほ場割合は、平年並～少なく推移した。

b シンクイムシ類

ナシヒメシンクイによる果実被害は、8月下旬から確認され、平年よりやや多かった。

c ハダニ類

新梢葉の寄生は、県北では7月下旬に確認され、発生ほ場割合は、平年並～少なく推移した。県中・県南では、6月下旬に確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。浜通りでは、8月下旬から確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。

(キ) ブドウ

a 晩腐病

収穫直前の調査で、発生が確認されたほ場があった。

(ク) カキ

a 円星落葉病

新梢葉での発生ほ場割合は、平年並であった。

(ケ) 果樹共通

a 果樹カメムシ類

リンゴの果実被害は7月下旬に確認され、発生ほ場割合はやや少なかった。

モモ及びカキの果実被害は、確認されなかった。

ナシの果実被害は、8月下旬から確認され、7～9月の発生ほ場割合は、平年並であった。

(コ) 夏秋トマト

a 灰色かび病

6月から発生が確認され、8、9月の発生ほ場割合は高かったが、生育期間を通して平年並に推移した。8月以降、発病程度の高いほ場が多かった。

b 葉かび病

6月から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。9月に発生ほ場割合及び発病程度の高いほ場が多かった。

c すすかび病

8月から発生が確認され、発生ほ場割合は、例年並に推移した。

d かいよう病

8月から常発ほ場を中心に発生が確認された。

e オオタバコガ(タバコガ類)

フェロモントラップによる誘殺ピークは、平年並の9月上旬～中旬で、誘殺数は、中通り北部、会津、浜通り北部を中心に多発年(2018年)を大きく上回った。被害果の発生ほ場割合は、平年より高く推移した。

f コナジラミ類

発生ほ場割合は、平年並に推移した。9月に寄生程度の高いほ場が多かった。

g アザミウマ類

7月から被害果(白ぶくれ果)の発生が確認されたが、発生ほ場割合は、平年並に推移した。

(サ) 夏秋キュウリ

a ベと病

6月から発生が確認され、7月以降発病程度の高いほ場割合が多くなった。

b うどんこ病

7月から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。

c 炭疽病

7月から発生が確認され、以降発生量が増加した。発生ほ場割合は、平年よりやや高く推移した。

d 褐斑病

9月から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年よりやや低く推移した。

- e モザイク病
6月から発生が確認され、発生ほ場割合は、平年よりやや高かったが、その後は平年並に推移した。
- f アブラムシ類
春先の温暖な気象により、定植直後から寄生が確認された。また、夏場の高温少雨の影響により、栽培期間を通じて発生ほ場割合は、平年よりやや高く推移した。
- g ハダニ類
6月から寄生が確認され、夏場の高温少雨の影響により、8月の発生ほ場割合は、平年より高かった。

(シ) イチゴ(令和4年定植)

- a 灰色かび病
果実被害は1月から確認され、発生ほ場割合は平年並に推移した。
- b うどんこ病
1月の発生ほ場割合は、平年より高かったが、その後は平年よりやや低く推移した。
果実被害は、1月から確認された。
- c 土壌病害(炭疽病、萎黄病)
感染した苗の本圃への持ち込みにより定植直後から発生が確認され、補植しているほ場が確認された。
10月に一部発病程度の高いほ場が見られたが、その後の発生ほ場割合は、平年並に推移した。
- d アブラムシ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。2月以降気温の上昇により、発生程度の高いほ場がみられた。
- e コナジラミ類
定植直後から寄生が確認され、発生ほ場割合は、平年並に推移した。
- f アザミウマ類
花への寄生は10月から確認され、発生ほ場割合は平年並に推移したが、5月に発生程度の高いほ場が確認された。主要寄生種は、ヒラズハナアザミウマとミカンキイロアザミウマであった。
- g ハダニ類
1月まで発生ほ場割合は平年並だったが、2月以降は発生程度が高いほ場が見られた。主要寄生種は、ナミハダニであった。
- h ハスモンヨトウ
巡回調査では、寄生は確認されなかった。

(ス) キク

- a 白さび病
苗床からの持ち込みと思われる感染株が5月から確認された。発生ほ場割合は、6月はやや低かったが、7～8月は平年並に推移した。
- b アブラムシ類
春先の高温乾燥により有翅虫の飛来が早まり、5月の発生ほ場割合が高かった。6月の発生ほ場割合は、平年並であったが、7～8月にかけて寄生密度が下がらず、発生ほ場割合は、やや高かった。
- c ハダニ類
6月から寄生を確認した。発生ほ場割合は、平年並に推移した。主要寄生種はナミハダニであった。
- d オオタバコガ(タバコガ類)
6月から被害を確認し、発生ほ場割合は、6～7月は平年並に推移し、8月はやや低かった。
フェロモントラップによる誘殺数は、9月2半旬に会津地方(猪苗代町)、9月3半旬に浜通り北部(新地町)、9月半旬に県北地方(伊達市)で平年を大きく上回った。
- e アザミウマ類
定植直後の5月から寄生を確認した。栽培期間中の高温により、寄生密度は平年よりやや高く推移した。一部ほ場では、クロゲハナアザミウマの寄生が確認され、葉にシルバリング症状が見られた。
- f ナモグリバエ
5月から寄生を確認した。発生ほ場割合は、平年より低く推移した。

(セ) リンドウ(例年：2015 年～2022 年の 8 年間平均)

a 葉枯病

7 月から発生を確認した。発生ほ場割合は、例年並に推移した。

b 褐斑病

8 月に発生を確認した。発生ほ場割合は、例年並に推移した。

c ハダニ

6 月から寄生が認められた。発生ほ場割合は、6 月はやや低かったが、7～8 月は高く推移した。

d リンドウホソハマキ

6 月から成虫の飛来が確認された。発生ほ場割合は、栽培期間を通して平年より低かった。本種による葉潜入等の被害は 7 月から確認されたが、芯折れ被害は 9 月以降に確認された。

(3)分析課の業務

ア 農林水産物を対象とした緊急時環境放射線モニタリングの実施

災害対策基本法及び原子力災害対策特別措置法等に基づき、農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査を実施した。当課は、主務課が作成したサンプリング計画に基づき農林事務所等が採取した試料の放射性物質(放射性セシウム)を測定し、測定結果を原子力災害現地対策本部に報告した。

県が公表した農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング実施状況は、以下のとおりである。

農林水産物の緊急時モニタリング実施状況

令和6年3月31日

福島県環境保全農業課

【令和5年度(出荷確認検査)※1】

食品群	品目数	基準値 ^{※2} (100Bq/kg) 以下件数	基準値 ^{※2} (100Bq/kg) 超過件数	検査結果 件数	月 別											
					4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
玄米 ^{※3}	1	424	0	424	0	0	0	0	18	362	43	1	0	0	0	0
穀類(玄米除く)	4	165	1 ^{※7}	166	0	0	6	43	13	5	27	37	29	3	3	0
野菜	175	1,487	0	1,487	166	150	269	278	144	67	87	159	89	24	28	26
果実	34	386	0	386	0	2	32	30	55	130	81	37	15	2	2	0
原乳	1	96	0	96	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
肉類	5	1,460	0	1,460	164	138	105	138	91	123	149	145	93	120	90	104
鶏卵	2	160	0	160	14	13	13	14	13	13	14	13	13	14	13	13
はちみつ	1	39	0	39	0	10	28	0	0	0	0	1	0	0	0	0
牧草・飼料作物	-	596	0	596	2	62	102	31	69	91	80	85	74	0	0	0
水産物(海産) ^{※4※5}	165	3,341	0	3,341	284	215	412	185	154	261	319	398	344	109	384	276
水産物(河川・湖沼) ^{※5}	14	153	0	153	5	12	29	10	6	6	14	4	2	0	0	65
水産物(内水面養殖)	4	25	0	25	4	4	4	3	2	1	2	1	0	0	3	1
山菜(野生)	16	313	0	313	126	134	39	0	0	0	0	0	1	1	5	7
山菜(栽培)	1	79	0	79	72	6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
きのこ(野生)	42	88	0	88	0	0	0	7	5	6	57	13	0	0	0	0
きのこ(栽培)	25	473	0	473	28	19	34	26	16	45	208	59	17	9	7	5
果実(野生)	1	2	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
樹実類	3	18	0	18	1	0	0	0	0	3	3	6	4	0	1	0
合 計	494 ^{※6}	9,305	1	9,306	874	773	1,082	773	594	1,122	1,093	967	689	290	544	505

※1 出荷・販売用の品目を対象に実施した検査(出荷制限等品目の解除に向けた検査を除く)

※2 食品衛生法における食品の基準値(セシウム134、セシウム137の合算値) (一般食品)100Bq/kg、(牛乳)50Bq/kg

※3 玄米のモニタリング検査は、米の全量全袋検査を実施している9市町村を除く地域で実施

(令和5年度米の全量全袋検査実施9市町村:南相馬市、檜葉町、富岡町、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村、川俣町(旧山木屋村))

(米の全量全袋検査の結果:ふくしまの恵み安全対策協議会 <https://fukumegu.org/ok/contentsV2/>)

※4 ブワイガニ(オス)、ブワイガニ(メス)はそれぞれ1品目として集計

※5 シロザケ(筋肉)、シロザケ(精巣)、シロザケ(卵巣)は「海産」と「河川・湖沼」でそれぞれ1品目として集計

※6 シロザケ(筋肉)、シロザケ(精巣)、シロザケ(卵巣)は「海産」と「河川・湖沼」の区別なく合計ではそれぞれ1品目として集計

※7 基準値超過は、玄そば1件(交差汚染による超過)

●出荷制限等品目の解除に向けた検査(令和5年度公表)

食品群	品目数	基準値 ^{※2} (100Bq/kg) 以下件数	基準値 ^{※2} (100Bq/kg) 超過件数	検査結果 件数	月 別											
					4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
水産物(海産)	1	280	0	280	56	33	24	23	8	13	6	8	8	9	54	38
水産物(河川・湖沼)	3	85	0	85	13	7	9	11	20	8	4	10	0	0	0	3
山菜(野生)	1	54	0	54	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	54
きのこ(野生)	2	46	0	46	32	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0
合 計	7	465	0	465	101	40	33	34	42	21	10	18	8	9	54	95

●食品群の区分方法について

詳細は、「ふくしま復興情報ポータルサイト」の「これまでのモニタリング検査結果【年度別集計】」参照
(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/ps-monthly-report.html>)

イ その他検査の実施

出荷等制限品目の解除可否を判断する等、上記アの検査に資するため、県の自主的な検査を実施した。

検査名	検査実績	検査の概要
事前確認検査	1,121点	農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査の品目のうち、出荷等制限品目の解除可否を判断する検査等
その他の検査	134点	農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング検査の他に主務課が必要とし、環境保全農業課が認める品目等の検査

ウ 放射性物質測定技能試験

測定・分析の技能の維持及び向上のため、各種技能試験を実施した。

参加した精度管理	実施主体	検査項目	評価結果
IAEA-TERC-2023-01 World Wide Open Proficiency Test Exercise	国際原子力機関(IAEA)	Cs-134、Cs-137 Sb-125、Co-60	良好
福島県放射能分析精度管理事業	福島県環境創造センター	Cs-134、Cs-137	良好

2 有機農業推進室の業務実績

(1) 有機農業推進担当者等連携会議の開催

有機農業の技術確立、普及を目的とし、次のとおり開催した。

回	開催月日	内 容
第1回	4月11日	環境にやさしい農業拡大推進事業について、有機農業の推進体制について
第2回	6月20日	双葉地域実証ほの見学、普及活動の推進状況等について
第3回	8月22日	会津地域実証ほの見学、普及活動の推進状況等について
第4回	10月24日	普及活動の推進状況等について、実証ほの中間検討会について、環境にやさしい農業セミナーについて
第5回	12月19日	普及活動の推進状況等について
第6回	2月20日	普及活動の年間推進状況等について、令和6年度環境にやさしい農業拡大推進事業案等について

(2) 有機農業技術実証の取組

応用的技術の実証・確立や、各地方の実態を踏まえた有機農業の推進活動を展開するため、県内6か所に有機農業実証ほを設置した。

No	作物	実証地区	担 当	実証内容	結 果
1	水稻	福島市	農業総合センター 有機農業推進室	有機栽培「福、笑い」での栽培特性把握	慣行の栽培暦を基に、幼穂形成期の葉色値から追肥判断を行うことで、有機栽培で477kg/10aの「福、笑い」を生産することができた。
2	スイートコーン	郡山市	農業総合センター 有機農業推進室	スイートコーン有機栽培における、BT剤によるアワノメイガの適期防除の検証	BT剤散布、雄穂除去それぞれにアワノメイガの被害抑制効果が確認できたものの、雄穂除去のみでは効果が限定的であり、BT剤と雄穂除去の組み合わせで効果が高いことが確認された。
3	水稻	会津美里町	会津農林事務所 農業振興普及部	水稻有機栽培における自動抑草ロボットの抑草効果	アイガモロボと除草機処理を組み合わせることで、抑草効果が高まることが確認された一方で、効果を十分に発揮させるためには、ほ場の均平と水深の確保が重要と考えられた。
4	トマト	磐梯町	会津農林事務所 農業振興普及部	太陽熱養生処理による土壌物理性・化学性の改善効果の定量評価	土壌物理性・化学性の改善効果を定量的に評価するため、土壌硬度計や土壌分析により調査を行ったが、今回の検証では大きな変化は認められなかった。トマトの生育は、定植後の初期生育が優れる傾向が認められた。
5	水稻	いわき市	相双農林事務所 双葉農業普及所	県オリジナル品種「福、笑い」の有機栽培実証	浜通り地方の有機栽培でも「福、笑い」の品質基準を満たすことが確認された。
6	ナス	檜葉町	相双農林事務所 双葉農業普及所	夏秋ナス有機栽培における反射資材活用による害虫対策の実証	シルバーマルチ及びシルバーテープはアブラムシ類の忌避対策に効果的であると考えられた。

(3) 各種技術研修会等の開催

有機農業技術に関する栽培技術や販路拡大の支援、実需者などの理解促進を図るため、研修会などを開催した。

回	開催月日	場 所	研修名	内 容	参加者数
1	9月2日	農業総合センター	農業理解促進ミニ講座	有機農業理解促進のためのミニ講座を実施した。	親子 10組 26名
2	10月6日	福島市	桜の聖母短期大学学生向け理解促進講座	有機農業及び有機 JAS 認証制度等に関する講義に加え、生産者を講師として有機農業の取組事例についての講義と、ほ場見学・収穫体験を行った。	学生 20名
3	10月30日	福島市	福島学院大学短期大学部学生向け理解促進講座	有機農業及び有機 JAS 認証制度等に関する講義に加え、流通事業者を講師として有機農業の取組事例について講義を行った。	学生 33名
4	1月18日	郡山市	郡山女子大学短期大学部学生向け理解促進講座	有機農業及び有機 JAS 認証制度等に関する講義に加え、生産者を講師として有機農業の取組事例について講義を行った。	学生 31名
5	2月20日	農業総合センター	環境にやさしい農業セミナー	講演「化学合成農薬を使用しない雑草防除」講師 NPO 法人 民間稲作研究所 舘野 廣幸 氏 また、現地実証ほ成果報告（3か所）を行った。	64名

(4) 有機農業者組織への活動支援

有機農業者組織への活動支援を次のとおり行った。

対象組織名	支 援 内 容	活 動 月 日
福島県有機農業ネットワーク	総会	6月7日
Zero Vege (ゼロベジ)	県中方部有機農業者組織化のための勉強会	6月22日
	設立総会	7月8日
郡山環境保全農業研究会	研修会（舘野かえる農場視察）	7月27日
	定例会	10月23日
	総会	3月19日
オーガニックふくしま安達	定期勉強会	9月29日
	出荷反省会	12月8日
やまろく米出荷協議会	米の高温障害の原因と対策に関する説明会、有機栽培米生産の今年度反省会	12月23日

(5) 広報誌「オーガニック通信」の発行

有機農業推進のための各種情報を掲載した広報誌を3回発行した。

- 第1号（6月16日発行）
- 第2号（11月17日発行）
- 第3号（3月15日発行）

(6) 農業総合センター農業短期大学校での有機農業の講義・研修の実施

ア 本科2学年の学生に対して、6月から9月にかけて7回の講義を行った。

イ 就農研修(中級)有機農業講座の受講生7名に対して、研修を実施した。

6月7日 有機農業の基礎、ぼかし肥づくり実習(センター内)

6月15日 水稻有機栽培に関する講義・現地研修(センター内、郡山市有機現地ほ場)

8月9日 野菜有機栽培に関する講義・現地研修(センター内、郡山市有機現地ほ場)

VI 県民との交流・情報発信

1 交流事業

(1) 第16回農業総合センターまつり

新型コロナウイルス感染症拡大以降、4年ぶりに通常開催した。

会 場	開催月日	入場者数	内 容
本部	9/ 1(金)～ 2(土)	1,703 人 490 人(1 日) 1,213 人(2 日)	セミナー(農業技術、家庭菜園、有機農業)、センターツアー、農業技術相談、研究成果PR、クイズコーナー(玄米、大豆の粒数当て、1日に必要な野菜)、県内で問題となっている病害虫の展示、楽しい科学体験コーナー、農業機械・資材、動物愛護コーナー、キッチンカー
果樹研究所	9/ 8(金)	435 人	技術移転セミナー、技術・就農相談、研究成果展示、ほ場案内、農産物販売

(2) 農的楽しみセミナー

開催なし

(3) 子どもアグリ科学教室

開催なし

(4) イモ掘り体験学習

開催なし

(5) 第14回田んぼの学校 ※ 郡山市立高倉小学校の5年生、6年生児童を対象とした。

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	5/22	講義「米作りについて1」 実習「田植え」	作物園芸部稲作科 新妻 和敏	6 名
2	6/23	講義「米作りについて2」 実習「田車による除草作業」	作物園芸部稲作科 新妻 和敏	6 名
-	7/ 7	番外編～田んぼの生き物観察～	安全農業推進部指導・有機認証課 齋藤 伸考	9 名*
3	10/10	実習「稲刈りとはせ掛け作業」	作物園芸部稲作科 新妻 和敏	5 名
4	11/ 6	講義・実習「お米の食べ比べ」	作物園芸部品種開発科 薄 瑤子	6 名

* 1、2年生8名含む

(6) 農業総合センター農業短期大学校の取組

回	月 日	内 容	講 師	参加人数
1	5/22	サツマイモ苗の植付体験(中島村立中島幼稚園)	川島史寛	82 名
2	5/16	サツマイモ苗の植付体験(認定こども園ポプラの木)	川島史寛	32 名
3	10/30	サツマイモ苗の収穫体験(中島村立中島幼稚園)	川島史寛	82 名
4	10/18	サツマイモ苗の収穫体験(認定こども園ポプラの木)	川島史寛	92 名
5	4/17	果樹園見学(認定こども園ポプラの木)	阿部兼太郎	32 名
6	7/14	果樹園見学(認定こども園ポプラの木)	阿部兼太郎	31 名
7	8/30	果樹園見学(認定こども園ポプラの木)	遠藤敦史	32 名
8	10/ 3	果樹園見学(認定こども園ポプラの木)	阿部兼太郎	31 名
9	3/13	果樹園見学(認定こども園ポプラの木)	阿部兼太郎	27 名
10	8月～ 11月	講義 矢吹町との連携 実習 フロンティア農園(野菜作り)6回	猪狩 勉	93 名

2 視察見学者の受入状況

月	本 部					果樹研究所					畜産研究所				
	団体数				人数	団体数				人数	団体数				人数
	県内	県外		計		県内	県外		計		県内	県外		計	
		国内	国外				国内	国外				国内	国外		
4 月	0	0	3	3	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
5 月	2	0	0	2	2	0	3	0	3	6	0	0	0	0	0
6 月	6	4	1	11	185	2	3	0	5	147	0	0	0	0	0
7 月	7	10	0	17	217	3	11	0	14	183	0	0	0	0	0
8 月	1	2	1	4	78	3	7	0	10	180	1	0	0	1	1
9 月	3	2	0	5	75	1	2	0	3	13	12	0	0	12	12
10 月	4	5	1	10	189	2	6	0	8	95	0	0	0	0	0
11 月	5	12	0	17	229	4	2	0	6	19	0	0	0	0	0
12 月	1	2	0	3	58	1	2	0	3	113	0	0	0	0	0
1 月	3	0	2	5	50	4	2	0	6	33	0	0	0	0	0
2 月	1	1	2	4	38	1	2	0	3	20	0	0	0	0	0
3 月	2	0	1	3	25	1	2	0	3	40	0	0	0	0	0
計	35	38	11	84	1,164	22	42	0	64	849	2	0	0	2	13

月	会津地域研究所					浜地域研究所					浜地域農業再生研究センター				
	団体数				人数	団体数				人数	団体数				人数
	県内	県外		計		県内	県外		計		県内	県外		計	
		国内	国外				国内	国外				国内	国外		
4 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
5 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	11
7 月	1	1	0	2	25	1	0	0	1	15	0	0	0	0	0
8 月	1	0	0	1	26	2	0	0	2	25	2	0	0	2	11
9 月	0	0	0	0	0	0	1	0	1	20	0	0	0	0	0
10 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	30
11 月	0	1	0	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
12 月	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2
1 月	0	1	0	1	25	0	0	0	0	0	0	1	0	1	8
2 月	1	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3 月	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	3	4	0	7	115	3	1	0	4	60	4	3	0	7	64

月	総計				
	団体数				人数
	県内	県外		計	
		国内	国外		
4月	0	1	3	4	20
5月	2	3	0	5	8
6月	9	7	1	17	343
7月	36	22	0	34	440
8月	34	9	1	20	321
9月	5	5	0	10	120
10月	7	11	1	19	314
11月	39	15	0	24	278
12月	2	5	0	27	173
1月	32	4	2	13	116
2月	10	3	2	8	65
3月	5	3	1	7	67
計	181	84	11	168	2,265

注1) 人数は個人見学者と団体見学者の合計。畜産研究所は沼尻分場を含む。

注2) オンラインツアーへの対応含む(本部)。

3 施設の利用状況

(1) 多目的ホール、大会議室

ア 件数及び利用者数

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	2	35	3	230	7	280	12	545
5月	5	285	12	855	8	390	25	1,530
6月	7	510	7	330	18	740	32	1,580
7月	11	520	15	1,160	9	523	35	2,203
8月	6	570	11	750	6	230	23	1,550
9月	1	100	11	495	10	518	22	1,113
10月	4	380	13	1,196	5	305	22	1,881
11月	3	155	11	1,025	16	910	30	2,090
12月	4	161	7	590	10	595	21	1,346
1月	1	80	1	25	13	782	15	887
2月	9	695	0	0	17	818	26	1,513
3月	3	160	2	480	6	260	11	900
合計	56	3,651	93	7,136	125	6,351	274	17,138

イ 会場別（多目的ホール）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	0	0	3	230	4	185	7	415
5月	1	55	7	625	2	60	10	740
6月	2	230	4	270	5	360	11	860
7月	3	180	5	610	5	410	13	1,200
8月	0	0	7	530	2	110	9	640
9月	1	100	3	220	5	330	9	650
10月	3	300	7	690	3	250	13	1,240
11月	2	140	5	790	6	540	13	1,470
12月	2	120	4	460	4	330	10	910
1月	1	80	0	0	8	532	9	612
2月	8	630	0	0	7	324	15	954
3月	1	100	2	480	3	160	6	740
合計	24	1,935	47	4,905	54	3,591	125	10,431

ウ 会場別（大会議室）

月	農業関係		一般		県関係		合計	
	件数	人数	件数	人数	件数	人数	件数	人数
4月	2	35	0	0	3	95	5	130
5月	4	230	5	230	6	330	15	790
6月	5	280	3	60	13	380	21	720
7月	8	340	10	550	4	113	22	1,003
8月	6	570	4	220	4	120	14	910
9月	0	0	8	275	5	188	13	463
10月	1	80	6	506	2	55	9	641
11月	1	15	6	235	10	370	17	620
12月	2	41	3	130	6	265	11	436
1月	0	0	1	25	5	250	6	275
2月	1	65	0	0	10	494	11	559
3月	2	60	0	0	3	100	5	160
合計	32	1,716	46	2,231	71	2,760	149	6,707

(2) 開放実験室

(利用件数)

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
件数	2	1	2	0	0	9	27	16	4	0	2	0	63

(3) 図書室
ア受入れ書籍類

項 目	冊 数
図書類	38 冊
雑誌類	242 冊
資料類	57 冊

イ県民貸出冊数

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
貸出者数	3	4	2	7	3	1	2	0	6	0	1	1	30
貸出冊数	3	5	2	18	4	1	3	0	13	0	4	2	55

4 研究成果の発表

(1) 学会等研究発表

No	所 属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
1	安全農業推進部	藤田剛輝 日下部翔平	福島県におけるリンゴ褐斑病の初発時期の早期化と一次感染期の推定	日本植物病理学会東北部会	2023.9
2		藤田剛輝 小松健太郎	フレールモアを用いた落葉処理によるナシ黒星病に対する防除効果	日本植物病理学会九州部会	2023.11
3		藤田剛輝 瀧田 誠一郎 小松健太郎	福島県におけるナシ黒星病の発生状況と殺菌剤の削減に向けた試験研究について	令和5年度果樹研究会	2024.2
4		金澤 優紀 東條 浩幸	福島県におけるイネカメムシの発生と被害	第77回北日本病害虫研究発表会	2024.2
5		瀧田 誠一郎 藤田 剛輝	福島県におけるナシ黒星病の秋型病斑の発生について	第77回北日本病害虫研究発表会(ポスター発表)	2024.2
6		藤田剛輝 瀧田誠一郎	福島県におけるナシ黒星病の感染危険度の地域特性解析の試み	第77回北日本病害虫研究発表会	2024.2
7	企画経営部	廣瀬 允康 萩原 瞳 成田 元樹	豪雪地帯における複数獣種に対応した柵の検討登耐雪性評価	令和5年度(第66回)東北農業試験研究発表会	2023.8
8		池田 健一 小貫 恵	農業用水利施設管理省力化ロボットの開発	2023年度(第64回)農業農村工学会東北支部岩手大会	2023.11
9	生産環境部	前原 瞳 山田 真孝	営農管理支援ソフトを用いた福島県浜通り地域の農業経営体における防除実態の把握	第77回北日本病害虫研究会	2024.2
10		堀越 紀夫 佐藤 優平 穴戸 邦明	ユーカリに発生した <i>Stemphylium</i> sp. による斑点落葉病(新称)について	第77回北日本病害虫研究会	2024.2
11		井倉 将人 藤村 恵人 八代沙絵子 大越 聡 湯田美菜子 齋藤 正明	福島県内農地(水田および畑地)における農作物および土壌中放射性セシウム濃度変動	日本土壌肥料学会 2023年度愛媛大会	2023.9
12	作物園芸部	大寺 真史 吉川 学	福島県における秋播性小麦品種の単収を高める栽培方法の検討	日本作物学会第257回講演会	2024.3
13		横山亮平 米澤千夏 松波寿典 高村光輝 天谷香織 市川健 佐藤慶治 齋藤正頼 鈴木幸雄	ドローンリモートセンシングによる施肥量の異なる乾田直播水稻圃場の観測	第74回リモートセンシング学会(ポスター発表)	2023.6

No	所 属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
14	作物園芸部	渡邊洋一 笹川正樹 渡邊和弘	福島県における雑草イネ防除対策	日本作物学会東北談話 会第 66 講演会	2023. 8
15		松波寿典 屋比久貴之 小野寺恒雄 小野寺博稔 佐々木周平 新妻和敏 渡邊洋一 長島泰一 山崎哲	疎播疎植ペースト 2 段施肥による水稻栽培 法	日本作物学会第 257 回 講演会	2024. 3
16		八木田靖司	福島県における秋まきタマネギ直播栽培 の雑草防除体系の検討	第 66 回東北農業試験研 究発表会	2023. 8
17	果樹研究所	日下部翔平 藤田 剛輝	福島県における多目的防災網設置による モモせん孔細菌病の防除効果	日本植物病理学会東北 部会	2023. 9
18		日下部翔平	モモせん孔細菌病の物理的な防除対策	令和 5 年度果樹病害研 究会	2024. 2
19		日下部翔平 七海 隆之	雨よけハウスの継続設置によるモモせん 孔細菌病の発生抑制効果と防除薬剤削 減の検討	第 77 回北日本病害虫 研究発表会	2024. 2
20		小松健太郎 日下部翔平	リンゴ褐斑病の二次感染期におけるピラジ フルミド水和剤の防除効果	第 77 回北日本病害虫研 究発表会	2024. 2
21		日下部翔平	モモせん孔細菌病に対するセルロースナノ ファイバーの防除効果	令和 6 年度日本植物病 理学会大会	2024. 3
22		中村 傑 高橋 佳大 中村 淳	リンゴ園における下草管理及び気門封鎖 剤を活用した防除体系がハダニ類及びカ ブリダニ類の発生に及ぼす影響	第 27 回農林害虫防除研 究会和歌山大会	2023. 8
23		中村 傑	福島県の果樹栽培におけるカイガラムシ 類の被害と対策	令和 5 年度果樹虫害研 究会	2024. 2
24		中村 傑	福島県におけるハダニ類の防除	東京農業大学総合研究 所研究会生物的防除部 会 2023 年度第 3 回オン ライン講演会	2024. 2
25		中村 傑 高橋 佳大 中村 淳	リンゴにおけるネオニコチノイド系殺虫剤 削減防除体系が害虫及び天敵の発生に 与える影響	第 77 回北日本病害虫研 究発表会	2024. 2
26		馬目 里沙 大森 千明 中村 傑 高橋 佳大 中村 淳	福島県相馬市のナン園におけるチャノキイ ロアザミウマの発生活長および被害実態	第 77 回北日本病害虫研 究発表会	2024. 2
27		中村 傑 高橋 佳大 中村 淳	福島県のモモ栽培におけるウメシロカイガ ラムシとクワシロカイガラムシの同時防除 の検討	日本昆虫学会第 84 回大 会・第 68 回日本応用動物 昆虫学会大会合同大会	2024. 3
28		高橋佳大 中村 淳 中村 傑	ツヤハダゴマダラカミキリの街路樹におけ る発生活長およびリンゴに対する寄生リス ク調査(第2報)	第 77 回北日本病害虫研 究発表会	2024. 2
29		高橋 佳大 中村 傑 中村 淳	ツヤハダゴマダラカミキリのリンゴとトチノ キに対する選好性の調査	日本昆虫学会第 84 回大 会・第 68 回日本応用動物 昆虫学会大会合同大会	2024. 3
30	畜産研究所	原 恵	福島県の肉用牛復興に向けた畜産研究 所の取組	第 60 回肉用牛研究会	2023. 10

No	所 属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
31	会津地域研究所	小森 秀雄 平山 孝	エゴマ在来種の特性	第 66 回日本作物学会東北談話会	2023.8
32	浜地域研究所	三田村敏正	福島県における外来カミキリムシの発生状況と対策	東北昆虫学会第 4 回大会	2023.9
33		三田村敏正 高橋 賢臣 吉田 裕介 東崎昭弘 本多 貴之	天蚕が産出する絹糸への放射性セシウムの濃縮動態解明のための絹糸腺発育調査	第 28 回日本野蚕学会大会	2023.10
34		佐藤弘一	水稻作柄解析試験データを利用した「天のつぶ」の特性把握	日本作物学会東北談話会	2023.8
35	浜地域農業再生研究センター	岡田 将幸 百田 佐多 生吉田 武 谷垣 実 齋藤 隆 平山 孝 佐藤 優平 浅枝 諭史 星 典宏	土壌放射性セシウムの簡易深度分布測定法	第 60 回アイソトープ・放射線研究発表会	2023.7
36		松岡 宏明 久保 堅司 平山 孝 菅野 拓朗 佐藤 孝	福島県浜通り地域における除染後農地でのマメ科緑肥を活用したソバ栽培実証	2023 年度日本土壌肥料学会東北支部大会	2023.7
37		佐藤 優平 山下 善道 稲葉 修武 内藤 裕貴 星 典宏	営農再開地域のストック及びトルコギキョウ栽培における通い農業支援システムの活用と評価	第 66 回 東北農業試験研究発表会	2023.8
38		山下 善道 内藤 裕貴 佐藤 優平 稲葉 修武 星 典宏	花き栽培ハウスでの栽培状況可視化を目的とした安価なネットワークカメラを用いた画像収集・通知システムの検討	農業環境工学関連学会 2023 年合同大会	2023.9
39		浅枝 諭史 吉田 雅貴 平山 孝 菊池 幹之 齋藤 隆 八戸 真弓 丸山 隼人 信濃 拓郎	福島県内の農地における放射性物質に関する研究(第 60 報)ー除染後農地における各種野菜のかり施肥による放射性セシウム吸収抑制効果ー	日本土壌肥料学会 2023 年度愛媛大会	2023.9
40		塚田 祥文 齋藤 隆 平山 孝 松岡 宏明 中尾 淳	田面水および間隙水中 ^{137}Cs 濃度の変化とイネへの移行	日本土壌肥料学会 2023 年度愛媛大会	2023.9
41		井上 吉雄 吉野 邦彦 古館 正行 丹 優太郎 平山 孝	ハイパースペクトル計測による土壌肥沃度の計量と改善ー圃場内変異解消と炭素貯留量の増強	日本作物学会第 256 回講演会	2023.9
42		佐藤 優平 堀越 紀夫	ユーカリ斑点落葉病(仮称)に対する罹病性の品種間差及び防除薬剤の探索	第 77 回北日本病害虫研究発表会	2024.2

No	所 属	発表、講演者	演 題	名 称 等	年 月
43	浜地域農業 再生研究セ ンター	小椋 智文 木幡 裕介 浅井 元朗	タマネギ秋まき移植栽培におけるベンタゾ ン液剤の秋冬期処理によるカラシナ防除 効果	第 27 回東北雑草研究会	2024. 3
44		藤原 英司 齋藤 隆 浅枝 諭史 矢ヶ崎泰海	福島県東部における放射性セシウムの降 下量及び大気濃度の推移	第 25 回環境放射能研究 会	2024. 3
45		松岡 宏明 菅野 拓朗 安藤 利雄 長沼 久雄 平山 孝	福島県浜通りの除染後農地におけるマメ 科緑肥ペルシアンクローバを活用したソバ 栽培とセイヨウミツバチとの耕蜂連携の実 証	復興農学会 2023 年度研 究会	2024. 3

※ 斜体字は当機関外所属

(2) シンポジウム等講演

No	所 属	講演者	内 容	名 称 等	年 月
1	安全農業推進部	二宮 朋子	福島県農業総合センターに おける放射能分析の取組み	第237回農林交流センターワークショ ップ「食品を対象とした放射能分析(初級者向け)」	2023. 11
2	果樹研究所	岡田 初彦	福島県における近年の成果 と課題(栽培&育種)	令和5年度寒冷地果樹研究会	2024. 1
3		佐久間宣昭	果樹栽培における凍霜害対 策	県北地方園芸振興セミナー	2024. 2
4	畜産研究所	矢内 伸佳	家畜育種とゲノミック評価	福島大学 農学群 食農学類 講義:「畜産学概論」	2023. 7
5		萩原 瞳	福島県の飼料作物の現状と 課題	福島大学 農学群 食農学類 講義:「飼料資源学」	2023. 7
6		原 恵	福島県の肉用牛の現状と課 題	福島大学 農学群 食農学類 講義:「飼料資源学」	2023. 7
7		原 恵	県基幹種雄牛「隆福久」号に ついて	令和5年度家畜人工授精業務に係る 法令研修会	2024. 3
8	浜地域農業 再生研究セ ンター	平山 孝	福島県浜通りにおける東日 本大震災の影響と農業復興 に向けた取組	第4回福島ワークショップ@会津	2023. 11
9		浅枝 諭史	浜通りの野菜類の安全性評 価に関する研究について	第4回福島ワークショップ@会津	2023. 11
10		平山 孝	福島県の除染後農地におけ る営農再開上の課題と対策	F-REIリサーチビジョンセッション (RVS)農林水産分野土壌領域	2023. 12
11		平山 孝	除染後農地における緑肥作 物活用による畜産堆肥・化 成肥料の代替実証(ポスター 発表)	エフレイ・フォーラムー環境動態評価 を活かしたまちづくりー	2024. 2

(3) 学会誌等投稿

No	所 属	著 者	題 名	発表誌名	巻(号)頁	年 月
1	生産環境部	Mariko Furukawa, Hitomi Shikano, Yukino Watanabe, Makoto Muto, Daisaku Kaneko, and Shu Taira	Visualization of Nutrients and Functional Compounds of Asparagus (<i>Asparagus officinalis</i> L.) by Imaging Mass Spectrometry	Sensors and Materials	Volume 36, Num ber 3(1)	2024. 3
2	作物園芸部	渡邊洋一 笹川正樹 渡邊和弘	福島県における雑草イネ防除対策	東北作物研究	第 66 号 P21-22	2023. 12

No	所 属	著 者	題 名	発表誌名	巻(号)頁	年 月
3	作物園芸部	八木田靖司	福島県における秋まきタマネギ直播栽培の雑草防除体系の検討	東北農業研究	第 76 号 P71	2023.12
4	果樹研究所	中村 傑 吉田 昂樹 高橋 佳大 中村 淳	ナシ栽培におけるミヤコカブリダニ放飼およびカブリダニ類に対して影響の小さい防除体系がハダニ類およびカブリダニ類の発生に及ぼす影響	北日本病害虫研究会報	74:104-111.	2023.12
5		高橋 佳大 中村 傑 中村 淳	ツヤハダゴマダラカミキリの街路樹における発消生長およびリンゴに対する寄生リスク調査(第1報)	北日本病害虫研究会報	74:100-103.	2023.12
6	会津地域研究所 浜地域研究所	吉岡明良 三田村敏正 大内博文 趙 在翼 松木伸浩 田淵 研	東電福島第一原発事故に伴う帰還困難区域における水田試験地へのアカネ類の迅速な定着	北日本病害虫研究会報	第 74 号 P56-60	2023.12
7	会津地域研究所 浜地域農業再生 研究センター	小森 秀雄 平山 孝	エゴマ在来種の特性	東北作物研究	第 66 号 P31-32	2023.12
8	浜地域研究所	佐藤弘一	水稻作柄解析試験データを利用した「天のつぶ」の特性把握	東北作物研究	第 66 号 P19-20	2023.12
9	浜地域農業 再生研究セ ンター	小椋 智文 木幡 裕介 浅井 元朗	福島県相双地域のタマネギ秋まき移植栽培におけるタマネギ生育期の除草剤処理によるカラシナ防除効果	東北雑草研究会会報誌「東北の雑草」	第 22 号 P14-17	2023.6
10		佐藤優平 山下善道 稲葉修武 内藤裕貴 星典宏	営農再開地域のストック及びトルコギキョウ栽培における通い農業支援システムの活用と評価	東北農業研究	第 76 号 91-92	2023.12

※ 斜体字は当機関外所属

(4) 雑誌等投稿

No	所 属	著 者	題 名	発表誌名	巻(号)頁	年 月
1	生産環境部	堀越 紀夫	露地ギクの白さび病 挿し穂の温湯処理&感染リスクがわかるフローチャート	現代農業	2023 年 6 月号	2023.6
2	果樹研究所	佐久間宣昭	スマート農業について・防霜対策のための技術開発	信州の果実	No.805 P24-27	2023.6
3		志村 浩雄	福島県 果樹王国は福島にあった	群羊社 土の教え 日本編	P12-13	2023.7
4		中村傑	果樹害虫の最近の動向と防除対策(9)福島県におけるリンゴ害虫の発生動向と防除対策	果実日本	Vol.78 P12-15	2023.10
5		佐久間宣昭	効果的な防霜対策のための凍霜害危険度推定シート	果実日本	Vol.78 P16-18	2023.11
6		佐藤寛人	ジョイントV字樹形によるニホンナシ「甘太」及び「王秋」の早期成園化	果実日本	Vol.79 P58-61	2024.1
7	畜産研究所	萩原 瞳	特定復興再生拠点での飼料作物栽培について	畜産福島	第 640 号	2023.7
8		尾形 賢治	酒粕ペレットを給与した豚の食味特性に関する研究	畜産福島	第 641 号	2023.9
9		吉田 朋恵	農場における野生動物による感染症リスクについて	畜産福島	第 642 号	2023.11

No	所 属	著 者	題 名	発表誌名	巻(号)頁	年 月
10	畜産研究所	小松 一樹	新基幹種雄牛「隆福久」デビュー	畜産福島	第 643 号	2024. 1
11		小松 一樹	福島県種雄牛造成トピックス ～「隆福久」と「姫芝桜」のご紹介～	畜産福島	第 644 号	2024. 3
12	浜地域研究所	三田村敏正 吉田 祐介 高橋 賢臣 ほか	天蚕が産出する絹糸への放射性セシウムの濃縮動態解明のための絹糸腺発育調査	野蚕	No. 93 p. 8.	2023. 12
13		吉田 祐介 三田村敏正 高橋 賢臣 ほか	天蚕(ヤママユ)が産出する絹糸への放射性セシウムの濃縮動態解明—セシウム摂取時のヤママユ幼虫における体内のセシウム残存量について	野蚕	No. 93 p. 10-11.	2023. 12
14		大原理彩子 吉田 祐介 高橋 賢臣 三田村敏正 ほか	福島県の蚕糸業復興に向けて	野蚕	No. 93 p. 9-10.	2023. 12

※ 斜体字は当機関外所属

※ 畜産福島は著者名を所属として投稿

5 刊行物

刊 行 物 名	発行年月	発行部数
令和4年度農業総合センター業務年報	2023. 8	※
令和5年度福島県農業総合センター研究成果集	2024. 3	※
農業総合センターだより 第7号	2023. 6	7,500

※ 農業総合センターホームページに掲載

6 主要作物の生育情報の提供

内 容	提供回数	月 日
作況情報※	水稻生育状況 14	6/6、6/13、6/20、6/27、7/4、7/11、7/18、7/25、8/1、8/15、9/5、9/13、9/19、3/25
	大豆生育状況 4	7/24、8/16、9/1、1/12
	麦類生育状況 7	R4年産 12/10、2/15、3/7、3/25、4/4、5/6、8/17 R5年産 12/26、2/20、3/6、3/23、4/3、4/26、5/1、6/6
果樹の生育概況	20	R5 4/1、4/11、4/21、5/1、5/15、6/1、6/15、7/3、7/18、8/1、8/16、9/1、9/15、10/2、10/16、11/1、12/1、
		R6 3/1、3/11、3/21

※ 農業総合センターホームページに掲載

7 インターネットによる情報提供

- (1) 農業総合センターホームページにおいて、各種技術情報、交流事業の情報等の提供を行った。
ホームページアクセス数(トップページアクセス数)

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1,772	1,684	2,344	2,471	2,718	2,179	1,557	1,450	1,191	1,134	1,393	—	—

※1 ホームページのアクセス件数はボット（プログラムによる自動アクセス）を除いた数としている。

※2 3月のアクセス件数不明のため、合計数とともに未記載とした。

- (2) 農業総合センターホームページ内に「ラウンド農ふくしま Web」を設け、これまで広報誌で発信していた業務やイベント紹介等の情報発信を行った。

令和5年4月～令和6年3月 掲載記事数 13件、ページアクセス数合計 641

- (3) 農業総合センター浜地域研究所 Facebook (<https://www.facebook.com/nogyocentre.hama/>)において、情報発信を行った。

令和5年4月～令和6年3月 掲載記事数 8件、リーチ数合計 651

8 マスメディアによる報道

※ 媒体 新：新聞、雑：雑誌、テ：テレビ、イ：インターネット、他：その他

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
1	新	4/6	日本農業新聞	シャイン花咲かぬ怪～15県で確認 減収でも「原因不明」	果樹研究所
2	新	4/11	福島民報新聞	農業経営の道へ一歩 アグリカレッジ福島入校式	農業短期大学校
3	新	4/16	朝日新聞	東北の花々 世界で咲く	会津地域研究所
4	新	4/21	福島民友新聞	浜通りスマート農業 英自然環境相「参考」知事と会談	企画経営部
5	テ	5/11	テレビユー福島	福島県がモモハモグリガ注意報発表	安全農業推進部
6	新	5/12	福島民報新聞	福島県がモモハモグリガ注意報発表	安全農業推進部
7	新	5/12	福島民友新聞	福島県がモモハモグリガ注意報発表	安全農業推進部
8	新	5/12	農業協同組合新聞	福島県がモモハモグリガ注意報発表	安全農業推進部
9	新	5/13	福島民友新聞	大玉「福、笑い」田植え	農業短期大学校
10	新	5/13	福島民報新聞	「福、笑い」植え笑顔 大玉知事ら普及願い田植え	農業短期大学校
11	新	5/16	読売新聞	コメ新品種 比較へ田植え	作物園芸部
12	新	5/18	日本農業新聞	水稻の苗1400種 一斉に田植え	作物園芸部
13	新	5/25	福島民友新聞	泥んこ田植えに夢中 高倉小 5、6年生	企画経営部
14	新	5/30	日本農業新聞	良食味選定へ 有望系統定植	会津地域研究所
15	新	6/2	日本農業新聞	加盟校が熱戦	農業短期大学校
16	イ	6/5	時事通信	牛の肉質、AIが事前評価＝コスト低減、競争力強化へ	畜産研究所
17	新	6/14	福島民友新聞	本県と農業交流打診 リトアニア大使表敬	安全、企画
18	新	6/21	日本農業新聞	直売実習スタート アグリカレッジ福島	農業短期大学校
19	テ	6/24	福島中央テレビ	アグリカレッジ福島のオープンキャンパスに行こう	農業短期大学校
20	新	6/29	読売新聞	水稻「直播」相双で拡大	企画経営部
21	新	7/2	福島民友新聞	病害から作物守る 郡山で農業研修会	生産環境部
22	新	7/8	日本農業新聞	収獲機 花蕾大きき判別	企画経営部
23	イ	7/11	福島県の「今」を伝える復興支援ポータルサイト	福島が育てた奇跡の桃「あかつき」	果樹研究所

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
24	新	7/13	日本農業新聞	アグリカレッジで直売(告知板)	農業短期大学校
25	新	7/21	福島民報新聞	学校の特色紹介 アグリカレッジオープンキャンパス	農業短期大学校
26	新	7/27	日本農業新聞	国際協力機構(JICA)筑波センター外国人研修員の県内研修	企画、有機、作物
27	新	7/27	福島民報新聞	「福乃香」生産拡大の集い	作物園芸部
28	新	7/29	福島民報新聞	JICA研修員 本県農業学ぶ	企画、有機、作物
29	雑	8月号	家の光	ルポ・牧場の明日	農業短期大学校
30	新	8/ 2	日本農業新聞	JICA研修員 総合センター視察	企画、有機、作物
31	新	8/ 2	福島民友新聞	カメムシ発生注意報 県病害虫防除所	安全農業推進部
32	新	8/ 8	日本農業新聞	アグリカレッジで直売(告知板)	農業短期大学校
33	新	8/10	日本農業新聞	トルコギキョウ最前線	作物園芸部
34	新	8/11	福島民報新聞	2023年県産米抽出検査始まる	安全農業推進部
35	新	8/12	日本農業新聞	23年産米「五百川」抽出検査始まる	安全農業推進部
36	テ	8/16	福島放送	直売実習(8月9日)における学生の販売準備・販売風景などの紹介	農業短期大学校
37	新	8/19	日本農業新聞	トルコギキョウ栽培法学ぶ	作物園芸部
38	新	8/19	日本農業新聞	トルコギキョウ栽培法学ぶ生産者見学会	作物園芸部
39	イ	8/22	農業協同組合新聞	トマトキバガ県内初確認、特殊法発表	安全農業推進部
40	新	8/23	福島民報新聞	トマトキバガ県内初確認、特殊法発表	安全農業推進部
41	新	8/23	日本農業新聞	トマトキバガ県内初確認、特殊法発表	安全農業推進部
42	新	8/24	福島民友新聞	トマトキバガ県内初確認、特殊法発表	安全農業推進部
43	テ	8/25	NHK	トマトキバガ県内初確認、特殊法発表	安全農業推進部
44	新	8/25	福島民報新聞	農業交流に意欲	作物園芸部
45	新	9/ 2	福島民友新聞	農産物販売や技術相談	企画経営部
46	新	9/ 2	福島民報新聞	農業総合センターまつり	企画経営部
47	新	9/ 7	福島民友新聞	県農業総合センター懇談会	企画経営部
48	新	9/ 7	福島民報新聞	県農業総合センター有識者懇談会	企画経営部
49	新	9/ 8	福島民友新聞	農業総合センターまつり果樹研究所会場	果樹研究所
50	新	9/ 9	福島民友新聞	果樹栽培で研究成果 農業総合センターまつり	果樹研究所
51	新	9/12	朝日新聞	生食ブロッコリー収穫機の開発進む	企画経営部
52	新	9/17	福島民報新聞	農業総合センターまつり	企画経営部
53	新	9/21	福島民報新聞	スマート農業 実用化へ	農業短期大学校
54	テ	9/23	福島中央テレビ	おしえて!キビタン「農業を身近なものに」	企画経営部
55	新	9/28	福島民報新聞	知事ら「福、笑い」稲刈り	農業短期大学校
56	新	9/28	農業協同組合新聞	ハスモンヨトウ誘殺数急増 注意報発表	安全農業推進部
57	新	9/28	福島民報新聞	ハスモンヨトウ誘殺数急増 注意報発表	安全農業推進部
58	新	9/28	福島民友新聞	ハスモンヨトウ誘殺数急増 注意報発表	安全農業推進部
59	テ	10/ 3	NHK	ハスモンヨトウ誘殺数急増 注意報発表	安全農業推進部
60	新	10/ 3	福島民報新聞	論説 県産モモの振興 新品種の開発が急務	果樹研究所
61	テ	10/ 4	福島テレビ	ハスモンヨトウ誘殺数急増 注意報発表	安全農業推進部
62	新	10/18	福島民報新聞	アグリカレッジ福島22日に檸檬祭	農業短期大学校

No	媒体	掲載・放送日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
63	新	10/22	福島民報新聞	本宮のT・ユニオンデーリイが最高賞	畜産研究所
64	新	10/25	福島民報新聞	学校祭で野菜やスイーツ販売アグリカレッジ福島	農業短期大学校
65	新	10/29	日本農業新聞	福島県ホルスタイン共進会	畜産研究所
66	新	11/ 5	福島民友新聞	本宮でホルスタイン共進会	畜産研究所
67	新	11/ 7	日本農業新聞	カスミノウ切り花 圧縮包装で輸出	会津地域研究所
68	新	11/ 7	日本農業新聞	病害虫図鑑 樹勢低下、栽培困難に モモせん孔細菌病	果樹研究所
69	テ	11/16	福島放送	米の食味試験パネラー選抜の実施	作物園芸部
70	新	11/21	福島民報新聞	県農業短大施設統合 整備工事の安全願う	農業短期大学校
71	新	11/21	福島民友新聞	農業短期大学校の施設工事安全願う	農業短期大学校
72	新	11/23	福島民報新聞	高校生ら対象に白河で就農相談 ふくしま農業人フェア	農業短期大学校
73	新	11/29	福島民友新聞	コメ食味パネラー選抜へ100人を試験 県農業センター	作物園芸部
74	テ	12/ 1	NHK	米の食味試験の実施	作物園芸部
75	新	12/ 3	福島民報新聞	県鉢花品評会、きょう一般公開	作物園芸部
76	新	12/ 3	福島民友新聞	福島 県鉢花品評会に99点	作物園芸部
77	新	12/12	福島民報新聞	共同でカフェメニュー考案 アグリカレッジ福島と	農業短期大学校
78	新	12/27	福島民友新聞	耐暑性品種開発に注力	作物園芸部
79	新	1/ 9	日本農業新聞	リング剪定学ぶ	果樹研究所
80	テ	1/10	福島テレビ	アグリカレッジ福島で農業を学ぼう	農業短期大学校
81	新	1/19	福島民友新聞	「隆福久」基幹種雄牛に来月デビュー	畜産研究所
82	新	1/19	福島民報新聞	基幹種雄牛に「隆福久」県内初ゲノミック評価で選定	畜産研究所
83	新	1/23	日本農業新聞	基幹種雄牛に「隆福久」	畜産研究所
84	新	1/24	毎日新聞	基幹種雄牛に「隆福久」を認定	畜産研究所
85	テ	1/24	福島テレビ	新基幹種雄牛「隆福久」を紹介	畜産研究所
86	新	1/26	日本農業新聞	新規就農の参考に農大生らと交流	農業短期大学校
87	新	1/26	日本農業新聞	青森の農家からリング剪定学ぶ	果樹研究所
88	新	1/30	福島民報新聞	知事に海外での情報発信を誓う 移住者子弟研究生4人	企画経営部
89	新	2/ 3	福島民報新聞	県が新酒米開発本格化	作物園芸部
90	新	2/17	福島民友新聞	リング県オリジナル品種 「べにこはく」に高温耐性	果樹研究所
91	新	2/17	福島民報新聞	県オリジナル品種のリング「べにこはく」蜜入り猛暑でも十分	果樹研究所
92	新	2/18	福島民報新聞	オタネニンジン 会津の伝統再び根付け	会津地域研究所
93	新	2/18	福島民友新聞	28日から研究成果発表会 県農業総合センター、全5回	企画経営部
94	新	2/25	福島民報新聞	オタネニンジン産地再興へ 温泉施設で種まき 美里共同プロジェクト始動	会津地域研究所
95	新	2/26	福島民報新聞	あかつき 収穫ピーク9日早まる 2016～2023年の平均 温暖化の影響か	果樹研究所
96	新	2/26	福島民友新聞	高温下での果樹の生産対策を学ぶ	果樹研究所
97	新	3/ 7	福島民報新聞	研究成果発表会 蜜入り最大に迫る 昨年収穫の県オリジナル品種リング「べにこはく」	果樹研究所
98	新	3/ 7	福島民友新聞	研究成果発表会 「べにこはく」の特性説明	果樹研究所
99	新	3/ 9	日本農業新聞	福島農短大校 就農46%	農業短期大学校
100	新	3/ 9	福島民友新聞	農業の道へ45人	農業短期大学校

No	媒体	掲載・放送月日	掲載紙・報道局	報道内容	取材対応等
101	新	3/10	福島民報新聞	農業に情熱 45人が卒業	農業短期大学校
102	テ	3/13	NHK WORLD	Beyond Recovery The New Future of Fukushima	浜地域農業再生研究センター
103	新	3/23	福島民報新聞	エフレイ、技術開発着手	企画経営部
104	新	3/23	福島民報新聞	県産モモ 新品種開発へ	果樹研究所

9 福島県インターンシップの受入れ

インターンシップを開催し、学生の受入れを行った。また、令和4年度県庁技術職ナビゲーター面談実施概要に従い、面談を実施した。

形式	受入部所	受入月日	所属団体
インターンシップ	畜産研究所	8/ 7- 8/10	日本大学生物資源学部
	生産環境部	8/21- 8/25	福島大学農学群食農学類
	作物園芸部	8/25- 8/29	新潟大学農学部農学科
	農業短期大学校	8/30- 9/ 1	福島大学農学群食農学類
	浜地域研究所	9/ 4- 9/ 8	新潟大学大学院自然科学研究科
	作物園芸部	9/26- 9/28	福島大学農学群食農学類

VII 職員・財産

1 職員数

(令和5年4月1日現在)

職 種	本 部	果 樹 研究所	畜 産 研究所	沼 尻 分 場	会津地域 研究所	浜地域 研究所	浜地域農業 再生研究センター	農業短期 大学校	計
行政職	42(29)	2	2	1	1	1	1	32(28)	82(57)
研究職	68	16	22	3	9	6	9	0	133
技能労務職	16	7	15	5	5	3	0	5	57
計	126(29)	25	39	9	15	10	10	37(28)	272(57)

()は技術職員の内数

2 施設・ほ場の面積及び飼養家畜数

(1)施設・ほ場の面積

区 分	建 物		宅 地 (ha)	田 (ha)	畑 (ha)	山 林 (ha)	原 野 (ha)	その他 (ha)
	棟数	面積(m ²)						
農業総合センター (内訳)	67	28,886.54	12.1	12.5	19.2	3.2	0.3	5.2
交流棟	1	2,594.49						
管理研究棟・実験 棟	1	7,039.93						
付属施設(建物)	65	19,252.12						
果樹研究所 (内訳)	28	4,749.41	1.9		8.1			
庁舎	1	1,680.86						
付属施設(建物)	27	3,068.55						
畜産研究所 (内訳)	74	18,042.52	19.1		40.4	2.7		
庁舎	1	1,166.48						
付属施設(建物)	73	16,876.04						
沼尻分場 (内訳)	26	6,548.72	8.6		114.9	121.6		3.3
庁舎	1	132.68						
付属施設(建物)	25	6,416.04						
会津地域研究所 (内訳)	18	6,828.75	4.6	9.7	5.5			1.3
庁舎	1	2,442.59						
付属施設(建物)	17	4,386.16						
浜地域研究所 (内訳)	15	1,508.52	0.6	2.4	1.0			
庁舎	1	472.50						
付属施設(建物)	14	1,036.02						
浜地域農業再生研究センター (内訳)	2	692.51	0.3					
庁舎	1	478.01						
作業所棟	1	214.50						
農業短期大学校 (内訳)	56	19,791.99	5.7	5.1	23.3	9.8	3.0	5.0
校舎	1	2,002.36						
附属施設(建物)	55	17,789.63						

(2)飼養家畜数

ア 牛、豚及び鶏の飼養頭(羽)数

区 分	乳用牛			肉用牛						豚				鶏		
	経産	育成	子牛	種雄	雌牛	育成	子牛	直検	待機	供卵	肥育	種雄	種雌	子豚	肥育	種
	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	豚	豚	豚	豚	鶏
畜産研究所	38	13	14	6	-	-	-	11	11	11	27	19	45	173	171	718
畜産研究所沼尻分場	-	-	-	-	80	-	42	-	-	-	18	-	-	-	-	-
農業短期大学校	9	5	1	-	11	-	12	-	-	-	6	-	-	-	-	-

※ 令和6年3月31日現在

令和5年度 福島県農業総合センター業務年報

令和6年6月

福島県農業総合センター

〒963-0531 福島県郡山市日和田町高倉字下中道116番地

電話 024-958-1700

FAX 024-958-1726

<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200a/>
